

# 文藝復興



内藤千代子著  
博文館發賣







## ス井ートホーム

内藤千代子著

## ▲ 歡 樂 之 卷 ▼

夜來の雨晴れて一天ぬぐふた様な好天氣、萬物みな薄紅にいきいきと、雲雀は例の轉がすやうな聲を虚空から振り落して居る。樂しげな番の白胡蝶はひらくと朝露の中を舞蹈して居る。私の氣持までこの芝生のやうにスク〜とのびるやうな朝である。力一杯の深呼吸して後裏庭へまはつて見ると、半開の桃が露を帯びた艶な風情……母様は花鉄鳴らしながら佛様のお花を選んでゐらつしやる。あゝ、母様は急にお齡がおより遊ばした、半白の切り下げに茶萬筋の道行、四十八と云へばま

だ白粉つけてる人もあるのに……。あの丸鬘で紋附召した頃を思ひ浮べると、可笑しいやうな悲しい気がする。みんながもう「御隠居様」と云ふんですもの。

お手紙がまわりました、ときよが持つて来る。誰？ あら、篤様からよ……。うれ  
しい！ 胸を躍らせ急いで封をあける。こんな事がかいてある。

昨日赤門を出る途端不意に「おい」と大きな聲をかけて、僕の肩をたたくものがある。驚いて振りむく間もあらせす快活な大笑ひして、「愛神の寵兒め、大いに妬けるぞ……」

「オ、嫌、いやな篤様……」

我知らず笑は口許に流れつ。手早くまきをさめてかたく懐に秘めた。

朝飯後お部屋で裁縫。

美しい彌生の空、障子には松の影縦横に枝をかはして氣の遠くなる程あたゝかい。額はしつとりと汗ばむ、やつと篤様の袷が縫ひ上つた。丁度火がよく熨つて居るか

ら、直ぐに火のしをあて初める。考へて見ると妙なものねエ、私たつた十八ばかりで妻と呼ばれる身にならうとは、夢にも夢にも思ひがけなかつた。ましてや人も多かる中に、つひ六箇月以前までは一面識もなかつた篤様と……、思はず微笑んでそつと顔をあげると、バチバチバチツと炭がはねる。

百合子さんなんかに勿體ないやうな良人よ、とお京さんがのゝしつたさうな、まつたく過ぎ物だと思つて居るわ。足らはぬこの身を百合さん百合さんと、母様にもお優しくよく仕へて下さるし、男らしくつて、溫和しくつて……美しくつて……オホ、……。

堪らず机の前に坐つて、また記念の寫眞を取りいだした。

君はわざと大學の制服制帽のまゝ、兩手を後にくんで凍々しくも立ち給ひたる傍に、つゝまじう腰かけた我が晴姿、紅ぶさの扇子を手にして重い高髻を少し俯け、華やかな黒紋羽二重の裾模様、白を重ねた細い裾ぶき三筋ならんで、帯はさりゝと立矢の

字。ホ、このまア篤様の澄してゐらつしやること……。

食ひ入る様に眺めて居ると、

「百合、魚屋が來ました。何を買つておかう」

母様が障子をお開けなさる、あゝびつくりした。

午後からキヤラコのお羽織を裁つ。紋は上げ羽の丸胡蝶、あまりやさし過ぎて引

立たない。矢張り篤様の——あの丸に鷹の羽の方が厭味がなくつていゝことねエ。

お勝さんがまはつて來た、相變らずお世辭がいゝ。私はやつぱり桃割に結げる。

一寸の白丈長、紅薔薇の造花一輪、何だか子供らしい……。

「お勝さん、この次はね、土曜日　お午前に來て頂戴な。屹度よ……」

と云ふと笑ひながら櫛をふきく、

「よろしうございます。今度はお丸髻に遊ばせな、ね、え奥様」

「あら、厭！」

「何お嫌なことでなりますもので。松原様の若奥様もこの頃はお丸髷にばかりお結びあそばします。若様のお好みみださうでしてね、まアどんなにお可愛らしうございませう。ほんとに奥様にお島田は惜しうございますけれど是非——」

疑と見られて私はにげて了つた。あとにお勝さんの笑ふ聲がした、こんな可愛い奥様をお持ち遊ばした旦那様はお幸福ですわねえだつて。まア嫌——。

松原様の……と云ふのは直き向ふの御別荘に来てゐらつしやる男爵世嗣の新夫人で、よくお二人お揃ひの散歩のときなどお見受申す。私よか三ッお上とかきいたがそりやきやしや立のやさしい美しい方、眞紅のお手柄に青貝すりのさし櫛築えて、白い襟元を俯けた初々しい若奥様のスタイルの羨ましい！と思はぬ事のないでもないが……篤様は何と有仰るかしら、止しませう。

夕方一郎さん（篤様の従弟で轉地療養に来て居る一高の學生）が来た。長いマントを着て柏葉の帽子横さまに冠つたまゝ遠慮なく部屋へ通る。肋膜炎の病後なので

痛々しい程瘠せて居るが御當人は一向平氣、いつも大氣燻だ。二ツ年下の私を可愛くも姉さんと呼ぶ。どうも下宿の飯が不味くて食はれんくとしきりにこぼすから、一つ晚餐を御馳走して驚かせて上げやうと思つて、無理に引とめて置いたのにいつの間にか歸つて了つた。

ほんとに篤様の有仰る通り、病後の養生つたつてたつた一人、氣儘に旅館生活なんかさせといちや何にもなりやしない。家において上げれば兩爲なのだけれど：どうして義姉様（篤様の嫂）はあゝなんでせう。妙に保證人風を吹かし、何しろ年頃の青年ですから、若い女のある家へはあづけられない！馬鹿にしてゐらつしやる。鶴沼館にだつて女中が大勢居るぢやありませんか。まして私は良人のある身、一郎さんと一緒に居たからつて、まさか――。

X

一昨日から春期休暇、今日はいよいよお歸りおそばす日、朝飯後お書齋のお掃除する。窓ぎはの吉野櫻、黄金色せる若葉舒ぶること早や一寸、赤子の呼吸よりもなほ徐かなる風にさへ、花は吹かれて力なくちらちら〜。

私は何度直しても〜、姉様かぶりにした手拭が直ぐ目の上へ落ちかゝつて来る、しまひには痲癩をおこして了つたら、きよが笑ひながらうまくかぶせてくれた。

はいかりの手拭と水を代へさせ、それから一生懸命お机や床の間に空拭かけて、ピカ〜にして居ると、お勝手の方に急ににぎやかな笑聲が増える。勝さんが来たのだ、耳が熱くなつた。

はたして母様がお呼びになる、メレンスの座布団敷いて鏡臺の前に坐らせられ、白布を肩にかけた。半身今朝はまだお化粧しないから昨夜のまゝの寝白粉、襟に額にした〜か残つて、ほのかにローズの香がたいよふ。

いろ〜話しのうちに梳けて了つて、かもじが入つてやがて髪や巻をつける。私

ももう度胸を定めた、兩手で根の所をしつかりおさへて居ると、燃え立つやうな眞紅の手柄、ふつくりと翻れさうな番外大形の初丸鬘が結び上げられた。平打一本根元に深くさしこんで水を溶びたやうな黒髪的光澤、母様はきはめて御満足縦から横からあまり念入りに御覽なされるから、袖に顔をかくしたら笑はれた。

何だかワク／＼お晝の御飯は箸も取らずに下げさせ、身じまひして羽織だけ紫矢飛白のに着替へ、お火鉢に火を入れてお召を揃へて時計を見ればやつと二時、午後からつて何時の汽車でせう？　ア、待遠な。

臺所へ出て少しきよの手傳ひしたり、また鏡の前に立つて見たり、三時？　四時？　お迎ひに行きたくつても、こんな髪ちや出られないわ。とうとう六時？、泣き度いやうになつて庭に下り立つ。空には薄紫や紅の雲が金色に縁とられて、ちぎれちぎれに飛びちつて居る美しさ、夕空を仰いで云知らぬ感に打たれる。私も一度は文學熱に浮かされて、なまじ他人からもおだてられたまま、好こそ物の上手なれとか、

紫式部の血を受けて来たのだとか、鬼才、天才、そんな聲の耳に入る度、熱い血潮を沸き返し、ひそかに未来の閨秀作家を以て任じたものだつた。

詩集の代りに家計簿ひろげ、歌筆捨て小遣ひ帳、いまはもう野心もなく功名心も消えた。たい良人の愛に縋つて……良人によつてすべての快樂、幸福、満足をする。篤様はまたさう有仰る。僕は今まで讀書といふものが大嫌ひだつた、まして小説なんぞ讀むものでないと固く信じて居たが、百合さんを得てから妙に心がセンチメンタルになつて、文學を愛し初め、よく野暮なこと云つては争そふた友に對して恥かしい——と。

がら／＼がらつ／＼門内に曳きこまれた俵の音、はつと思はず駈けよつた。

『篤様……』

『百合さん』

車上から飛び下りてしつかり握り合つた手にハラハラと涙が——。

お書齋しよさいに入ると篤様あつさまは柱はしらにお靠もたれ遊あそばして、凝ぎつと私わたしの顔かほをお見詰みづめなさる。顔かほへながらお膝ひざに兩手りやうてを重ねてちいとお眸ひとみを振り仰あふいだが、堪得たへえず次第しだいにうつむいて了しまつた。

きよは大靴おほかはんを運び入はこれる、と、つと身みを起おこして折柄せがらこ此室こへはいつていらした母様かろさまに、お手てをついて御挨拶ごあいさつ、それからお手傳てつたひして制服けいふくをお脱ぬがせ申し、紡績ほうせきの綿人わたいれに同じお羽織はおり、ふはりと着せかけ、角帽かくぼうは違棚ちがひだなにのせて、外套ぐわいたうを叮嚀ていはいにたゝむ。お茶をおすゝめして母様かあさまとお話はなしの中うちにお膳立ぜんだて、御飯ごはんにする、純日本料理じゆんにほんれうりをゝるやうな三ツ葉みつはの香か、お好きな蒲鋒かまぼこのお吸物すひもつもある、きよはお給仕きよじいそがしい。

玉火室ぎよくはやの空氣くうきランプ花はなやかに、ばつと壁かべに映うつつた丸鬘まるまげ姿すがた、篤様あつさまはそれについて何なんとも有仰おつちらぬ。

食後しょくごは母様かあさまに失禮ししれいして二人差向ふたりまじむかひ、リボンやら襟止えりどめやら絹きぬばりの洋傘パツソルやら、お土産みやげの品しなはならべられた。貝入かいいりの大きな髻たはげし櫛きが氣いに入り、何度なんどもお禮れい申し上げあげる。

「ほんとにお見立上手ね、義姉様の御相談？」

と云つたら安からぬ色を動して、

「義姉様？——百合さんは義姉様を其様人と思つてるのかい。あのヒステリー患者を——」

少し激したお顔付、お歸省遊ばすについてまた何かあつたに相違ない。ほんとにどうしたらいゝんだらう、義姉様もあんまりな。いくら篤様が孤兒で十二の時から手許においてお育てなすつたにせよ、いまはもう金子家の人、金子百合子の良人です。うけた御恩は忘れませぬけれど、あんまりだと恨みまする。

日曜や休暇毎にこちらへお歸りなさるのが、お氣に入らないだつて……。

嫉妬……嫉妬と云つちや語弊があるが……、私は母様との間にさへ一種の異なる感情が沸き出でたかのやうに思ふ。つまり……我子や弟の愛の一日々々夫婦間にうつき植ゑられるのを見ては、言ふべからざる淋しさと妬ましさとを覺えるのであら

う。まったく別居論をおとなへなさる方を、夢さら御無理とは申しませぬ。姑小姑の苦勞こそ知らね、養子娘の身も辛いもの……。

「篤様……」

私はそこへ泣き伏した。おつと見詰めてホッと太息。

「僕が學校さへ卒業てしまへばね、百合さん！　いまのところちや實に母様にもすまないが……」

「そんな事ぢやないわ。私、私、百合のやうなものでも、それ程、思つて下さるかと思ふと、勿體なくて……勿體なくて……」

「何云つてるの、百合さん」

しやくり上げる肩に手をおき。

「そんな事思ふのは僕を愛せぬからだ。僕ア、僕ア、百合さんにために男子の誇りをさへ捨てたぢやないか。甘んじて他家の姓を名乗つてるぢやないか。けれど……」

百合さん、百合さんさへあれば、それで、僕は幸福です……」

「うれしい！」

強ひられて顔を上げ、莞爾と笑ふと、

「あゝもうこんな話は止さう。どうです、一曲聞かさうか、ハ、ハ、ハ、」

「え、どうぞ。御褒美にお茶をいれますわ。あの母様のお部屋へ上りませう……ね」  
 氣を取りなほし、涙拭きながら、先に立つて襖を開ければ、篤様も机の上の尺八片手に立ち上られた。

茶の間のあたりは、蟬時雨とばかり鐵瓶の沸騰り立つて浪音靜かな春の宵である。

×

「百合さん、百合さん」

かろく肩をゆすぶられてはつと目を開いた。玻璃戸に反射してキラ／＼の金色の

朝日、額を射るまぶしさに眉を攢めて寢返れば、篤様は裏をくゆらしながら、床の上に坐つてゐらした。

「もう母様はお起きになつたやうだから。馬鹿に寢坊しちやつたね」

「母様はいつもお早いですもの、構やしませんわ……」

鬢の毛をかき上げつゝ、ネルの寝まきの襟引き合せて起き直ると、ほく笑み乍らまじくと、私の髪ばかり見つめて被居る。

「嫌だわ、そんなに御覽遊ばしちや……」

両袖を顔におし當てやうとする手を執つて、

「素敵だね、實に……」

「いやよ——」

顔見合せて互に相笑んだ。

玉子のふわくにほうれん草のおひたし、楽しく三人が食卓をかこむ。思なしか

篤様少しおやつれあそばした。餘計お鼻が隆準く見える、何處かおわるくて何つたら否とばかり。

東家にお友達が來てゐらつしやるつて、食後直ぐお出掛、何だか恨めしいやうな氣がした。

友禪の丸帯を縫上げてかちんと指拔を針箱に投げ、篤様のお書齋に這入つて、義姉様へのお手紙書く。

午後探し物をして長持を開けたら、まだ肩上げのおろしてないあのハイカラな、メリンスのお被布が出て來た。なつかしさにそつと羽織を脱いで、手を通して見ると、手首がニューと出る。いやに肩がいからかつて……ホ、ホ、でもつひ此間まで平氣でこんな風して居たんだわ。笑みつ、袂の丈をかへりみなどして、ふと顔をあげる、まア、篤様が後に立つて被居しやる。お留守居の御褒美だつて、紙包みのビスケツトを下すつた。私まだ御飯食べずに待つて居ましたのよ。ときいてびつく

りしたお顔——。お八つには羊羹を切る。

夕方不意に、海岸へ散歩に行かうと有仰る、嬉しくつて嬉しくつて、ふだん着のまゝお納戸紋織、半コートを羽おり、出やうとすると母様は不思議さうに、オヤ何處へ？ まさか散歩にとも云へず、エ、ちよつと篤様と。直ぐ歸ります。

入日を浴びて花やかな相模連山、富士紫に、暮れ行く春の夕空美しう、見渡す長汀人影もなく、沖の方には白帆三ツ四ツ、何處の雲の影かとばかり、相並んでスルスルと静かな夕海をすべつて行く。

打連れて冷たい砂に薩摩下駄と空氣草履のあとを残しつゝ家路へと歩を返した時には、神祕でもさゝやく如く大空に、銀色の星二ツ三ツ。

×

いつになく早起した。篤様をおいてきばりにして、ひとりそらろに彷徨ひ出た。

日の出前の世界はまるで薄絹のやう。まだ花も露も蝶も深き眠をむさぼつて居た。只朝霞流るゝ中に告天子早くも曉の歌を奏でつゝある。

冷たい朝嵐に面を洗ひ、軟草の白玉ふみしだきつゝ煌々たる東の空を仰いで深呼吸一番……。と、後で急に咳嗽の聲がした、振り向くと、まあ……。篤様が立つて笑つてゐらした。

今日は鎌倉の原戸別荘へ上らなければならぬ、昨日のお手紙、御相談致したき儀つて何でせう、老子爵に 去年の八月お目に掛つたきり、まだいつかのお縁談でも出るんぢやないかしら。まさか私の口から、良人を迎へました、とはどうしても云へやしないわ。少しこはれて居るけれど、やつぱりこの髪で行きませう。

朝飯後入浴する、玉の様な春の水、汲んで沸かした湯に磨いて、頬はぼうつと櫻色、御園の雪をうつすり刷いて、紅さした爪先に浴衣の裾を捌きながら、すいと姿見の前に立つ。

湯氣を浴びた黒髪露滴らむばかり、ちつと鏡の中の濃い生きわを見つめて、思はず會心の笑をもらした。鬢搔とつてふはりと搔くと、ほつれた髪がいつそよくふくらむ。

緋縮緬の長襦袢の上に、縫紋のある霞お召の二枚がさね、褪紅色の厚板を胸高に、大きな金金具の帶止をばちんはめて、半コートに藤ねすみの無地お召。

「氣をつけて行き給へ」

と有仰る篤様のお聲をあとに家を出た。

停留場で待ちあぐみながら、時計を出して見ると丁度十時。一時間あまりをゆられ、極樂寺で電車を捨て、あそこから俾を走らせた。いかめしい御門を入ると、大きな木蓮が一朶の白雲虚空に掛かるとばかり、今真盛りである。芝關へは四十あまりの袴を着けた、執事風の男が出て来た。

何誰様で入らせられますかと問ふ。

小さい名刺を取り出し、御前からお手紙でございましたから、と云へば、

「あ、貴女様であらうしやいましたか、よくこそ、どうぞ此處へ！」

附接室へ案内した。そして、

「御前様は急にお人でございますして、先刻、返子の芳川伯へお出掛遊ばされました。

貴女様がお見えになつたら、是非お待ち下さいますやうにとの御申置ではい」

幾度か云わけて退くと共に、立派な茶菓がはこばれた。まア何のこと！

障るわ。御前もわざ／＼私を呼び付けておきながら……。

水色緞子の椅子に身を投げかけたまゝ、あくびを二ツ三ツ噛み殺す、途端ドアを排

して制服出立の男がはいつて来た。思ひもかけぬ四郎様、はつと驚く私を、

「ひどく變つたねえ白合ちゃん。僕をおぼえてるかね」

卓をはさんで椅子に着かれる。四郎様は三田の理財科の秀才だ。

「いま米田から話しをきいてね、たしかに白合ちゃんに違ひないと思つたから……。

何だね、もうすつかりいゝ奥様になつて……」

「まアあんなこと——」

董色のハンケチを弄ぐりながら、

「いつこちらへお出あそばしました？」

「つひ先刻、まだお父様にも遇はんのよ、僕も用があつて来たんだけれど……」

灰皿に葉巻をはたきつゝ、

「いつ御慶事があつたんだね、良人君は何處へ奉職居るの——」

「まだ生徒でございますもの……それどころでは……」

「學校は何處？」

「大學へ——あの工科へまゐつて居ります」

「お望み通りの赤門だね。百合ちやんの理想は文學士ではなかつたかね」

「存じませんわ、四郎様」

「百合ちゃんの好きな近眼鏡を掛けてるかの。さぞ小説的の家庭だらう、の」  
つて散々お冷かし遊ばした末ふと語を更へ、

「お父様と一緒に幸子も来て居るよ、庭へ出給へ、一ツ百合ちゃんを見せて、ハ、  
ハ、ハ。」

「さうやつて澤山お慮め遊ばせ。どうせ私は」

「好ぢやないか、まあ來給へ。さ、百合ちゃん、おい百合さん、さア」

手を取らんばかりに成さるので、仕方なく立上つたこの室を出ると、鏡のやうな  
黄楊の廣縁、つと右に折れる。と、

「女は氣樂でいゝね」

「え、」

「僕は百合ちゃんのホームが羨ましいー」

私はだまつて居た。

「幸子も直きにお嫁に行くよ」

「四郎様のところへ……」

「何を。馬鹿な……」

トンと縁側を蹴て、

「僕は一生獨身だ！」

「御串戯ばかり」

「まつたくさ、幸子なんか仕様がな」

高島田に結ふた品のいゝ小間使ひが、縁の端に身をかゝめて、敷石の上に二足の  
ハリツバを揃へる。眞青な芝生をふんで、はらり／＼と散りかゝる落花の雪を浴び  
ながら、四郎様のお後について、築山の上の四阿に入つた。寄木細工の小さなテ  
ブルを中にして、すゝめられた青磁の丸椅子に腰かける。

「まア、好い景色、氣が晴々と致しますのね」

日光を浮けた泉水の、蒔繪のやうな漣。眼を放てば滿眸の春色融々、遠近に陽炎狂ひ、漸々たる麥畑は微かな春風にサヤ／＼戦ぎ立つて、照る日も光るばかり。金の色の花一面、其處には一きわ蝶の舞ふこと多く、黄蝶白蝶ひら／＼ひら。

遙か彼處の小川の汀、紫の洋傘かたげて立つ人の絲遊にかすみ立つたり。  
日は正に午、鶏が鳴く。

先刻の小間使がうづ高く盛り上げたシュークリームの鉢と、九谷の茶器を捧げて来た、紫檀の扶盆から銀の茶托に載せたのを取つて二人の前に置く。玉露からゆるう湯氣がたち上る。

「道」

と呼んで、

「幸子はどうした？」

「今し方までこゝにお出あそばしましてございます。お離れにでも行らしたのでこ

「さいますか……」

「此處へ呼んでくれ」

「は」

一禮して引退る後姿を見送つて居ると、

「兄様、おほ、おほ」

牡丹櫻の花の蔭から、うららかな笑聲を先に立て、石橋渡る庭下駄の音高く、疾足に築山をのぼつて來られた幸子様、私を見るや、

「あら」

颯と紅くなつて御會釋遊ばすのを、

「幸さん」

と葉巻を唇から放して、

「丁度よかつた。御紹介しませう、これは金子男爵令夫人です。奥さん、これが奈

良原幸子で……」

「厭な四郎様！」

立ち上りさま、

「幸子様、御機嫌よう、お久しうございます。私はこの……金子の百合でございませす。先年原戸の御前がお還暦の園遊會の折、お目に掛りました……」

「まア」

幸子様も二三歩前に進んで、

「百合さんでしたか、まア。すつかりお見せしました。先刻伯父様から今日お出になるとかつて、伺つては居ましたけれど……」

四郎様の傍に空椅子を手帕で掃ひながら、

「金子男爵……つてまア何方のかと思つたわ」

眞黒なお前髪を思切つて大きくふはりと出して、燃えるやうな緋の四吋のリボン

を、きゆつとお結びになつたマガレット、藤紫のお被布を召して、お納戸矢飛白のお召に白のお襟を二三枚重ね、黛の跡匂やかにお鼻の高い中高顔、乳のやうに白いお首筋の美しさ。四郎様は兩人を見くらべ、

「百合ちやんはいくつかい。幸子と同齡だね。何、一ツ下だつて、フム」  
卓を指先でたゞいて、

「來年の今頃は二人とも、小さいのを抱いてるんだらうな、女つてえらいもんだね」

「兄様つたら、よくつてよ」

ぱつとお顔に散る紅葉、手をあげて打つ真似、指輪の珠が燦然と光る。

\* \* \* \* \*

お晝飯は三人で盛花匂ふ食卓に着いた。ナイフやフォーク働かしながらも、あゝ

今頃篤様はどうして被居しやるかしら、と、つひ我家へ思ひが走る。

御前はいつまで何をしてお出遊はすんだらう。

四郎様のピアノをきかせられたり、寫眞ブックを拜見したり、四時までお待たされたがお歸りがない。幸子様が氣の毒がつて電話をかけて下さつたら、もう直きにもどるから待たせておいてくれ、晩くなつたら泊つて行くがい、と有仰つたさうな。いまは……とお暇申し上げれば、幸子様は泣聲になつてお引とめ遊ばす。無下にも振り切れず困つて了つて、

「ありがたうぞんじますか……」

「駄目だよ幸さん、獨身の時とは違ふからね、家にやハス君が待つて居るんぢやないか。思やりのない事を云ふべからず……」

執事の米田も出て来て、それでは私めが御前様にお叱りをかうむります、なんて云つたが、無理やりにお玄關へ出た。幸子様も仕方なく式臺へ立つてお見送り下さ

る、強ひらるゝまゝ原戸家お抱へのゴム輪俵に乗り……、梶棒上ぐるや音もなく、肩をゆすつて一散に停車場へ――。

あやふく汽車の時間にも間に合ふて、私は白切符を買はせた。

大船で乗り替へる時、ふと本庄先生の後姿をみとめたが、あゝと聲かけやうと思ふ間もなく、驛夫が一等室のドアを開いてお辭儀する。仕方なく乗り込んでしまつた。

藤澤に停まるを待ちかねて下車。

「先生、先生、本庄先生……」

人に押されてへだてられ、いま改札口を出やうとするのを呼びかけると、振り返つた人は叱驚して、

「や、夫人！」

足を止めて、押されて行く群から側へ退いた。

「何處へ行らつしやいましたの、お久しぶりね」

「貴女は何處へ。夫人とは意外でしたな」

並んで立ち添ふ二人を、人はちよいくと見ては行く。話しながら構外へ出ると、うるさく車夫が群がるので、その中の一人に一寸さゝやき、

「先生、これから直ぐおかへり遊ばすの、どちらへかいらつしやるの、私、少し先生に用があるんでけれど……」

「え、歸ります。何の御用ですか」

「ぢやア丁度よござんした。御一緒に途中までまわりませう——」

俥を後へ従へて歩き出す。先生は重い袋褌を捌き分けて私の歩行の早る程に歩をゆるめながら、

「何處へいらしたのです」

「それよか先生は？ オホ、好いお顔色よ……」

微醉を帯びた色の白い丸顔をつくつくとながめて思はずほ、笑んだ。

黒七子のお羽織に仙臺平のお袴、眞黒な髪を浅く分けて、額の晴れやかな鼻の高  
い、濃い眉、一文字の口もと、何々伯の若様と云つても恥かしくない天晴の好男子、  
月給二十圓の小學教師と誰が目に見えやう。鶴沼村の光る君、三年前御赴任當時  
は御同僚の女先生方が、白粉を月に二瓶つゝ空けるやうになつたとか何とか、大變  
な評判だつた。いつでも私を弄かつてばかり……、いまに奥さんをお貰ひになつた  
ら、思ふさま敵討ちをして上げやうと思ふ。

「お母さんはお健在ですか」

「有がたう、いま篤磨が歸省つて居りますもんで、熱海の伯母のところへ出かけま  
した」

「あ、左様でしか、篤磨君が、では春期休暇ですね……それはく」  
「厭ですよ、何がそれはく。あのね……」

今年こんどの土曜どと日は篤あつ様のお誕生たんじつび日、その晩餐ばんさん會かいに先生せんせいも來きて頂戴ちやうたいと、お願ねがひして、  
やつと御承諾ごじやうだくを得えた。

いつか村むらの道みちへ出でた、白しろのポーにうづめた頬ほを夕陽ゆふうまぶしく射いて、其處そこ此處こゝに  
立たつ孤松ひろまつの影かげ長なが々と横よこたはり、わら屋やの夕煙ゆふけり所ところ々に立たちのぼる。

「ちや、先生せんせい、こゝでお別わかれしませう、屹度きつとお出下いでくださいよ、御免遊ごめんあそばせ……」  
車夫しやふを手招てまねぎ、

「お待まちち申まをして居をりますよ、先生せんせい」

「有ありがたう……」

「失禮しつれいします」

「會釋まじやくと共に雅健いねまの掛聲かけこゑ勇ゆうましく、夕風ゆふかぜを切きつて流ながれるやうに走はしり出です。行途ゆくての森もり  
の上うへに新月にのつきしろ白しろし、あゝ「訪問ほうもんや夫待つままちまさむ夕間暮ゆふまぐれ、車夫しやふを叱しつして家路いんぢにいそぐ。

### ▲晩餐會之卷▼

いよいよ當日となつた。母様がお留守なので困るけれど、また都合のいゝこともある。お約束通り小林の小母さんは雪ちやんをつれて、手傳ひに来てくださった。白の料理前掛胸高に、女四人が臺所での大立まはり、煮る、焼く、ゆでる、蒸す、漉す、叩く、大體出来上つたのはもう午後三時、あとは小母さんとまよに任せて、化粧室に入る。雪ちやんも呼んできれいにお化粧して上げた。

私、着物はどれにしやうかしらん、しばらく考へて見たが、あの大きな緋のお召縮緬に帯は緋緋珍、藤納戸色紋羽二重の羽織をはふる。

お座敷を見まはりに行つて、昨日活けた早咲の牡丹に一寸手入れしてると、

「御免」

「はら」

出て見たら案の通りの本庄先生。もう腰かけでお鞆の紐を解いて被居る。ふと振り仰ぎ、

「や！」

「入らつしやい。先登第一……」

帽子を受け取り、オーバーコートを脱がせて上げて、先に立つ。

「篤麿君は？」

座につくや早く、敷島を吸ひつけられた。

「え、お友達を迎ひに行つてまだ……」

チラと顔見合せてにつこり。雪ちやんはお茶とお菓子をお菓子を、襖のかげからそつと差出す。先生のお好きな黄味時雨、挟んで出すとお掌に受けて、ちつと見詰めてゐらつしやる。

今日はとりわけうつくしく、お髪にもカールがかゝつて……。

「今夜こそね、是非願ひますよ、え、先生。」

「は、何です。」

「しらばつくれてまア。あれを。」

床の間のヴァイオリンに振りひいて、

「ちやアんとお道具もまゐつて居りますわ。」

「いや、恐れ入ります。どうも、夫人、ちと酷ですわねえ。」

と、頭かき〜。

そのうち篤様が本田さんと小松原さんを連れて、歸つてゐらした、ついでに酒井中尉が来る、お京さんも見えた、笑聲は室にあふれた。少し過つてからお文さんも桃代様と清夫さん（桃代様の弟の中学生）とはお揃ひでお出になつた。各自の前に置かれた九個の茶碗からは、甘い紅茶の香が、あたゝかさうな湯氣と共にあたりをたふよふ。

「まア一郎さんはどうしたんでせう、また熱でも出たんぢやないかしら。雪ちやんを迎ひに上げて見やう……と思ひく茶の間の方へ出て來ると、『姉さん』と勝手口から飛び上つて來たのはその人だ。あやうく鉢合せ！額をおさへながら、

「まアおそいのねえ、一郎さん、何うしたの」

「今夜カルタをしませんか、姉さん、カルタを」

息を切つて居る。

「カルタ……」

「先刻東京から友人が來たんです。其奴がカルタ狂だもんだから、早速若月君と始めたがね、セームゲームでね、さア終り一枚つてとここで、何うしても勝負がつかないのさ。三番が三番とも。で一ツ姉さんに願ひたいと云ふことになつて——。え、來てくれませんか」

「まア一郎さん、厭だわねえ、兄さんのお誕生日を忘れちやつたんですか、うちち

や先刻から貴下を待つて居るんですよ」

「アッ兄様の？ 左様だつちなア」

「いやだわねえ、この人！飛んだことになるよ。何うなさる氣、困るぢやありませんか」

「ぢや、今日は駄目ですね」

「カルタですか、何時でも厭とは云ひませんけれど、どうも今夜はね、今夜でなくつちやいけないの」

「木村、明日は早く歸京と云つてるんですもの、困つたなア」

「困りますねえ、私だつて、一郎さんが来てくれなくつちや……。あ、ぢや斯うしたらどう、お二人を引張つていらつしやいな。直ぐにね。間があつたら合戦もやりますから。ね、来て下さるでせう、その木村さんとかも」

「連れて來てもいゝんですか、え、姉さん」

「結構よ、大勢の方が賑やかで……。あゝ本田さんも被居しやるから丁度いゝ。あの方讀み役がお上手なのよ。何しろ早く出直してゐらつしやい。先刻から待ちくたぶれて居るんですから……。屹度よ、待ばけさせるときゝませんよ」

「大丈夫、夕飯食はぬうちで宜かつたね……。さようなら」

「あ、一郎さん、一郎さん」

心附いて呼び返し、今夜は他にお客様もあることですから、お召を替えていらつしやい、と云ふと、

「え、何」

「否ね、着物を着替えてゐらつしやいと云つたの。オホ、そんなに綻を切つてさ。今度縫つて上げませう……。ほんとにそのお羽織なんてありませんよ。だから貴下方は破戒禪僧のやうだなんて云はれるんですよ。パンカラもいゝでせうけれど、あまり過ぎると卒業してから、學士のお役がつとまりませんよ」

「何とでも云ひ給へ」

足駄ガラ〜、

「都の空に東風吹きて、春の呼吸をもたらせば、東臺花の雲深み……」

先生は洋服でいらつしやるのが、窮屈さうでならないから、こちらへお呼び申して氣の毒がるのを打けし篤様のお召をお着せ申す、ワイシャツの上なので少しゆきが短かいが、よくお似合遊ばすこと。うつかりすると良人と間違へさうだ、ホホ、

すらり並んだ皆さんの、いづれ劣らぬ花あやめ、繪のやうな高島田に結げて、初音納戸の無地お召に包むやさしい肩を、白茶の錦糸の矢の字がのぞくお文さん。空色の二匹の袂をひいて、ローマの前髪思ふさまちやらせた、ハイカラな桃代様。お京さんは廂髪で黒縮緬のお羽織、こぼれ出る緋縮緬の振も艶めかしく、流石鶴沼美人と音にきこえた煙草屋の看板娘。

お京さんには因縁浅からざる酒井中尉、お羽織と對の大島召して、ねずみ縮緬の襦袢のお袖、カイゼル式のお髭をピンとさせ、澄ましてゐらつしやるが、どうも輻重兵中尉とあつては、あんまり振るひもしない。折から門内に下駄音みだれる。私  
は急いで玄関に立つた。

「まアよくお出下さいました。さアどうぞ。さ、一郎さん、貴下早くお上んなさいなね」

「姉さん、これが僕の親友木村君です」

「お初にお目に掛ります。お待ち申して居りましたのよ、よくお出下さいまして、さ、どうぞ。あら先生も何ですねえ」

「金子さん」

鳥打帽子を脱りながら若月先生（本庄先生の御同僚）

「僕なんかお邪魔とは思ひましたが、野川君が承知なので……」

「左様でせうよ、どうせ私の手料理なんか、お口よごし。お氣の毒様でございますが、まあどうぞ」

「これは猛烈ですな、ハス君がついてると思つて、金子さんは馬鹿に氣が強くなつた、ハ、ハ、ハ、ハ、」

何て憎らしい口を利く人だらう。皆さんに御紹介して無理に三人を敷布団の上におしすえた。

「まあ一郎さん、仕立下しね。あら、お待ちなさい。少しづつとして……」

まだしつけのまゝなのをとつて上げる。だから貴下は可愛いつてのよ、ほんとに罪はないのねえ。

まづ白銀の空氣ランプ、鎧光火室のまはりに聯珠の瓔珞うつくしきを中央に點し、大きなチャブ卓を二ツならべて、やがて御馳走は運び出された。

ビールを抜く、祝盃が上げられる。お京さんはかういふ座のとりなしなど巧妙な

もの。私も一生懸命になつて應じたが、ともすればせめ落されてコツプを突き出され、これが飲めなきや満座の中へ、その丸鬚頭を下げてお叩頭なさい、など、亂暴な……。

何さま青春の血氣に燃ゆる男子である、天をつかんとす氣焔萬丈、いづれも負けず名論卓説、果ては試験の失敗談やら、勉強の滑稽やら、よく語り、且つ笑ひ旺んに食ひ、御婦人連をのぞくの外は、お口取やお焼物まで驚く程平らげた。何よりの満足よ、食後には林檎をおすゝめする。

不器用な手つきにメスを執つて剃き始めた小松原さんが、案の如く指先を切つて了つた。汐時と見えてぶつと血がふき出す、大さわぎ。やつと私しが懐紙をさいて結へへて上げる、まア男のくせに和らかいお手だこと。オホ、、だから上の字は……、兼やすに袖すり合す朝の雨や、文科の君は優肩にして……。

\*

\*

\*

\*

\*

\*

いなむを無理に引張り出され、とう／＼木村さんと對座させられた。

若月先生はお京さんと相望む。

すなはち二十五枚づゝの持札。一郎さんはじめ十何名の自稱審判官は、首を揃へて見物して居る。

もう仕方がないわ、私はするりと羽織を脱いだ。木村さんもその黒木綿の紋附を片隅におしやつて、飛白の布子を着ぶくれた背を丸く曲め乍ら、札を並べて待つ間さへ少しも動せず耽讀して居られる。色は淺黒いが、血色の好い、眼のぱつちりと可愛い方だ。お頭の恰好がよくも花輪さんに似て……まことAさんもかくやとばかり、思はずほゝ笑まれたが、

「宜しう、どうぞお手やはらかに……。」  
と頭を下げると、

「否、僕こそ。」

眞面目で少しかたくなる。

本田さんはしばらく見まはして、

「ぢや始めます。いいですか。え、一枚は空を読みまして」

咳嗽ばらひ一ツ、さて朗々と読み行くにつれ、火花を散らす激戦は始まつた。木村さんお若いにも似ず、取方の鮮かさ。エツトツ、ハツ、ボタン、ボタン、札は翩と天井までも舞ひ上り、その手の早さ、間髪を入れない。愉快の、面白いの、と云ふ程度は過ぎて了つて、私は無暗に身が震へる。まるで夢中で殆んど反射的に手が働らく位なもの。齒をくひしばつて居たが得意の「夜をこめて」瀬を速み、を飛ばされたのに氣くちげ、「高砂」「逢見て」「契りきな」と見苦しくもつけさま、半ばから憤然として陣を立て直し、一上一下遂に最終まで戦をつけたが、「かくとだに」をさながら電光石火の早業はつとさけんだ聲もろとも、木村さんの指はすでに

私の札を三尺あまりもはね飛ばして居た。拍手喝采をわろゝが如し。

ほつと息を吐いて顔をあげるとまあ木村さん、玉の汗を紅潮した頬に瀧とたらし  
て、手帕をまさぐりながら、

「奥さんはえらいんですね、驚きました。あのハツと云ふ一聲、肺腑をつらぬ  
く……」

本田さんまでが、

「實にきれいな勝負でしたね、女と云ふものはいくら上手に成つても、兎角取方の  
きたないもんだが……、夫人のは模範的です、物凄いやうだつた……」

「まあ、もう澤山。上つちやいますわ、ホ、ホ、」

若月先生透かさず、

「金子さん、一番願ひませうか、え」

進み出る。頭を振つて、

「ホ、ホ、御免。こはい、こはい、どうぞもう……。それより木村さんと如何です。こゝで勝負をおつけ遊ばせな、お手並を拜見したうございますわ。あ、いまお京さんとはいかいでした」

「元より問題になりません、ハハ、ハハ、」

「だから先生」

お京さんが口惜しがつて、

「どうせ先生と私ちや虎と三毛猫ぐらゐの段違ひですよ。だのにこんな女なんか相手にするのに、片肌脱ぎなんかになつて……。あんまり御大層ぢやありませんか、ねえ」

「否、小敵と見てあなどるべからず……。」

「まあ憎らしいー」

「オホ、ホ、ホ、ぢやお京さんには負けた罰として、一つお願ひしませう——雪ちや

ん」

手早くカルタ札をかたよせて、次の間から三味線を持つて來させ、

「さア、お京さん。——ねえ皆さん」

「賛成、賛成」

バチバチ。

「何か意氣なものを一つ、ね、さ、お京さん」

式の如く二三度辭退するを、手で制して、強ひると笑ひながら指をなめく取り上げた。お京さんの清元と云へば、尋常科時代からの評判もの、今ではお師匠様も一目おくとか。チトン、ツトンと調子を合せる。みんな視線をあつめて辭まりかへつた。

「霞の衣、衣紋坂、衣紋つくらふ初會に、袂ゆたかに大門の、花の江戸町、京町や  
 ……チチ、リチンツン……」

三筋の糸の撥さばき、透き通るやうな美音の北州・藤色の半襟から眞白く抜け出して居る首を一寸かしげて、くきつりとその富士額の細面、濃く紅を含んだくちびる、長い揉み上げ、お京さんはどう見ても清元式だ。銀杏返しにお召の羽織でもぞろりと引かけて、猫を相手の境遇など似合さうに思はれる。切角だが中尉夫人には少し不向ちやないかしら。

酒井中尉と二人を見くらべて、伏目になつたまゝ妙な事を想像して居ると、  
「御苦勞、御苦勞……」

拍手は急霰の如く湧き立つた。はつと我にかへる。一曲こゝに了るのであつた。  
お次は本庄先生が自慢のお手並、ガラにもない「梅の春」併し面白く拜聴した。  
奥さんは十三絃を、と八方からせめ立てられたが、幸か不幸か私のお翠、折も折として昨日床の間からぶつ倒れ、重傷をおふて了つたんですもの。いさゝか残念のやうでもあるが、かへつてこの方が花だつたかも知れない。

桃代様にもせひ一曲、と願つたら、妾ヅアイオリンは嫌ひなんですから、と素氣ない御挨拶。

したら本田さんが、只ちや面白くないから電信函をやらうと有仰る、若月先生と二人手つきして御説明が初まつた。私は桃代様と顔見合せて、では女は女同士くみませうとの發言も多數決で否決され、抽籤で定めると幹めいた。

結局、私の組は、本田さんに、本庄先生、お文さん、酒井中尉、小松原さん、木村さん、向ふは篤様、一郎さん、桃代様、お京さん、若月先生、清夫さん、雪ちやん。末席にはきよが侍べつた。

對ひ合つて並んで座る。これで拳を打つて負けた方の組のものはみんな藝をやるのださうな。お互に後に手をまはし、相手の人に見えないやうにして、何を出さうかと相談する、本田さんが私の小指を握つた。私は本庄先生に傳へた、本庄さんはお文さんに、成る程電信だ。

「アアよしか、いち二ノ三ッ！」

手をつき出す。向ふは鐵砲、此方は狐、本田さん頭をかけたが、きよが一人まわがへて手をまごくさせて居たと云ふので、本庄先生が異議を申立てると、若月さん、むきになつて逆襲する。ホ、ホ、ホ、ちやチャンケンできめませう。さ、ジャンケン、チツチ、石なしチャン……。やつはりアイコよ、石なしチャン。あどうしても篤様の方だ。

若月先生は皿まはし、大喝采。篤様の吟聲に一郎さんの劍舞、清夫さんの袴を脱がせて裾短かにハキこなし、白手拭の後鉢巻、たすき十字にあやどつて、心張棒の刀をぬぎかざして立ち舞ふ。

清夫さんは涼しい聲で、慶應の應援歌を歌ふ。フレ、フレ、フレ、フレ、ワセダツ、とみんな交せつ返して大さわぎ。

「オシヨロ高島及びもないが……。」

桃代様の追分とは素敵だ。

お京さん三味線を取つてトコトツトト……。

「自由氣まゝに成るならば、金の生る木を庭に植ゑ、思ふお人を膝元に、世間知らずで暮したい……」

まア振つてる、それが貴女の心意氣、お安くないのねえ！ 雪ちやん手拭ひの南

瓜かぶり、じんくばしおりして、

「權兵衛が種蒔きや、からすがほじくる、ア三度に一度は……」

とをどり出す、涙の出る程笑つて了つた。十六にもなつて一向臆面のない子。きよは臺所へにげて行つた。

「實に／＼花の友人は他生の縁と云ひながら我等も同じその心、ところも山路の友なれや、見もせぬ人よ花の友……」

本田さんの觀世流、木村さんは新體詩の朗吟。

酒井中尉てひどいこと。

「そばと團子を一緒に食へば、柳と手まりの馬場が出る……」

小松原さんの野毛の山、鐵砲かついでおツびひやりこ、今まで俯いて眼鏡の曇りばかりにして居らした方が……と可笑しくてならぬ。

本庄先生口笛で、「おのが姿を花と見て」とやる。お文さんはとんぼのやうに頭を光らせて、お雛様然と控へたまゝ、何と云つても遊ばさない。それや無理さ、奥さんが先に立つてやらないのだから。せめて立てられて、

「アンデス山は幾千里、カ、オの實がなる、金がなる、お前も明治の男なら、そんな小島にや居られまい、ト、タ、」

と云つてやつたら、はゝア耳が痛いね、と大わらひであつた。

皆さんなかくの藝人だが、しまひにはだんく隠し藝の材料もなくなつて、君が代が始まる、米國の國歌を歌ふ、ハイカラ節が出る、「雪の進軍」をどなる、「緑も

「濃き柏葉の」を合唱する、金盞を叩く、ヨイイ〜デツカンシヨ。

丹波篠山鳳鳴の塾で：：：」

「ヤア、コリヤ〜」

私はたまらずそつと座を外して茶の間にかくれた。先刻無理に強ひられたビールの名残、鼓動の高まつた胸を抱いて、しばらくそこへつゝ俯して了ふ。頬がほてつて〜、ア、苦しい。

夢心地にさんざめく脚をきつ乍ら、ウト〜してると不意に、

「あつ熱つ、あつゝガランバツンヤン。わあつ、あつ！」

たいならぬ悲鳴と物音、すわと飛び上りさま夢中で障子を引開けた。

\* \* \* \* \*

「えらい事をやつつけちやつたもんだね、おかげでお汁粉を食べそくなつた。ねえ





……止せばよかつたと少し心配になつたところであつたから、強ひても引止す、三人を玄關へ送り出した。

お座敷ではまたもやどつと笑ひ聲。

「勝つた方がエー……。」

\* \* \* \* \*

ならば一晩遊び明かしても、だけれど左様もならず皆さんが座を立たれたのは一時半、あまり晩いから本庄先生は、無理にお泊め申すことにきめた。

私も門まで出る。

「失敬！」

「さやうなら」

「夫人」

と口々。

「お京さんを送つて上げて頂戴な」

と、おすゝめしたので篤様も先生も御一緒にぞろ／＼ツヤ／＼とにぎやかだ。一軒。

高い下駄音が三ツの提灯と共に、だん／＼遠ざかる……。

「人生イ……男子と生れてすべからく——  
妻をめとらば、百合子夫人を得べしイ……何を……」

あれ、若月先生だわ、にくらしい。

左右の袂に胸を抱へて、くるりきびすを返す門内は玄關から颯と一巾 赤い灯が  
小砂利に流れ、笑を含んだ雪ちやんがランヅ片手、式臺に立つて居た。

## 天 女 臨 降

×

私は旅館の天女でございますのよ。あら、姐さんちやありませんわ、エ、場所、それは申せません、たい湘南の……ある海水浴場とだけ、ね、オホ、……まあおきき下さい。

養母と云ふのは私の實の伯母なのよ。何しろ女の手一つで、これだけ盛んにやつてるんですものねえ、姉妹とは云ひ乍ら、實家の母なんかとは違つて男まさりの氣性ですわ。私のことは五六年前からきまつてたのでした。え、この春女學校を卒業と直ぐこちらにまゐりましたの。義従兄は早稲田の英文科に居ます、エ、卒業……來年。

來たてにはねエ、すみ分困りました。何だつてそれまで、裾高な海老袴を履立

てい飛びまはつて居たカムレット式部が、一足飛びに〇〇館の娘となり下：：つたんだ、上つたんだか、その當時は、ハイカラだとか何とか、近所の評判など凄じいものでしたけれども、此頃ちや私もすつかりなれ切つて了ひました。

養母は、嬢や、嬢や、つてそれは大切にして下さいます。もう實家の方がそんなに戀しくありません。

エ、はア、それや面白いわ。だから少しすつばぬいてきかせて上げやうつて云ふのよ。ホ、ホ、ホ、まあだまつてお聞きあそばせよ。

×

「八重ちゃん、玉枝さん、玉枝さん、八重ちゃん、もう五時ですよ、起きて頂戴八重ちゃん、玉枝さん、え、焦れたい！」

「八重ちゃん、八重ちゃんつたら、玉枝さん」

肩かたに手てをかけてはげしくゆすぶる。まあこの二人ふたりつたらまるでお話はなしよ。あれ程ほど氣き丈ぢやうの八重やへちやんなどが、どうしてかう毎朝まいあさ世話せわがやけるんでせう。目めざまし時計どけいの三十個こも一時いちじに鳴ならさなくつちや鼓膜こまくにひっかないんだ。ほんとに困こまり者もの!

「八重やへちやんつたら。おそいんですよ」

「ムニヤ／＼ムニヤ」

切角せつかく起おき上あつたと思おもつたらまた突俯つうぶして下しもふ。玉枝たまえさんは散々さんざん眼めをこすつて、ひよいと立上たちあつて、

「あゝ眠ねむつちつた——」

と兩手りゆうてをのばす、

私は堪たまらなくなつて失笑ふきだした。

まだ／＼この人達ひとたちはいゝけれど、女中おんなべや部屋べやの寢態ねざうなんてありやしないの。女中頭おんなしやうのお兼かねさんからして大おほきな口くちは利きけやしない、まるで寢間着ねまぎの裾すそを頭あたまにかぶつちや

つて居るんですもの、お貞など枕を頭にしばりつけて寝たら、翌朝一間も先へ飛んで居たつて大笑ひ。

手早く前髪かき上げて、一寸御園撫子はたいて、昨日縫ひ上げた久留米を出して着る。

臺所ではもう大活動が始まつて居る。のこ／＼出て行くもの、間のわるさ。火種を千能に盛つて裏のお離れへ行く。音のせぬやうにそつと戸を一枚開け、火種の掃除して炭をついで、鐵瓶をかけておく。私の受持の江田原伯爵の五位様、昨日一寸東京の御本邸へおかへり遊ばしたので、何だか今朝は物足りない……あの五位様はほんとにお氣輕な平民的のお方で私大好き！ え、理科よ、數學科をやつてゐらつしやるんですつて。

六時にお目覺のベルが鳴る。若様はほんとによくお時間をお守りあそばす。御洗面のお水をお取り申し、グラウンドを御散歩中につきかりお掃除して……一昨日活

けたぎ、ぼしゆの花がみんな落ちて了つたので、花壇へ出て大きな白百合を露ながら探して来る。直徑五寸にも餘んぬべき大輪のしと透きとほつて目にしみるやう：七時おかへり、お茶を差上げて、直ぐに御食事、若様は脚氣の氣味であらつしやるので米飯はおとりにならない。

玉枝さんと共同膳で御飯を食べる、玉枝さん、秋澤さんに、豚がソマトーゼ飲んだやうだつて云はれたつて、なんぼ私がせいひくで横肥りだからつてねえ、とおこつて居る、丸つこいこの人はいつそ可愛くてよい褪紅色の帯がよく似合ふ。

一しきり片づいてから髪を結ふ。例の通りローマに束ねて、水色リボン。この髪ばかりは母様が肩をおひそめなさるけれど、私は知らぬ顔で澄まして居る。

縁側で多田様の奥さんと立話してたら、

「二寸！」

と平岡様が手招きなさる、何か御用？ と伺つたら、今日▲▲館にゐらつしやる

御友人方と、烏帽子岩へ舟遊びの御催し、それで私にも一緒に行きませんかつて誘つて下さる、切角だが御辭退申す。この日山下様のスケッチ帖はいかに賑ふであらうか、平岡様は女子大學の家政科の學生、叔母様と有仰る山下様は美しい婦人畫家で、二十六の今日までまだおひとりすみとやら、一寸人の目に立つお二人なので、みんないろんな事云つて居る。平岡様もいゝ方だけれど、うちの學校、うちの學校つて毎度御氣焔には當てられます。

母様が一寸お外しなさる間を帳場に坐る。チリチリチリ、ア、八重ちゃん、八重ちゃん、殿様のお召！ え、エ、殿様つて松村子爵の御世嗣よ。先月の廿六日から來てゐらつしやいますの。あちらの離れは八重ちゃんの受持ですけど、私も母様の御代理で時々御機嫌伺ひに行く事がある。そりや華族様なんてかへつて、すゝめ分思ひ切つた事など有仰るものね、遠慮會釋と云ふ事御存じないんですもの。八重ちゃんがよく泣顔してますのよ。

三番へサイゲし、が出た。

若杉様が何かあまい菓子を下さいつて、と別館から玉枝さんが来る。若杉様のお好なものならきまつて居るわ。唐饅頭を持たせて上げる。

別館の六番にゐらつしやる秋月落子様、これから大磯へ一寸行つて來ますつて、お出掛あそばした。

見れば見る程、まア何ていゝ御纏織なんぞせう。きりつとした細面、きめこまかな中高顔の、つぼみのやうなお口許して、お眉の美しい、生きはの濃い、お髪だつて羨しい程眞黒なふさ／＼と、それよりもそれよりもあの御眼ざし……夢二式なんぞ遠く及ぶところでないわ。何と云つたらいゝんだらう……かぎりない愛を含んで……ばつちりり涼やかな黒眼勝の……まつたく美人よ。そりやア美人よ。例の通り前髪を思ひきり高めに張らせたルイザ巻、お召物はいゝ藤納戸の風通で、青磁色コントラス織のおみ帯胸高に、極細のブラチナくさを首からだらりと、白茶に水色

のへりとつた刺繻入のバラソルついて、すらりと立たれたお姿つたら……美しい齒なみを見せて、につこりなさる可愛らしさ、ほんとに何て好い方だらう。何しろ東京育ちのハイカラさん、何處となく垢ぬけて、とてもく平岡様なぞいくら大前髪ふり立てたつて駄目よ。

そして大變な柏葉宗の深信者でゐらつしやるから、お互に記念祭の話でも始まると夢中になつて了のよ。だつて實際向陵健兒は可愛いのねえ。ほんとに罪のない人ばかし。あつつくく私も男子と生れてあすこの寄宿生活がして見たい……ユムバ！ ストーム！ 何て愉快なひいきでせう、『勝つた方がエー』なんか何て無邪氣なんでせうねえ。女の身の口惜しさは、あのグラウンドのまん中にをどり出して、白旗を打振る事も出来ない。

寮歌なんか澤様のお上手なこと、美しい聲でよく歌つてゐらつしやる、たいね、稻門健兒が大好嫌ひ、ワセダツボ、ワセダツボ、と有仰るもんで、私はその度毎くす

ぐつたいやうな氣がして仕様がな……あら、お手が鳴る。お貞、お貞、十三番よ早く、早く、オヤもう十一時、

お裏へ見まはりに行く

「オイ」

と例の若様のお召、手をついて伺ふと、

「これを君に上げやう」

つて大きな紙包を下すつた、何だか知らないが

「恐れ入りましたとございます」

と、有がたく頂戴する。歸つて来て開けて見たら、銀紙包のチョコレートやら、懐中汁粉やら、思はずほ、笑まれた、後でみんなにも分けやう。あの若様がお菓子を下さらうなんて、晴天のへきれきだ。明日は暴風雨かも知れない。

ねえ、この若様つて面白い方よ。まだ一度も名をお呼び遊ばしたことがない「オ

「イ」か「君」でおつ通し、それやね、御食事の時とよく／＼御用の事以外、いつもお口は閉ぢたつきり。

大學でも評判の秀才で在すとか、さうでせう、御勉強が檸檬なものだもの。海岸へも行らつしやらず、朝から夜は十時まで、デスクの前をおはなれ遊ばしたことがない。えゝえゝ、無論法科ですの。

でもね、先日——あの、若様は妙なもの持つてきてゐらつしやるんですのたるま様の持つてるほつすねえ、あんなもの何になるのか、不思議で／＼ならないの。たまりかねて、ある朝、お茶を差上げながら、

「若さま、これは何でございますか」  
と伺つたら、

「これか、これや君が居眠りした時、引ばたいてやる物だ」

「あら」

私は俯いて了つたが、御申談とはわかつてるけれど、あまりお異面目なので、何だかこはいやうな氣もして、そのおむづかしいお横顔をつくづくとながめた。したら其後お晝養にお給仕終へて下るとき、

「おい、その蠅はらふもの取つてくれ」

繩はらふもの……そこら見まはしたが何にもありやしない。大方これだと思つて例の妙なものを差出すと黙つておとりになつたから、やつとわかつた。繩はらふもの……

午後別館へ行く。欄に凭つてた若杉様が見下して、

「おい」

と有仰る。今日は少し、元氣がないやうだ、一高の生徒なので、落様も大さわざして御機嫌おとりなさる。學校は御病氣のためにこの春から休學なのださうな。あゝ肺尖加答兒……男には稀な清い姿、美しい人、私は人事とは思はれません。先日

もお風邪が重つて、二三日枕をお上げなさらなかつた。といかぬながらも私の看護を大へんに喜んで、

『文さん、とんだお世話をかけますね、貴女の……僕ア死んで、忘れません』

とあの涼しい御眼にかすかな露さへ浮べられ……私はその時思はず、泣いて了つたのです。それ以來いよ／＼文さん／＼と有仰つて、私が取まぎれて別館へ行かない日には、何かの用にかこつけては、本館へ出かけて行らつしやる。別館は海の音が近くて夜ねむられない、ねむられないつて私の顔見る度、おうつたへなさるのも、本館の方へ室を替へてくれとの下心。けれど、けれど、どうしてそんな事が出来ませう、一度ならば二度ならず、紅の痰を吐かれた、そんな事みんな母様には秘密です、母様に知れたら、お立退を願ふのはわかり切つてます。母様の前ではげしく咳入られる時など、傍に居てもハラ／＼する。それを、秋澤さん達、

『お文さん、若杉君の病氣は危険ですせ。そりやお鈴大明神なんぞ、パチルスの方

から御免かうむつて了ふだらうけれど、貴女なんか注意せんと……殊に若い人にはうつりやすいですからね」なんて――

きつとあの人達がいつか母様のお耳にも入れずにや居ないわ。お風呂だつてさうよ。他の方達はさうでもないのにあのA組、きつとなの、若杉様が先におはりになつた日には、どうしても厭だつて意地に掛つて……仕方なくいつも――若杉様は皆様のあとでばつかり。それと云ふのも落様と云ふ同情者があるので、皆様妬けてたまらないんだわ。

うちにやねえ、不思議と早稲田の方が多いのよ、ことに別館の十二番を占領してゐるそのA組ね、牛耳つてる秋澤さんがあの通りの人だから揃ひも揃つた……その中に商科生の田中さんの方、若葉會の選手だつてね、カルタ狂ひなの、はね飛ばす二本の指にタコが出来てるつてそれが御自慢なんですの、私、

「何ですね、立派な殿方が、高の知れた紙片に血眼で墨のちりを吸つて、指をすり

むくなんぞあんまりだわ」

と云つて上げたら、本氣になつて怒るの……。ほほ、いつか一番田中さんと願ひたいと思つてる。むざ／＼人後には落ちないつもり……

皆さん海岸へお出掛のあと、室はからあき、颯と吹きこむ青嵐、ハタ／＼と掛すだれを吹き上げる。どのお室も／＼すゝ分散らかされてある、お鈴は臺所の板の間に坐つてコクリ／＼、玉枝さんひとりせつせと紺飛白の着物をいぢくつて居る。玉枝さん一生懸命ね！ え、若杉様にはころびをたのまれたのよつて、若杉様のことだとみんな喜んで上げてあげるからうれしいわ。

婆やが洗たくして居たから、ついでに私の矢飛白も洗つて貰ふ。糊をこはくつけちや厭だよと云つたら、糊の利かないのを好みの方は、意氣地なしの旦那様をお持ちになりますよつて、うづら豆のやうな歯をみせて笑つた。

四時までは閑散の身、網町の陽大真様へ手紙書く。五時頃お着になつた制服の五

人づれの學生さん、腹が空つた／＼つて大さわき、それでお風呂がすむと直ぐ御飯お貞は次の間にお櫃をならべて控へ、私がお給仕する。忙しいのなんのつて杓子も眼のまはる程つかはれ、一時に三つも四つもお代りがあつまるのでどれが何誰のだからわからなくなる／＼なかく／＼犇猛な勢だ。

今夕若様フオータをお執り遊ばしながら、めづらしくいろ／＼お話があつた。君學校は何處の出身か？ 去年常家へ來たと云ふ學習院の綾小路を知つて居るかなんて有仰る、私、一生懸命になつてお答へ申した。食後美しい月に浮れて門に出て居たら、若杉様に逢つたので、つい海岸へ憧れ出て了つた。風は金波銀波を動かして遠く聲あり。夕がすみ糺糊たる中に、江の島の燈影星の降るが如く、白飛びや紺飛び、緋博多、お納戸、丸鬚、麻、カイゼル、五分刈、三々伍々、打つれて汗をたどつて居ます。私の指環もうれしいほど光る。

歸つて家へ入る時、根場の母様の水色眼鏡がうごいて、刺つた青い眉をおよせな

すつた、と見たはひが目か。

先刻の十一番さん、貸浴衣を着て、へんな恰好の一人が廊下へ出て、誰かをさがして居られるやうだ。私が出て行くと、

「あゝ、あの君にこれを上げますからね漬物と取りかへてくれ給へな」

「はア」

何だかわけがわからない、

「どう致しますの」

「ごゝにこれだけ餅菓子が残つてるんだがね、これを君に進上するから、少し漬物を下さい」

「あら、さう、ホ、ホ、、少しお待遊ばせよ」

婆やを呼んで、澤山茄子と胡瓜の糠味噌を出して貰つて、小鉢に山と盛り、持つて行くと、

『やあ多謝々々、ちやこれを』

袋ごと渡さうとする。思はず笑ひ出して、

『あらようございますよ、頂いたも同じ事で……』

『だつて、僕等だつてもう澤山だから……』

果物の皮やら、福神漬の空籠やら、コムバの後は狼藉たるものだ。またしても合笑を禁じ得ず。

『皆様は何處の學校でゐらつしやいますの！』

『え、』

と顔見合せて笑つて居られる。

玉枝さんとお湯にはいる。八重ちゃんとお貞はね、よく沈没するので名高いのよ湯槽のふちに頭をのせていゝ心地に目を閉ぢて居るうちはいゝけれど、時々どぼんと頭まで突こんで了ふのですもの、うそのやうだけれどもまつたくよ。ざつと汗を流

して上る、リボンを外して置くのを忘れてビシャクにぬらしてしまつた。

ねむい眼をこすつて時計をみれば、もう十時二十分、びつくりしてお裏へ飛んで行く。襖のきはにひさまづいて、

「若様、御就床時間でございます」

「あゝ」

お次の間へお床をととのへて、雨戸をくりにかゝるとやつと読みかけの洋書をお閉ぢ遊ばす。

お召物をたゞでお洋燈をフツと、お枕元には朱塗の行燈、おぼろゆらめく青蚊帳「御きげんよう、おやすみ遊ばせ」

あゝこれで今日の一日も終つた、學生時代と違つてこの頃の一日の長いこと、一日すむとほつとする、嘗ては氣位の高いのに「姫君」なんて云はれた私が、朝な夕な人の機嫌を取つて、つまらぬ申談など云はれたり、失敬な事云つて弄はれたり、

こんな生活は何よりの苦痛である。それも兄様さへ……ふと眼を落す机の上の寫眞  
立に、ほゝ笑み給ふ御姿、思はず取上げて頬につけた。

あゝ早く來年になれ。來年になれ。兄様！ 兄様！ 兄様！ おゝ文ちゃんとい  
つて下さい!!!

X

髪を結ふ。

癖直しのお湯をとりに行くとその處にフオークや匙を一本とめにして、磨いて居た  
お鳥がいきなり顔を上げて

「お嬢さん」

「何です」

「昨夜お着になつた七番の方さ、ねえ」

『あゝ』

『今朝洗面場でね、貴女のことを、あの女は何かつておきゝなさいましたよ』

『さう』

『それから當家のお嬢さんですと云つたらね、何にしても素敵な尤物だつて……』

七番の方？ あゝさうく、昨夜お着になつた……夏みかん面の初老紳士と、ア

ルバカの縞の洋服の三十あまりのハイカラ紳士。あまり捻つたら形なしになり相な  
至極夏向の涼しげなお髻を、しきりとひねりまはして居らしたつた。

お貞が来て

『お鳥さん、五番様でちよつと』

『チヨツ、うるさいねえ』

器量はそんなでもないが珍しく白粉の乗の可いので汗物のお鳥さん、多い髪を東  
京風の銀杏返しにして、紺飛白を着た襟がぬける程白。母様のお氣に入りを笠

に着て随分ゐばつて居るわ。この頃ちや三番の穂積様、あすこへばかりはいりこんで居て仕方がありません。玉枝さんなど、穂積様の奥さまくつて弄かいます、穂積様はあなん溫和しい方なもので、困り切つてゐらつしやいますのよ。

ふと縁に立つて見る、まだ朝のほどの花やかな、深碧の空の色近く、純白の蓮の花は池の鏡に影を落して木蔭には降るやうな蟬時雨、また今日も照りつけられるのであらう。

高野様からは手紙が来た、部屋へ行つて封を切る、相變らず美しい御手蹟、  
『なつかしき君の玉章これなくば忘るゝ事もあらましを、裂きて捨てんと思へどもなほ捨てがたみ人知れず秘めおく心いかならむ……』

『唯一の記念なる繪葉書は机上の友としてあかぬながめに當時を偲び……』  
丈にもあまる巻紙に走らせた一言一句。例の熱烈の文字、私は顔におし當てゝ了つた。あゝ高野様、私何も貴下に特別に親切になどして上げた覺はありやしないのに

……赤く思つて見れや赤く見えるのか。やさしいお情は身にしみて居るの、せめて兄妹の誓をしてくれ、僕は片時半時も文ちゃんの仕事は忘れられない、戀しい妹と思つてゐるのだ。雑誌や小説位はいつでもお望次第送つて上げますのつて、私、ほんとにどうしたらいいんだか……あれからお手紙ばかり九本受取つた。高野様……それや私だつて女ですもの……戀されて決して憎いとは思ひませぬ。胸に浮ぶのはあの眼、あの聲、角帽かぶつた白色の細面……赤門……文科……

「嬢や、嬢や」

母様と呼んでゐらつしやる。びつくり我にかへつていそいで巻きをさめて簾筒の抽斗に仕舞ふ。嬢や……何と云ふ古風な士族的な言葉なんでせう。だから秋澤さん達に、

「御令嬢、御令嬢」

つて冷かされるんだわ。

母様の御用は、いゝ髪結さんが来たから丁度島田に結げて御覽し有仰るのだつた。まあ驚いた、この暑いのに！ と癡猛に恐縮したが何も髪的事ぐらゐで養母様の御機嫌を損ずるでもないと思ひ返して、鏡に向ふ。

折角結び上げたルイザ巻を惜しげもなくこはされて、癖のしで引こするやら、梳櫛で目の細くなる程引張られるやら……根には紅白の丈長を三枚重ねて結ぶ。お嫁さんのやうだつて女中が代る／＼のぞきに來る、馬鹿にしてゐるわ。

けれど賞められてみれば満更ねえ、故とにはあらねどお化粧し直して、着方も仕裁下しのモスリンさらりと……久しぶりなので頭がユラ／＼する。お晝餐にどうしても裏へ行く事が出来ない、うまく玉枝さんを説きつけて代りに行つて貰つた。母様が、野田様の御見舞に行つてお出と有仰る。ほんとにしばらく御無沙汰した野田様は四五日前から胃をわるくして御病人なのです。丁度時間だから、牛乳を盛つた美しいコップをお盆にのせてお離れへ行く。一寸お次の間に膝をつき、

「あの、野田様……」

「誰か、おはいり」

「御免あそばせ」

しづかに襖をあける、三日見ぬ間の櫻かな。お近眼鏡がいやに光る。いつもは光澤美しくう分けられたお髪もめちや／＼にみだれて、おせい額にかゝつて居る。

「マア、これは？」

「どうも御無沙汰いたしました。いかゞでゐらつしやいますか」  
片手をついて牛乳をおすゝめする。

「お文ちゃん、もう僕ア今度は死にます」

「あれ、野田様」

「僕が死んだら、従五位様をよろしくたのみますぞ」

「エ、／＼その時こそ、煮て食べやうと焼いて食べやうと、此方の勝手でございます

す。けれど書から出る出ると申す化物に、出ました、めしはないふうで……」

「死ぬくと云ふ奴に死んだためしはないつてか、情ないなア」

「ホ、ホ、ホ、何ならお線香立でも持つてまゐつておきませうか」

「オイ、誰か」

「は」びつくりした、ふり仰ぐまもなく殿様はもう襖をお開けおらばして

「お文ちやんだな、今日は厭に澄ましこんどるな、ヤア、高靈がよく似合ふぞ」

「御申談ばつかり……」

仕方のない駄々つ子ちやんだ、出るにも入るにも御家來がついて歩いて、滅多な

事はおさせ申さなかつたのを、野田様の御病氣以來、お一人で御自由に出來るので、

この頃殿様ひそかに喜んでゐらつしやる。

「オイお文ちやん」

「はい」

「話してお出、お文ちゃん」

お文ちゃん、お文ちゃん、てまるでお文ちゃんを賣りに来たやうだ。まあね、私の顔さへ御らん遊ばせば歇まずにお口きいて、またそのお話がせまい範圍の一ツ事……丁度三尺ばかりのテーブルをグル／＼まはりしてるやうなもの。毎日々々同じことをくり返してお話遊ばす、八重ちゃんもこれには困つてたつけ。

やつとそのテーブルから切りぬけて別館へ行く。

空色のパランソル深くかたげてそつと入つた、折よく組は海水浴に行つて了つた後なのでほつとした、二階へ上つて若杉様のお室をのぞく。何處へ行らしたのかしら。からりと浴槽が障子から半身をお現しなさる。『あら、素敵！』と氣取た聲出してウニ笑ひ、随分浴槽もお人がわるい。

「おはいりなさいよ、文子さん、合唱でもやらうぢやありませんか」

「寮歌お歌ひあそばせよ、ね、浴さま」

「え、一緒にね」

花瓶には撫子の投げざし、床の間には雑誌と小説、柱には兄様のお召が一枚ぶら下つて、一ばん風通しのいゝ十畳間、新聞紙はパサ／＼と室中をころげ歩く。

浴様、何故海水浴あそばさないの？ え、私これでも去年まではする分振るつたものだつたのよ、愉快だわねえ、斯う板を抱えて身がまへて、大浪に飛びのつて片手に抜き手を切りながら、ツーツと岸を目がけて突進する氣持なんかつたら！ 底へもぐる、浪をのり切る、そりやもう浴場第一のお轉婆を以て目されて居たんですからねえ。でももう今年はどうしても海水浴なんぞする氣にはなれないの……これだけ年をとつたんですね。

「あら私もよ、お互にねえ、ホ、ハ、ハ、」

机のひきだしから察歌集お出しなされると、バラ／＼と頁がひるがへる。浴様はふと其處をおさへて、聲高く歌ひ出す、

アムール川の流血や

二十世紀の東洋は

コサツク兵の劔撃や

.....

.....

.....

向ヶ岡の健男兒

照る日の影を仰ぎつゝ

『向のお部屋の健男兒

遠慮會釋を他にして』

ませつ返すときがらりと向の窓が開いた、浴様の兄様と吉野様がお顔をつき出す。

浴様は平氣で、

自治寮にて、十一年

世紀新に來つれども

氷りて恨み結びけむ

怪雲空にはびこりつ

怒り　光り散しけむ

.....

.....

.....

虚聲虚涙を外にして

東京の空は山嵐

「十分食つた十一杯」

ペコンの腹は——

さらば兜の緒をしてお

「さらば袴の緒をしめて

「兄様つたらよくつてよ」

流石に失笑してはれた。

夕暮緋のたすきに雪白のエプロンかけたまゝ、門際に佇んで居ると、後から、

「アハ、ハ、ハ、お文さん」

廣瀬様が笑顔で被布を取りながら出て来た。

「ア、ア、

「いや、有がたう、非常によく撮れたです。いくら強情張つたつてこの通りです

お櫃は新に來つれども

ペコンの腹は」

自治の本領現はさむ

肱の枕に一ねじり」

よ。

實際いまの姿はよかつたからね、かう下向いてその……ハ、ハ、ハ、いづれ出来上つたら進上しますよ』

これだから油断も透もなりやしない。返事は何ともせずには驅けこんで了ふ。

この夜兄様への手紙。青山緑水、晝も山とゝぎす啼くところ、久しぶりなる御老親や姉上達にかこまれて、どんな日を送つてゐらつしやるでせう。湘南の妹を忘れ給ふなと書く。

髪結ふて蚊帳を大きうくやりけり

X

今日は水島さんの舟遊び、お重だ、瓢箪だ、お鳥もお供の一行に加はつて、取巻にぎくしく、早くからおでましになつた。

水島さんと云ふのは、畫圖の奥方で、もう八番に一週間あまりの御逗留、お用の女中と、お店の者とやら髪を分けた若い人と、お三人のお仲のよさ。毎晩きまつて三味の音などする。私なんかどうせお話が合ひさうにないから一度もお座敷へ出た事もないが、お兼さん達は、

「水島さんの奥さん、水島の奥さん」と大もてだ。

一體お幾歳……なんでせう、三十一二かしら。まアお粧りのお若いつたら……ふだんにお召などぞろりと着て、コントラスト織の伊達巻姿、粹な東髪、襟足の美しいこと！

今日も紋上布かなんかに、白紵縮緬の墨繪模様をキューツとして、薄納戸色五ツ紋の單練織。白いお指には紅寶石と金剛石、大きな眞珠も輝いて居る。

母様が御秘藏の三味線、舟の中になぞまでお持ちこみになつて、ポコ／＼にしちや

やしないかと私には交渉のない事ながら氣づかはれる。

ゴム輪の俵音もなく、流れるやうに門内へ入る。はつとしたが仕方なく、私と、そこに居合せた玉枝さんとが飛んで出た。手をついて見上れば、あら、五位様

「おかへり遊ばしませ」

左右から正しく頭を下げた。玉枝さんはすりよつて式臺にひざまづいて、お鞆をお脱がせ申すと、私はお帽子を両手に受けて、長い廊下を先に立ち、お室の障子を開けてお待する、今朝すつかりお掃除したところ、掛花活には瑠璃色深き桔梗の一輪五位様、ついと入つて長椅子にお凭り遊ばす。白いおん面は紅に、息使ひさへはア〜とおくるしさう。驚いて、

「どうア何うあそばしました？ お頭痛でも遊ばしますか」

「其様に見えるかい、どうも酔て了つたよ、あゝ！」

お額にお手を加へられる。手持無沙汰にイんだが、

「お召替もそばしませぬ……」

「否、後にする、水を一杯……」

「はい」

急いで引返して水を捧げて来る。と、かちりとお齒にあて、一息にぐつと干し、コップを私にお渡し遊ばしながら、お眼がとろりと、

「昨夜は○○の若山の別荘へ泊つたものだからね、もう今朝朝から……僕ア少し休んで見る。もういゝよ、用があれば呼ぶから……」

両手を金ボタンの胸の上にくみ合して、もう半ば夢のおん心地。お煙草盆のお火を直して、葉巻の箱を添へて、それから婆やに云つてお好きな麥湯の冷ましたのを井戸の中へつけておく。

若杉様、興津に姉様が入らしたから其處へ行つて来るつて、二三日前から口癖にして居らしつたが、とうとう今日二時頃の日盛りに、白飛白に短かめの小倉袴も小

氣味よく、ズグの畫板を肩からなぐめにかけて、玄關に立つて、文さん文さんと呼んで下すつた。あはて、飛び出すはすみ板の間に蹴つまづいて痛い思ひ……延喜でもない私はこれが永いお別れになるやうな氣がして仕方がない。人目なければあのお下、御胸、何絶つてなり泣かうものを！

肩すり合せて門まで出た。

若杉様はまた帽子をとつて、

『ちや文さん、行つて来ます』

『行らつしやるの！ 御機嫌よく！ 早くおかへり遊ばせよ』

『エ、』と會釋してにつこりなすつたが勇ましく……でも曲り角でふと振りかへる。

『若杉様』

と私は思はず、

『早くは、早く歸つて来よう』

「ヤア、浪さん」

どつとはやさされて、飛び退くほどに驚きながらふり向くと、いつの間にか秋澤さん達が笑つて立つて居た、する分よ。

四時過水島さんの御歸館、奥さんはハンケチで口許をかたくおさへて、物も云はずに青い顔して、出向へた女中等を下目にちらと見やつたばかり、得意の筈のお鳥まで妙にしほれて居る。何があつたのかときいてみれば、まア、奥さんは歸りの舟中で小間物屋を開業し、海の中へ入歯を吐き落して了つたんですつて！ 大へんだわ、何でもあれは金歯で百五十圓かゝつたとか何とか、とんびに油揚さらはれたやうな御災難、まさか改まつて御くやみも申上げられないぢやありませんか、これぢやお鳥にやるくと有仰つてたばらふの櫛も取けしだらう。

夕方A組の岩村様と吉野様がやつて來た。用があるから一寸來て下さい、つてお兩人顔見合せて何だか笑顔して居らるゝ。ムツと癪に障つて、

「別館にはお鈴と云ふ受持が居りまう筈よ。御用なら彼女に有仰つて下さい」

「アア、あんなお鈴大明神なんぞ……是非共御合嬢でなければならぬ事なんで、  
まア来て下さい」

「厭です」

強硬に出ると

「ぢや、また來ませう、ハア、ハア、」笑ひながら歸つて行つた。黄金佛つて岩村様の  
のことよ。え何故かつて有仰るの？ ホ、ホ、ホ、先日ねえ便所の中へ落ちちたんで  
すの。あら、まさかたつてほんとだから仕方がないわ。

今夜は五位様、いつになくお食のすゝむ事と思つて居ると、不意に、

「ア、しまつた」

と有仰る、びつくりして、

「おれ、何う遊ばして」

つひうかくと過して了つた、僕アこれで何杯食べたかなア」  
 まさかに、五杯目でございますとも云ひ兼ね、

「あら私……」

「つひ考事して居たもんだから……」

面白い方：私達は考事などして居れば胸がつまつて御飯なんぞ通りませんわ。  
 もしやと待つた別館からの迎ひも来ず、縁に立つて櫛をぬい、前髪をおき上げながら、あかくと池水にうつるお離れの燈火をながめて居ると、こゝし後から目かくしされた。

「あら、お止しあそばせよ穂積様」

「オホ、、、、」

「まア平岡様なの」

向き直つて、二人は手を執つて莞爾した。

X

今日若杉様からお手紙が来た、姉様の一枚頂いたものであらう、薄みどり色の可愛いレターペーパー。文子姉へ、嶺風生なんて美しいペンの走り書き、

「清見寺、三保の松原など云ふと何だか書の中にでも住んで居るやうですけれども、實際はそれ程でもありません。海岸の石ばかりなる事は第一氣に入りません。僕等の様に一足十七八錢の下駄を穿いてる者は、何とも思ひませんけれど、立派なはきもの穿き給ふ方達は随分氣のもめる事だらうといらざる心配を致すくらゐです。清見寺の晩鐘は流石に哀れ深い心地がします。三保の松原へはまだ行つて見ませぬけれども、當地でながめたのでは平凡な松原です。白帆が通つても最う見飽きた圖です。すから何とも思ひません、いや思へません。清見羊羹など一顧の價値なし、併しお土産に持つて行く。僕はやつぱりあの地がなつかしい。秋月君兄妹へよろしく……」

深様にもお目にかける。まアまア随分ね、私の方へはお葉書一枚下さらないと思つてたら、秋月君兄妹へよろしく位ぢや私死んでも浮ばれないことよつて、ひしと私の手を握りしめる。こんな美しい令嬢にこれ程までさわがれてる若杉様はまアどんな月日の下に生れた人でせう。幸福者！ とさけびたい氣がした。

午後ふたゝび別館に行くと、A組を筆頭に竹田様、豊川様、秋月様御兄妹、みんなあつよつて指環送りや雷様が始まつて居る、中村様のお饒舌、秋月様の空笑の高さ、浴様が癪癪おこす、面白がつてはツツと笑ふ。私までつひお仲間入して、夢中になつて遊んで居る中に空は何時の間にか曇つて了つてさつと冷やかな風、と思ふ間に沛然たる驟雨、降るわ、降るわ、一しきりは屋根も抜けるかとあやしむばかり。ごろごろ／＼ごろ。沫き込むので雨戸もひいて了つた。浴様と中村様今までの氣焔は何處へやら、ふるへ上つてあらしやるのにまた笑つた。

やがて青空が見え初めて、豁如と霽つた爽快さ。籠の鳥でも放されたやう、青さ

ん散步にと出て行かれる。道芝の露深く、夕陽山を彩つて、涼氣冷々、礫の香かほる夕風は二尺の袂にはらみあまりつ。

不意に五位様へお二人お客様があつた、取り散らしたお室よりもと氣を利かせて突き出しの八疊へお通し申させる。

五位様、直ぐビールをと仰有る。

大きな玻璃鉢には冷した梨子を山とつんで、溢るゝばかり繁々と盛りこぼしたる葡萄酒、私は象牙柄の小ナイフを取つて剣き始めた、お三人の視線が云合したやうにちつとその手許を見詰めてゐらつしやるので、意久地なくも胸さわがする、剣き終りしを四個に切つて、小楊子そへておすゝめしながら、

「五位様」

「何」

「オホ、、、」

「馬鹿な……」

寸とのびた葉巻の灰をはたいて、

「お文ちゃん」

「はい」

「何でもない」

「まあ」

あかくなつて笑ふ。

白飛白召した二十ばかりの下ぶくれの可愛い方、どうも見たやうなし考へたの筈よ、久様のお兄様だわ。少しお眼が出目なので學習院で「金魚」と云ふ縛おあり遊ばす方だ。今一人は源とした細顔の貴公子、後で言えば河野伯爵の第若君だと……。どうしても華族様はお品が違ふのね。けれど、江田原「河野」つて各々にお呼び捨、少々驚いた。

ベルをおす。玉枝さんが来る、例の通り力んだ顔してウキンナ巻に素敵なリボン  
を掛けて居る。まるで半襟でも結びつけたやうだ、五位様は笑を含んだお眼にお見  
送りあそばす。

軒の掛簾は高くまき上げられて、庭には嵐と燈火が流れた。ほろ／＼と水玉がこ  
ぼれる。

なみ／＼とコツプに推き蟹眼魚眼、火影にうつて、金砂子のやう。

河野様は卓に片腕よせて、

「見よ甘泉の花ちりて」を美しい聲でお歌ひ遊ばした、一高の御出身でゐらつしやる  
のでせうか。

九時過おかへり、玄關に手をついてお送りする。

「御苦労だつたね」と五位様はお如才ない。

「あらお文姉さん、貴女御飯まだでせう」

「いゝのよ、八重ちゃん」

手でせいすると、玉枝さんが出て来て、

「お文姉さん、御飯は？」

「えゝ、いゝの」

「ねえお文姉さん、あの五位様つて方は随分だわ」

「何故？」

「私のことをね、お前の腕は麥酒饅との區別がつかないつて……」

オホ、ゝゝゝ、ほゝゝゝ。

×

連日の氣づかれと睡眠不足か、しんくと頭が痛んで堪へられず、私は二日あまり床中の人となつた。我家をはなれて病氣するのは生れて始めてゝある、心ほそく

てく昨日は一日泣いてくらしした。でも皆さんが「どうしたんです。どうしたんです」ときいて下さる落様はわざく「お見舞に見えて、森永製の美しい細かいお菓子のおまつてるきれいな箱が枕下におかれた。△細からも代表者として中村様がいりました。五位様、廊下で玉枝さんつかまへていろんな事きいて笑つてゐらつしやるのがよく聞える。

『ア、それや芝へ歸ればなほる病氣だ。ホームシックを起したんだらう』

なんてまアいつ誰からお知りになつたんでせう、だから油断がならないつてのよ。いまに「兄様はどうした」なんて有仰るでせう。うれしかつたのは穂積様が丁度泣いてるところへいらして、いろくながさめて舊約の聖書を貸して下さつた。

この皆様の御好意に對しても、寢ては居られず、今日は起きた。玉枝さんに髪を梳いて貰つて、いゝかげんに前髪出してクル／＼巻いておく。浴衣の上に紫矢飛白の被布と云ふ妙ないでたち、被布はよく學校へ着て行つた、と思ふとまた悲しくな

郵便屋が一束ばつさり投げこんで行く、一々選りわけて皆様へ持たせて上げる、中に一通私へ、文字様、秀人、大磯山秀樓にて！　まア、兄様、思はず小さくびした。いつのまに大磯まで行らつしやいました、震ふ手先に讀み下せば、走り書き、

月の夜の潮のひゞきに涙しぬ

常に淋しきをとこなれども

兄様、兄様、あ、四月にお別れしたつきりねえ。この頃の私の風を御覽になつたら、何と有仰るかしら、つとめてく女學生風を、くづさないつもりぢや居るけれど……あれ程お嫌ひな旅館營業……朝な夕なあまたの人に接しては、つひ……昔の文とは人もかはりましたでせう……

兄様堪忍して頂戴よ……

涙の頬をはらつて立ち上つたが、つと應接室に入つてピンと扉に錠をおろして、オルガンの前に腰をかけた。

ちらと大鏡おほかがみに映うつつた姿すがた、我乍われながらら顔かほを背そむけつ。  
窓まどもとの綠蔭りよくんをサヤ／＼と風かぜが流ながれる。

大海原おほうなほらの月夜つきよの景色けしき

晝あに書かまほし筆ふでとりて

月つきも出いでぬ潮しほもみちぬ

とぶは鷗かもめか岩いはの上へに

砂すなにさ／＼やく白波しろなみは

わたつ—みの—きみ—なる

海うみの姫神ひめがみむちあげて

すべ—たも—ら—ん—

あななるはしやあな面白おもしろし

ながめあかさん此このうとよ一夜

## おてんば嬢

×

二人は手をとって春の野を歩いた。柳の糸のゆるくみだるゝ好季節、空は薄瑠璃色によく霽れ渡つて、若草の薫り初々しく、かぎりひ継るゝ小川の水は、活々とした草の間を、花藻の薫する海へと登音和らかに——辿つて行きます。西の天には薄紫の富士の遠山。

この日、しつとり汗ばんで、真白い頬が、ぼつと上氣してる桃代嬢の顔は、輝くやうに美しかった。

桃代嬢は今年、女子美術学校の裁縫科を出た才媛である。二十一だけれど小作りだからお若い事つて。藤色のお洋服がよく似合ふ。ふつわりと中唐を得た東髪に、

いつもお好きな造花の白ばら。私とは女學世界の誌上から交をもとめられた友、今では姉様と呼んで居る。

ふと水に寫つた姿見て、

「ねえ萩ちやん、貴女はほんとにお島田がよく似合ふのね」

「さう」

「蕉園様に願ひたいやうよ。いゝえ、まつたく。私だからいゝけれど、誰だつて思はぬ人はないのよ、しまひには「閨々の情に堪へず、」なんて……おほ、まアそんな事もないでせうが、随分御要心御要心……」

「あら、可愛い花！」

私は身を曲めて摘み取つた。桃代様は何と思つたか、今まで大事に持つて居た莖の束を、ばつと水に投げた。二人は流れて行く紫の花の行方を、うつとりと見まもつた。

やがて二人は疲れて芝生の上にごろつと座る。足袋を脱いだので、草がチク／＼  
むづ痒ゆい。

白手拭を蝶々のやうに冠つた村の娘さん達が、二三人籠を脊負て、春の日に腰の  
鎌をピカ／＼光らせ乍ら笑ひ興じて傍を通つた。私は大聲で「春高樓の花の宴めぐ  
る盃影さして——」と歌ふ。

「萩ちゃん」

「何？」

と眼をあげる。

「貴女と御交際しはじめてからもう一年半ね——。早いものだけれど、永い／＼御  
つきあひのやうな氣もしますわ。貴女もあの頃から見ると變つたのねえ！」

「そりや年を老つたからよ、十八と云へばもう夫人になつてる女もありますか  
らね」

「ほんとに早く萩ちやんのマダム振りが見たいわね、ねえ萩ちやん、遠からの將來において、あの……金子の百合さんのやうな、たのしい新家庭を造つて頂戴よ、私、それを祈つて居ますわ」

「厭だ。その頃は、姉様、もうお母様よ」

桃代様はそれに答へず、手近の草をむしりながら、

「何もね、私がよくばりに貴女を獨占しやうとは思ひはしないけれど、あんまり多勢、御親友があつては、實のところいゝ氣持はしないのよ……」

顔をあげて、

「男子の方が羨しいわ。せめてその半分でも、私、萩ちやんに思はれて見たいわ」

「あら、姉様」

肩にかけられた手をふり放し

「いやだ、姉様！」

「ほんとに僕(わが)んだこともありませんよ。手紙(てがみ)の返事(へんじ)さへ几帳面(きちょうめん)にはよこして下さ(くだ)ら

ないんですもの。そして此方(こなた)から上げなければ幾月(いくつき)でも……」

私(わたし)、貴女(あなた)が貴女(あなた)な

ら私も私(わたし)!

と云(い)ひたくつても、やつぱり私(わたし)は煩惱(ぼんごう)の人間(にんげん)、我(が)まんしては居(ゐ)られな

いのよ。私(わたし)、貴女(あなた)にいつ捨(す)てられて了(しま)るか判(わか)らないんですもの……」

「まア、桃代様(ももよさん)」

「女の友達(おんなともだち)はどうしても水久(みき)にその交情(かうじやう)をついける事(こと)が出来ぬ(できぬ)ものですつてね。萩(はぎ)ちゃん(ちゃん)は異性(いせい)の方がお好(す)みなんぞせう?——」

「あら」

「若い夢(わかゆめ)……まつたく若い夢(ゆめ)ですわ。花(はな)やかな青春(せいしゅん)の夢(ゆめ)に酔(よ)ふてゐらつしやるのよ  
いまのうちです。わけもなく心(こころ)が跳(は)つて、熱(あつ)しやすくて……」

「そんな事(こと)止(と)ませう姉様(ねえさま)。唱歌(しやうか)でも謠(うた)ひませうよ」

「え、謠(うた)ひませうよ。オホ、、、」

つよく私の手を執つて握つた。

兩人は立ち上つた。

青草に曳く影法師。黄ろい蝶がひらくと、すり合せた肩を越えて柳の蔭に見えなくなつた。

×

翠緑したる小松原の裡、春雨しとくと降る日、しめやかなる物がたり、しみくと床しい懐かしい感じがしました。

静寂にして而も平和なる御生活、紅塵萬丈の裡に常に功名に燃え、かすかなる未來の光明？を望んで、心神徒に萎えつかれんとしつゝ浮世のさがに戦闘しつゝある小生の心に、如何に痛烈な深刻なイムプレッションをあたへたのでせう！嗚呼六分の狂氣、四分の熱、胸中絶えず或もの、缺陷を感じ、常に或ものを憧憬して

止まざりし住にし日を思ひ浮べて……

天気よけれど駿河灣の碧浪の澎湃たるに心かきみだされつゝ

〇〇濱より    △    △    生

×

松波さま。

久々にてのおんめもじ、あゝ私は……今日までもまだ夢のやうでございます。

思ひに思ふた願ひが叶ふて、三年ぶりの對面……。うれしうございました、この位うれしいと思つたことはありません。松波さま、ほんとによくお立より下さいましたわねえ。あんまり……あんまり……。うれしさあまつて、悲しいやうな氣もいたしました。

まだく、申上げたいこと、きいて頂きたいこと、山ほどありましたものを、口の

重い私は、どうしても言葉が出ませんでした。今から思へばあれも、これも……伺ひたかつた、お話ししたかつた！と實に残念で残念でなりません。

松波さま、ちつともお變り遊ばしませんのね、ほんとうに昔のまゝでゐらつしやるのね。ほんとに不思議な御縁ですわ。三年前、たいかりそめのカルタの席で……云はゞ行すりの異舟の客、あの時はこの後ふたゝび相見る事のあらうなど、は、夢にもく思ひがけませんでしたものを……。

いろくお噂したせいでせう、昨夕千鶴さんの夢を見ました、大そう背が高くおなりで、昔ながらの頭高の束髪、紫矢飛白の上品な……ふり向いてニツコリなすつたお顔の美しかつたこと。さめての後の物悲しさ、人戀しさ、私はたまりかねて飛び起きて了つて、机に凭りました。そして赤くたいれたランプの光りをみつめながら、まんぢりともせず思ひ明かしたので、今日は肩がこつてなりません。

松波さま、私一生忘れませんわ。あゝしめやかに雨そゝぐ日、恥かしかりし對ひ

居や、門邊に残るわたちの跡も君がかたみよ。

ほんに我ながらふがひない、何故あのやうにお話が出来なかつたでせう。さぞ養え切れない女だとおんさげすみ遊ばしたでせうね。

つひ御禮申後れました。けつこうなお土産まで頂戴致しまして、誠に相すみませぬ。あやにく母が不在中で重ねく失禮いたしましたのね。あゝ松波さま、またこの上の縁あつて、お目に掛る日はいつでせう、再會の機を祈ります。

今日も朝から雨がけふつて……丁度あの日のやうでございます。お懐しうございますわ。

くだらぬ事ばかり書きならべて、御勉強のおさまたげを致しました。おん身御大切におんいとひ下さいまし。さやうなら。

松波さま 御許に

千

代

X

今日はあまりいゝお天氣の日曜なので、初枝さんに誘はれて、防風つみに出掛け  
た。

菜の花がいま眞盛りである、私は三年振りで唐人笛の音に似た麥笛を鳴らして見  
た。道々すみれや蒲公英で二人の手籠は一ぱいになつた。

藤戸橋を渡り掛けると、次郎ちゃん(初枝さんの弟)が息せき切つて飛んで來た。

萩香さん、お客様で迎に來た、と名刺を出す、眉をひそめ乍ら手にとれば、あら、

本田達彦！鉛筆の走り書き、出京の途中一寸おより致しました、お目に掛けて行

きたいと思ひます。急ぎますからどうぞ直ぐにね」まア本田さんがどうして？

「初枝さん、私はお先へ失禮よ。」

とどん／＼引かへした。

「母様！」

からりと勝手口から飛び上り、いきなりお座敷へ行つた。

「や」

「入らつしやいまし、御機嫌好う」

座つてかろく頭を下げると、

「しばらく」

吸ひさしの糞を灰にさしこんで、

「大分大きくなりましたね、萩香さん」

「エ、そのわりに貴下はおぢいさんにもおなりなさらないことよ」

「いや、どうも、なかんづく口先の發達が、もつとも著るしかつたと見えますな」

「無論よ、二十世紀の婦人ですもの、口も八丁、手も八丁……」

「そんなにお轉變ばかりしてると、良人君になりてがなくなりますよ」

「餘計なお世話よ。あなたのやうな人を持ちはしないから大丈夫だよ」

「これは御挨拶。驚いた、流石はデカダン令嬢……」

「何です、偽君子……」

「大分御盛んですね、ホ、ホ、ホ、」

お茶をいれかへてはいつていらした母様が

「お兩人とも相變らず……萩香にも困ります」

口でたしなめ目で笑つて、それでも一寸おにらみなさる。私は堪らず吹き出して  
了つた。

白うらの大島かなんかに銘仙の小袖、新しい小倉の袴を正しく着けて、火鉢を  
前に威丈高、もう生徒でもないものをと可笑しい。五尺六寸、十八貫の好漢、天晴  
れ二十八の男振り、「僕は依然として放浪生活だ、併しまだコゲつかないだけそれだ  
け、廣い未來が見えて居ると思つてゐる」といばつて居る人だ。非常に氣の小さい

神經質で臆病な……そして皮肉屋で口が悪くつて、お好きなものは猫(四つ足の)と洋食。嫌いなものが、女學生とお故郷とハイカラと……、おほ、秘密！ 秘密！

久しぶりだから、それからそれへと話が絶えない。杉なりに盛り上げたビスケットの山は、たちまち陥落して了つた。母様は幾度かお茶をさしにお立ちなされる。

談、いつか私の作物の上に落ちて行つた。

『萩香さん、おこつちやいけない。——僕がこんな事云ふて、イヤな事、いけすかない……といつぞや言はれた酷評を賜はるかも知らぬが——僕ア貴女の作が氣に入らんのだ。萩香さんの文章は常にハデをお好みだ、ハイカラ式だ。ね。僕、自分がパシカラだから云ふんぢやないが、また何處かといへば陰鬱な氣質だから云ふんぢやないが、少し方面をかへて、何だ、憐れな孤兒をうつつとか、良人を失ふた賤の漁師の妻を描くとか、要するに光明方面に——瓦斯や電氣のバツと明るい方面を主とせず——その方面を寧、いやしんで——得意の女性的の細い觀察を以て人世——』

自然を寫されたいのだ。演劇でも悲劇でこそ、その本色を發揮されるれ、喜劇の文學的價値に至つては、少しく文學を解するものは、識者を待たずしてその云ふに足らぬのは分明ぢやないか。萩香さんにも似合ぬ……ヴァイオレットだとか、ローズだとかの語のある文章は、何だかイヤな氣がさす。一般の讀者の受物なら格別、自分の作物としての品格にもかゝはる。兎角ウワベの淺墓なやうな書き方についてちやア、恐らく僕ばかりがさう思ふばかりぢやなからうと思ふ。敢てその言葉が悪くはないが、その、前にもいつた電氣のばつとした座敷的……そんな場所の出で來るのがいかぬと云ふんぢやないですよ。それは飛んだ間違ひでいろんなハイカラの役割が入用なのは勿論だ、併しその主眼點……つまり筆者の心の置きどころが、ヴァイオレット式でなかれと……」

「ホ、ちやあへリオトロープ！」

「冗談ぢやない」

叱るやうに

「貴女の憧憬して居らるゝ大學生だの女子大學生だの、僕アそんな材料の入つた物ア大嫌ひです。何だか餘韻に乏しい淺墓な、奥行のないやうな氣がしてならん」

「ところが一般青春の人々はさうでないですからね——嫌はれたつて困らないわ本田さん」

私はね、心の冷たくなつて仕舞はない前に、大いに讀者に悲憤の涙を流させてやるべしだと思つて居るのよと我知らずほゝ笑んだのを見て取り、

「萩・萩香さん！」

とせきこんで

「『葉全集を讀まれたでせう』

「はあゝ」

またしても微笑を禁じ得ない。

「十三夜ねえ、僕ア一等好きだ。今でも頭の中に残つて居ます。上野からそら、俥をやとつて、その男が昔の戀人であつて、はな紙かなんかに小鏡を包んで上げる處なんか、僕ア下手な芝居なんぞ見るより、どの位うれしく、胸が——胸が——同情の涙にみつるのをきんど得られなかつた。廣小路の枯柳、影長く地に曳いてとか何とか、本郷座の書割もとても反ばん！女性の小説はかくありたいやうに思ふ——」

皮肉な笑をふくんで、

「貴女は華美な事をお好だ、僕等よりも氣強い處がある、物に當つてもくくちけぬするどい物があるんだ一葉女史のやうに夭折されなないね？ や、いやこれは延喜でもない事を、失敬、失敬」

私、思はず苦笑して、

「本田さんは何にでも一葉さん、一葉さん。一葉さんと十三夜の引合に出てこない事はないのねえ、貴君、賞められる位だから、そればかりでも一葉さんは、偉かつ

だに違ちがひない……」

本田ほんださんオリエントの姻ひよりをふき出し乍またら

「それから貴女あなたのはだ、又候また、屹度おつとカルタ會くわい、お作まにも僕ぼくに下くださるお手紙てがみにも、一度ども洩もれてた事ことはないやうですな、いかにもく執着しうちやくが深い。あれももうこれから眞平まへらです、僕ぼくアいつも胸むねをわるくして頭痛づつうを催もよふす、あの浮薄ふはくなヴァニチー」

「またヴァニチーの攻撃こうげきですか。澤山たくさんよ、もうわかつて居ゐましてよ。どうせ直わたはヴァニチーのかたまりよ、本田ほんださんは君子くんしよ」

にらめてやつて、

「男子おとこのくせに女學世界ぢやうがくせかいなんか買かつて讀よむくせに……頭痛づつうを催もよふす程ほどなら、お手にななさらないがい、ちやありませんか。女おんなの雜誌ざっしを喜よろこんで讀よんで——そしてそんなに攻撃こうげきなさるのは、やつぱり何なんだかヴァニチーよ。ヴァニチーは女おんなばかりの、專賣特せんばいとく許品きよひんぢやなくつてよ」

調子てうしにのり

『本田さん、ヴァニチーでいつたい何なんですか。私は、人間の本能ほんのうだと思おもつてるのよ、  
「生いきたい」と云いふ本能ほんのう……その本能ほんのうに附か随ずいして、當然たうぜん來きるべき副本能そふほんのうだと思おもふの  
よ。男子だんしにだつてこのヴァニチーは、必かなずあるに違ちがひないわ。男子だんしはそのヴァニチ  
ーをヴァニチーとして、必かなず出だしに外部ぐわいぶにあらはさない所ところがまた、一種しゆのヴァニチ  
ーぢやないの。こんな風ふうに考かんがへて見みると世よの中なかはまるでヴァニチーが日光にちくわうのやうに  
みなぎつて居ゐるわ、本田ほんださんは正まさに悶絶もんぜつして了しまはなければならぬ、ほゝゝゝ』  
笑わらひ出だし、

『人間にんげんにはどうしても自己じこの制御せいぎよや克己こくきと云いふ事ことを取とり去きつて、氣きまゝに、本能ほんのう的てき  
に動うごかうとする、いはゆるそのデカダン性せいねえ、デカダン性せいのあるものだと思おもひま  
すわ。これは昔むかしから悪わるい事ことに考かんがへて居ゐるやうだけれど私わたし、この人間にんげんのこの性せいが活動くわつどう  
の根こん源げんだと思おもふのよねえ、絶對ぜつたいに自由じゆうを欲ほつする慾よく、この慾よくの變形へんけいしたものが、即すなはち

活動ぢやないでせうか。ヴァニチーもさう一概に排斥するものぢやありませんよ。

否、ある程度までは必要なものですわ」

「あゝ、つひに度すべからず、僕アもう何とも云ひません。自然主義君、存分能筆を振ひ給へ」

ついと座を起たれる。私は吃驚して、

「あら、本山さん」

「失敬します。ハ、ハ、ハ、」

パチンと時計を開けて見せ

「またお目に掛ります。まアお身體を大切に、……過度の御勉強はおつゝしみ尊

一ですぞ」

「いけません、母様、母様、」

「何ですな、仰山な、」

ぬれ手をふきくお勝手から出ていらした母様も驚いて、

『まア、貴君！』

『もうお歸りなんですつて、随分……随分だわね、母様。』

『いや叔母さん、お邪魔しました。ハ、ハ、ハ、一寸おより申すつもりであつたんですが、ついお話がはづんで……意外に……何です、今日はいそぎますからこれで』

『まア——』

まア、まア、とふたりで云つかけながら、仕方なく共に玄關まで立出つ、式臺に跪いて、手早く薩摩下駄直したを、『痛み入ります』と手をあげて無造作に穿き、『失敬』と一寸帽子の廂へ、三足ばかり行きかけて『や』と立もどられる。私は無言でステツキを差出した。

『左様なら、お大事に』

『御きげんよう』

がらくと門のくゞりをくゞいる。

そよら春風、たわなる櫻の枝を誘なふとハラ／＼ハラ／＼落花の雪。柱につかまり身をそらして、見送る袖に襟に肩に。

向ふから黒紙を抱えた白胸かけのお濱さんが、小股の急ぎ足でやつて来る。あゝ今日は結日だったのね、傾いた鬘に手を加へて、こんなこはれた髪で惜しかったわと思ひながらはたと障子を閉した。

×

打振る水色、應ふる淡紅色！ 落ちんばかりに窓から半身をのり出して居る久子さんをのせ、汽車は、えん／＼と進んで行つて了つた。

私はそこへ泣き倒れたかつた。

行く人は前途に輝く光明を望み、學びの道に分け入らんとての門出、勇める心に

はこの悲しみも、悲しみとするの餘地はないであらうが、残さるゝ身を推したまへ  
 ……

力なくく家へ歸つて、机の前にくづ折れた。

逢ふは別れの始めとやら、うれしいまとも東の間の夢、その姿に接し、その聲  
 をきいてる間は、たゞうれしくてうかく過した三日間……、また逢瀬のそもい  
 つなれや、思へば果敢なし、わりなき縁、あゝまさきく在せ、君よ。

萬感こもぐ思ひに燃ゆる胸を抱いて、西の方函嶺をのぞめば、またさらに熱い  
 涙が止度なく湧き上るのである。

あの美しい蘆の湖の美しい風景！

義兄様、義姉様、いま如何に、

あゝ過ぎ去つた回想には、云ふ事の出来ぬなつかしさがこもる。湯本迫ひの電車  
 の車掌の顔すら、尙目の前にちらつくではありませんか。

風光明禰のあの仙境を後にして、入學のため御上京の久子様、羨しいわ。あゝ、浪風あらしき漁村の住居は、かよわい身に堪へがたい。私は思出に泣くべく生れて來た子なのだらうか。

お道さんもあんまりな。此の間の學生についても……、私は人傳にきいて憤怒に身をふるはした。友達甲斐もない人である。

久子さん、いまいづかた過ぎ行き給ふらむ。夕の風に心し給へ、羨しとも妬ましや、君は花やかな女學校へ……、あだとは知れどすいろに胸ゆらぐ。

この湘南の片ほとり、君を慕ひて涙する、はかなき妹を忘れ給ふな。

かぞふれば、私がある山中の町を辭してからもう八月目になる。昨夜は若様方のお噂も出た。あゝ、あのお縁側に肩すり合せて立つた時、おほえず息のはづむだも優しく云はれたお言葉が、たゞ何となく身にしみた……もの。今さら胸に湧き出て若き血汐の狂ひたつ。面影戀へばうつなり、涙浮めるおのが瞳に、雲のやうにぞ

うつりましょ、

二十一になつた久子様は、まだ肩あげして居るのに三ッ齡下の私が……私はずく／＼悲しかつた。誰だつてまだ十八ぐらゐで、落す人はありやしない、強ひられて泣いてあらそつて——エ、そんなに惜しいものか？ そりや惜しいわ、情ないわ、涙がこぼれます。私、肩あげとつて平氣で居る人は、無神經だと思ひます。同じ年齢の人はおろか、口繪の寫眞、小説のカット、まづ目を落すは肩のあたり、娘の心も知らぬ母様、肩巾ひろき大人ぶりを、ふさひぬと宣りたまふ口惜しさよ。乙女老いしを祝ぎ給ふて……。

さらぬだに背の高い私。更け性で、川島さんてば、どうしても二十だつて承知なさらぬですもの。

あゝ人も我も、いつ／＼までも、青春でありたいわねえ。

女は先天的に秘密の多いもの、わけても私は、罪業の深い秘密の多い女ですわ。

つて久子様はお泣きになつた。

秘密……私には秘密なんか無い。けれど、眞の自分と云ふものを、滅多な人には知られたくないと怒つて居る。

自分から悲しい身の上話や煩悶など打明けて、先方の同情をもとめるやうな事は大嫌ひ。

それで人の同情がうれしいのです、何よりも／＼嬉しいのよ。身にしてみても一枚の葉書……一枚の葉書を氣の遠くなる程読み返したり、たつた一言の言葉を、終日胸にくり返して、よろこんだこともありました。

ある人は萩香のことを、優しいおとなしい内氣な乙女と云ふ。泉田さんには、氣強い處があるとあるをりくり返された。

萩香さんはたのもしい。お年が若いのだ。卑俗な現世を知らない。白牡丹のやうなものださうな。牡丹そっくりだ。

そのブラウドに富んだ處などはそつくりだ！

とも評された。

何處となくしづんで淋し氣に見えるのは、語らぬ苦痛があるのではないか、と云つた人もあつた。

いつたい男子つてどんな女をお好になるんでせう。色賣る女ぢやなし、こびると云ふわけではないけれど……。

今日までまだ一度の縁談もかゝらず、熱烈な戀愛の甘酒に酔ふた事もない身が悲しい。

久子様はさまで美人と云ふでもないが、實に人を引付ける魔方のある方で、これのためもう何人の學生を失戀のふちに投げこんだか知れぬ。私はほんとに羨しい、女の誇りであると思ふ。

これからあのすらりとしたおからだに、長めに穿いた袴の裾を、踵の高いソラン

ス形のお靴で軽く蹴たて長い袂を翻し、本郷通りを御通學の姿は、さぞや幾多の角帽連をして、大いに煩悶せしめることであらう……。

久子様、羨しいわ。運命の鐵鎖につながれて、恨みつゝ泣きつゝなほも都戀ゆる田舎乙女をあはれとおぼせ。

見上ぐるかなた、夕榮花やかな相模連山、あゝ思出多し兩嶺湖畔……。

×

春陵き南の國は、早や櫻ちる晩春となりぬ。

松青き海邊にゐます君の今日此頃、如何に過させ給ふらん。

想へば二たとせの昔なりき、片瀬川のほとり靈ちやんと共に、紫の磯藤の花をつみけるは。

あゝ逝く春よ！ 汝に逢ふ毎に、年々思ふ事の多くなりまふ。

## 千代子様

X

母様は靈ちやんをつれて、川島様へお出掛になつた六疊の室一杯、緋の長襦袢やら鬱金のしごき、黒襦子の丸帯、腰帯の白、箆笥から引出して取り散らされたのをその儘、私は袖を重ねて窓に凭つた、

火鉢においた鐵瓶は微かな音を立て、優しい湯氣を吐いて居る。

すつきりと柔かに晴れた空を静かに風が流れて、ハラリ／＼薄紅の雪が降つて来る。

あゝ月岡様は私の『肩あげを下して』を評して、わか／＼しい悲哀？　あまい煩悶？　と有仰つた。あまい煩悶？　わかき悲哀？　……それに違ひない。

Y7

生

あゝ春は逝く、春は逝く、ブライド多き十八の、幸なる春の逝くを悲しむ。

月岡さん、月岡様、どうにか御都合遊ばして、せひせひ當地へも御立より下さいまし。お目に掛つていろいろなお話を、伺ひたいのでございます。きいて頂きたいのでございます。田舎人の蛙口、そしらばもしれ云へ、君はなつかしい我が文筆の友。ねえ、趣味の友と有仰つて下すつたわねえ。

今や落花既に草に埋れて、若葉の匂ひ空を籠め、緑すが／＼しき暮春の天地に、人の心も鎮まるの時、床しや京めぐり大和路の御旅、さぞな繪行脚歌行脚に、美しい君の御詩想は、ほとばしつて百合と薫り、星と輝き……あゝおん羨しう存じ上げます。女はつまらないのねえ、

私は、私はお待ち申して居りますよ。月岡様……。

## ハ　ー　モ　ニ　カ

×

「母様、私今朝對江館でね、藤村様にお目にかゝりましたのよ」

「え？」

「けれどね、それは夢でしたの」

「いやだね、千ちゃん、眞面目くさつて……。ホ、ホ、ホ、」

思ひあまつて朝飯食べながら云ひ出したら、母様の笑ひに打消されて了つた。あ

ゝあの夢？　耳に残るは「内藤君！」

と涼々しいお聲、昨夜小町の歌を云つて寝たおぼえもないに……。

曉の夢は正夢だとか、猿、食ふな。

日課のお掃除。せつせと空拭かけて、靈ちやんの袴が釘に引かけてあると思つたら今日は日曜だつて。

箧板を中にして、母様と坐る叔父様の夏羽織。なんか一向張合がなく、厭で／＼

たまらない

姉さま、髪を結つて頂戴なとリボンと打ひらを持つて来る、丁度いゝ、とらまへて厭がるのを無理に稚兒輪に結げてやる。思ひ切つての根上りに、巾廣の銀丈長を前でくんで……可愛いこと、一入の令嬢ぶり。と云ふと大層名手のやうだが、實は一時間半もいぢくつて居たので——あらまあ惜しい！ 少し根が右に曲つてた……ふと戀しくなつて、お世休みに泉田様へ手紙を書く、けれど途中で引やぶつて了つた。あ、私、どうしても以前のやうな心であの方に對する事は出来ないのよ。去るもの日々にと云ふも、年々に思ふ事の多くなりまさるゆゑ……。

三時にひよろりと東京から幸夫さんが見えた。二三日泊めて頂戴とのこと、いゝ

喧嘩相手が出来た。いろいろお土産頂く。

母様は茶をいれながら、

「幸夫さんの半年見ないうちに大きくおなりな事ね、どうしても徴兵ものですよ。」

「いゝえ、僕なんか駄目ですよ、心臓はよわいし、脳もわるいし……」

左様よ、年中ぶら／＼して學校へも入學ない様な人！飛んでもない藤村様がやつて来たものだと思ふ、夢の御神も何を戸まどひしてか、人違ひにも程があるわ。晚餐のお仕度には私も白の料理前掛胸高に、ノートを挟んで立ち出る。

花やかな空氣ランプの下、食卓をかこんで、四人が座につく。

まあ、幸夫さん、何處でおぼえるのだから、人ずれて居て口のわるいこと、猛烈だ。千ちゃんも揚げたフライは生だの、どうもこのオムレツは素敵だの、さう云ふ口の下からバク／＼ムシヤ／＼。よつ程お皿を引たくつて了はうと思つたが、それもおだやかでないから蟲を殺して我慢する。今度は眼の玉の飛び出すやうなライスカレ

「でもこしらへてやらう、

わざ／＼フオークの手をやめて、姉妹を見くらべ、

ねえ、千ちやん。靈ちやんは美人だが、君あ駄目だなあ』

だつて。さう云ふ御自分の御面相はどんなものだい。お平の……長芋ならいゝけれど、まるで蓋みたいな顔して居るくせに。

食後の運動にピンポンをやる、幸夫さんあまり落してばかり居て、愛想がつきて了つた。したら、ぢや談話會をやりませうよと靈ちやんの發言、尋常小學校辯論部の小辯士、お伽噺がお得意なのだ。

茶釜が歩く茂林寺の話、爐にかげられると足を生すやら、しつぽを出すやら、和尚様が紙屑屋を呼んで、と談はますます佳境に入ると、幸夫さん、コクリ／＼とポトトレスだ。白川の波や高かりけむ、大分ゆれがはげしい。ホ、ホ、ホ、。

私、お座敷へお床をのべて上げたら、僕、一人でこゝへ寝るんですか、つて、え

それがどうして、ときけば、鼠がこわいんだつて。この家には猫が居ないから、  
……あきれ、物が言はれない。仕方がないから私等の寝間との境の襖を開けておい  
て上げる事にした。

×

「千ちゃん——いきなり耳許で奴鳴られた。びつくりして目を開く。幸夫さん笑  
ひ出して、もう七時過ぎだせ、千ちゃん、よく眼の玉がとろけ出さななだつて、  
何です失敬な、昨夜十二時に寝たんですもの——おゝまぶしい。ホ、ホ、ホ、まるで  
若杉君が近眼鏡とりあげられて了つたやうな眼つきだ。いゝわよ幸夫さん、いまに  
どうするかおぼえてろ……、今日からお納戸緋の袴に着替へる。肩上げをおろして  
から九寸の袖が長過ぎる様に見える。

朝飯の時幸夫さん、手をすべらしてお椀のお味噌汁を膝の上におちまけて了つた。

萬さーいとやしてやつたら母様に叱られたけ。

お辰さんがまはつて来た、久しぶりで高嶺に結げる時流をおはぬ超然とした……など、よく泉田さんに冷かされたが、私この髪が一ばん好き。銀簪きらりと、合せ鏡 相變らずよく出来た、島田にかけては、流石名うてのお辰である。後天神、前びつくり、ホ、ホ、、寫眞を撮るなら後向き……。

また幸夫さん

『ヤア、素敵だな、馬子にも衣裳髪形ち、よく云つたものさ。千ちゃん、女振りが二割上つた』

もううるさいから相手にもせず。

午後から母様とお柏餅をこしらへる、小豆をするやらしぼるやら、私はしん、このでつち方、すると幸夫さん此處へもふらりと出て来て、やあ始まつたね、僕も手傳つてやらうと坐りこまうとする。邪魔よ、幸さん何だ、ともう喧嘩ごし。母様は笑

ひながら、

『幸夫さん、丁度いゝこれをかきまはして頂戴、お鍋の底に焦げ附かさないやうに』  
 『あら、厭だ、幸夫さんにそんな事させて……、なめちやいけませんよ、指突きこ  
 むとやけどしますよ……』

『おき給へ、馬鹿にしてら。あ、熱ッ！』

ブス／＼鍋がはね始めたので、あつ／＼、あつ／＼と幸夫さん、へつびり腰になつて  
 顔をそむけてかきまはしてる。

やがて鍋を下した。母様が、「甘いかね？」と一寸指の先で味を御覧になると得た  
 り賢し、「どんない？」と幸夫さんもやる。

鍋を入れる段になる。幸夫さんが邪魔でしやうがない。極力退散策を講じたが、  
 一向無神経で一緒になつて手を出す。かと思ふと、

「何だ、不器つちよな手つきだな。ハ、ハ、ハ、千ちゃん、君のこしらへた奴あ何だ

い。まるで芋蟲のやうな恰好だ。やあ、餡が舌を出してら、きたならしい』

『よくつてよッ！』

いきなり私はこしらへかけの奴を投げつけた、ビシャンと頬べたに命中した。幸夫さん、青くなつて立上る、

『ア、コレ〜何の事です、困りますね。千代子、お前がわるい』

『だつて、だつて、幸夫さん、男子のくせに臺所へなんか出しやばつて……何の事です、權助……』

何だ、幸さんのやつたのはみんな腹がやぶけちまつてるくせに、グツと起つて部屋へ入る、丁度三枝様から手紙が来た。直ぐにお返しの手紙五枚ばかり書き上げて了つても、幸夫さんはまだ臺所で笑ひ聲がしてる。あんな事に趣味持つてる人なのかしら、かう云ふ男のマガムに成る女こそ災難だ。しきりに炊事の世話をやきたがつたり、衣裳の事などに嘴を入れたがつたり……たまらないわね、そしてそ

んな男にかぎつて、自分の業務にはきつと抜目があるものだ。幸夫さん伯父様のおとをついで、彫刻家になるのださうな、何が出来たものか。あの人が斯界の泰斗と仰がれる頃は、私だつて文壇に雄飛してるわ。中學の三年を三度も失敗した停電さん。それで美術園としての日本がどうだの、僕が洋行する時にはかうだの恥かしげもなく大氣焔ばかり吐くから可愛い。私、兄様が欲しいなんて云つたけれど、こんな兄様なら願ひ下げる。私の机を引かきまはしたり、大切な手箱を開けて見たり、曳出しに富枝様のおいてらッした、「神を知る道」つて本があつたつて、クリスチャン、クリスチャンと冷かす。N様に頂いた一葉女史追悼會記念の一葉全集へは、「親愛なる妹千代子君に呈す。幸夫」なんて書いてしまふし、富枝様の口眞似ぢやないが「そのいけない事お話になりません！」

湯々と湯氣の立つのを廣蓋に入れて運んで来た幸夫さんのスタイル、おほ、おほ、  
マア驚くわ、幸夫さんはいくら食べるんでせう。なんば甘黨の私だつて、五ツ目

にはウンザリしたのに……。お腹中胃袋なんだよ、きつと！横目でそつと散らばつた皮を勘定したら、母様ににらまれた。

はせくり返つて餡が流れ出て居るのを辯解して

「僕のアね、恰好に關はず餡が澤山はいつて居るんだからね、僕ア、自分のこしらへた分だけは、みんな自分で食ふよ」

「お澤山召し上げ、けれど家ぢや胃散の買おきはございませんよ」  
ばん／＼言つてやる。

郵便局へ行つて歸つて見ると、お腹が出来で好い氣持になつたのだと見え、私の部屋でうたゝねして居る。引ずり起さうとしたがふと富枝様のいたづらを思ひ出し私もやつて見やうと鍋墨をとつて油でねつて、そつと忍びよつて、額へ大きな目玉と、序に赤インキでカイゼル髭を書いてやる。ホ、ホ、何にも知らずによく寝てゐる、少し口を開いてスヤ／＼と、素知らぬ顔で茶の間にもどつて雑誌續んで居ると、

ノコノコ起き出したらしかつたが、どうして氣のついた事やら、疾風の如くこゝへ飛びで来た。こはくなつて私はハダシで馳け下り、大騒ぎの最中、「千代子！」と耳をつらぬく母様のお聲。二人同時に振りむくと、幸夫さんの顔見て失笑だして了はれた。

幸夫さんやはらかい頭の毛をさか立てゝ怒りながら、井戸端へ出てシヤボンをぬるわ〜、泡坊主の化物みたい……、けれどなかく落ちるものですか。私は今一度おどかしてやらうと思つて、そつと玄關で幸夫さんの靴を穿かうとしたら、どうしても足がはいり切らないの。生憎そこを見つけられて了つた。ヤア驚いた驚いた、大足だなア、一たい何文穿くんだい？ 私も負けては居ず、夢二式ですもの、十一文半よ。エ、ほんとに、と驚いて居て可笑しかつた。

夕餐前入浴。

寝しなに幸夫さん、脊中がはてる、はてるつて。私、澄まして居た。ホ、先

刻お春流して上げる時、新しいあかすりで力一ぱい引こすつたからなのよ、いゝ  
 氣味だわ。

明朝は四時半に目がさめますやうに、と人麿様に願つて、歌を三べんつ云て寝る。  
 ほのくと明石の浦の朝ぎりに、島かくれ行く舟をしぞ思ふ。ほのくと明石の浦  
 の朝ぎりに……。

X

夜來の雨は心地よく霽れ渡つた。朝日に榮ゆる若葉の光り、空を流るゝそよら風、  
 活動の氣に満てる初夏の萬象、私の胸は高うく、痛い程に浪打つのである。

奔馬の形するやもゆる新緑。

隣家の小母様に招かれてお湯を頂きに行く。みだれ箱に帯をといて、するりと左  
 の肩を傾げて着物を脱ぎ捨て、湯槽には菖蒲の束ねたのが漬つて居る。手に掬ひ上

げて見ると、強い匂が刺すやうに鼻に沁む。

いゝお加減！ 透き通るやうな湯に身をしづめて、窓に玻璃越しのさはやかな空を見上げながら、心行くまで茹つた。香の高い石鹸をふくよかな乳房のあたりへ塗る。襟と指先をよくくみがいて、さてお化粧にとりかかる、クリームを薄く引いて、べたりと左の手にうけた白粉、右の手をそのまゝ耳の後から濃くつける、よくのびる。ぬり終へてからざつと一度洗つて、ぬれ手拭でヒタ／＼おさへる、きれについたこと、ぼーつと上氣した頬の色、くつきりとさわだつ生え際、湯氣に蒸された髪がはつとふくれる。

小指の腹で眉をふきながら、手拭くはへてお湯どのを出る。

お定まりのお柏餅で叔母様とお茶頂いた。まア、苦いお茶、含むやうにして眼をつぶつてやつとのどへ通す。

「千ちゃん、今日はお兄様は？」

「あら小母様、いやよ兄様なんて……あんな茶目さん！」

「あの方、御親類ですか」

「え、従兄です」

と云つたが、もう小母様の顔色でわかつた。いくら甥でも従兄でも、若い男なんか来て居ると直ぐ目をつけられるんだわ。だから私、幸夫さんなんか大嫌ひ、兄様だけの許婚たのつて、大に人格に關するわ。早く追ひ出しちまはなければ何と評判されるか知れやしない。

母様、お師匠様の許へ御祝儀に行つておいで、と被仰たけれども、厭で家にグズグズして、あゝ一昨年のお節句は……と思ふと悲しくなつた。たのしい團樂……津村の牡丹見……、妙さまはもう可愛い丸鬚妻になられたとやら。齡は私より上だつたけれど、あんなに——「ばん幼く居らした方が——」。

古川へ釣に行つた幸夫さん、二時頃お腹を空かせて歸つて來た。

あんな汚いどぶつ川の鮎なんぞ、澤山釣つて來たら散々いちめて、自分で料……さ  
せて困らしてやらう、と待かまへて居たんだのに、大きな魚籠の中のぞいて見たら、  
一寸五分ばかりのが三つ!! あんまりアテが外れてだまつて了つた。

それでも幸夫さんはそれをしらやきにして、練に通して、軒へぶら下げた。いつ  
もの泥坊猫が來てとつて了へば面白い。

誰からともなく待つた便もなくて今日も暮れた。

X

午前無事。

十二時頃から〇〇町へ行く、撮影のためだ。うるさいから幸さんには秘密、どん  
なに撮れたかしらん、

椅子に腰かけて本を讀んでる七分身、きつと少し首を傾げて居てよ。あの、羽織

の紋が……見えてるでせうか。私、うつしつけないから駄目、寫眞は嫌ひなだけれど……今度だつて厭だつたけれど……再びと來ぬ花十八の春姿……など、云はれて見るとまつたく其通りだから、後の紀念？ これでも昔は角帽懸がせた事もあるなんて……ホ、ハ、ハ、ハ。

白粉を買つたり、雜誌店をひやかしたりして、夕方歸宅。竹田夫人からお手紙が來て居た。まア赤ちやん生れて……男のお兒？ おめでたう、よかつたわね、うれしい。定めし可愛い兒でせうねえ。ホ、ハ、ハ、ハ、まだ生徒でお出の若い父ちやまのお顔はどんなものだらう。あ、私も近くに居るなら、直ぐさま上つて抱いて上げるのだけれど……。

「八日目の夕つかた、N様と今一人、同じく法科の△△様とおよろこびに來て下さつたの。お兩人とも白い服を着た看護婦に抱かれて無心にねむる子供を見て、

嗚呼可愛らしいな！

とそれよりお言葉はなかつてよ。私、ほんとに嬉しかった……」

など、あるあたり、初々しいお奥——いゝえ、母さま姿がまぎく〜と目に浮ぶ。

あゝ、御縁で不思議なもの。まだ三月に足らぬおん交り、お目に掛つた事もない。のだけれど、何だかこの方はおなつかしくつて……きつと優しい活潑な當世風の夫人よ。二十一と云へばまだ〜ねえ！ 富枝様なんか肩あげしてあるわ。

春風渡るスキートホームの中に、世にもうれしいたのしい幸福を一身にあつめ給へる羨しさ。私お祝ひには何を上げやう？ 今度上京したら何をおいても、きつ

と〜と静ちやま——名は静雄——抱きに上ることよ、抱かせて頂戴よ。

幸夫さん明日は歸京と云ふ。妙なもののね、流石に名残惜しく、今まであんまりいぢめたのがすまないやうな氣もする。つひ優しく、

「ねえ、今夜はお別れに何か面白いこととして遊びませうよ」  
と云ふと

「あゝそれがいゝ。カルタはどうだ、お得意のカルタ!! 僕もこの正月には随分やつたよ杉原君がね、幸夫君のカルタときちやア癡猛な勢だ。東都若葉會の重鎮たる僕も少く驚かざるを得ない、あらゆるカルタ會のレコードを破つたつて……」

まつたくよ、幸夫さんのカルタと來ちやア、誰だつて面喰はざるを得ない。自分の札が出ると二枚送る、人のをぬけば三枚「むべ山」はどうだの雪月花が何だのそして我黨の最も爪はちきするところの、引つたくりつかみ合ひ、などの蠻的行爲をむしろ得意になつて、カラッ騒ぎばかり。いくら私がカルタ狂でもこんな人となら眞平、まつびらだ——

曉餐後、部屋へはいつも竹田夫人へのお祝ひ狀書く。鳳雛の曲……新體詩を!

と頭かゝへて考へたが駄目。茶の間では大分賑かだ。

「そよぐ橄欖風かをる、瑞枝の春にあかつきの、光りこぼるゝ木下蔭……千里の力こめて湧く……」

あら、幸夫さんげし、聲ね。始めてきいてよ！ 今年の寮歌知ってるかしら……  
 煙に似たる花がすみ……我知らず、机をたぐいて小聲で歌ふ。  
 靈ちやんが走りこんで来た。

「姉さま。幸夫さんがね、姉さんを呼んで來給へな。デツカンショーでも合せませうツて！！」

## 少女の戀

—

「詩の御神の性うけて

崇さが中に優しうて

詩に榮ある君ちやもの……

……………」

重い高嶺を俯けて、夕べ凭る縁の柱、櫻紅葉がはらはら散る、櫻紅葉がはらく  
 散る、あゝ湘南の侘住居。

今年の秋も逝かんとすなり。君居ますあなたの空を仰いで、日毎こゝに泣く萩  
 香がせめて御夢には入りませんか。

迷ふて悶えて罪の子はいまに魔となる、鬼となる。

炎と燃ゆる胸を抱いて、ほつとつく息から火焔の吹かぬは不思議、あゝ私の身は焼けつくされる。

戀して成るべき戀でもなく、またこの戀とげやうとは思はぬに、何故すつぱりと思切れないのだらう。どうせ私は人知れぬ片戀の苦痛をなめて、生きねばならぬ運命なのだ、たとひ思死に……戀死ねばとて、我が戀しいいとほしい人に何として打明けられうぞ。

それや打出したとてまさか、まさか、恥しめる様な事は成さるまい。あはれこぼるゝ露にさへ、燃え立つやうにあふれたる、深き情の血はゆれて、涙惜しまぬ君だもの。よし御立腹なさるにもせよ、御蔑み遊ばすにせよ、一掬の同情はそゝいで下さる筈。いつそ……いつそ、思切つて申上げやうか。どうしても何うしてもあきらめられぬ。あの涼しい御眼、凛々しい御肩、まだ愛度氣ない丸顔の、笑かたむけら

れる度氣の遠くなる程勇しくなつかしうて……。併しもう病重つて半年あまり、日々の咳嗽と咯血に身をけづられて、どんなにお變りなすつたらう。

それを思ふと澄さんにせめて、半月一月でも介抱させて上げたいわ。何にも御存じない澄さんは、晩翠寮の夕のお窓に広い母様の事でも思出して涙ぐんで被居るでせう。あゝ純白雪のやうな乙女、この間お目に掛つた時、どこかおわるいの、大變お顔色が悪いわ、と美しい眉をひそめて愛しげに覗きこまれ、この人なくばとひそかにのろつて居た私は、正面に顔を合せ居なかつた。

晩の草葉に下りる露よりも、清い儂ない美しい戀よ、大原さん、澄さんならばつゆ御無理とは思ひませぬ。早く御本復なすつて、たのしい家庭を造つて頂戴、いゝえいゝえ私の思ばかりでも、決して決して死なせはしないわ。病床には福音がある、身健なる人の到り得べからざる歡喜の境がありとさく。ミューズの神の奏でます、現し世になき靈韻の慰藉の曲は永久に、君の幸をば祈るらむ、萩香も遠く祈り

ます。涙を飲んでお二人の上を……………けれど、けれど私は苦しい。あゝ大原さん……………。

「澄さん……………」

と口をついて出ると同時、はら／＼と熱い露の玉が散つた。

戀のかたきと恨むにはあまりに清い澄子さん、無心で居るだけおいとしい。けれどかの君のあれ程の熱情を意識したなら、屹度お泣きになるでせうね。不治の病人だからとて、無情なそぶりはなさいませぬ。

澄さん、萩香が手を合せます、薄倅詩人に身を捧げて頂戴。名をすて誇りを捨て病床に侍して上げて下さい。人もあらうに我が口から云はねばならぬこの胸は、熱湯をつがれるよりも辛いけれど、何もこひしい人のため。私は命も入らないんですもの。あきらまはせぬが堪へます、生きた死になつて…。ふたゝびお目には掛れないの、遇つたら萩香は鬼になる！

あ、近く春の落花の夕べ、かりそめの御歸國と見送つたが、永久の別れとは知らざりし、西と東と三百餘里の山川へだて、互に成らざる戀に泣く。つらいわ、つらいわ、大原さん。エ、いつそ私も病床に寝られて了ひたい。かつと血を吐く身になつて見たい。私は死んだつて縫子さんがある。縫子さん縫子さん、私のやうに母様に御心配かけてはいけませんよ、お母様、堪忍して下さい、萩香はお先へ行きまする。

我知らず襟かき合せて、夢心地に眼をあぐれば、あたりの空一面、ミルクに紅をとかしたやう、夕焼の美しさ。

颯と尾花を渡る夕風一陣、袂に孕んであやしうぬれた頬を吹く。

## 一

今朝目がさめたら八時過ぎ、いそいで飛び起きた。秋晴一碧、空高う澄んで絹糸

を散らした程の雲もなく、仰げば我が影の映るかと思はる。

風邪を引いたのか、二三日前から咳嗽が出て、殊に昨夜は傍に氣兼ね寝られない程だった。玻璃越の日のまぶしさに目をほそめ乍ら、羽織に手を通して居ると、

「萩さん、おや起きたの。どうだえ」

と母様が入つてゐらつしやる。

「お早う御座います。大變な寝坊しちまつて……、綾子さんはモウ學校へ行きましたか」

「あゝ。萩さん貴女今日は山川さんへ行つてらつしやいよ。昨夜なんか大分切なさうだつたぢやないか。ほんとに咳嗽は心配だから早く」

「あらお母様、これつくらゐ、一寸風邪引いたんですもの、直ぐ直りますよ。厭だわー」

「だって、まア行つてらつしやい。若い者が咳嗽をしてるのくらの厭なものはない

からね。和さんを御覧なさいな、あの——』

不安な目つきを遊ばすので私はだまつて了ふ。

御飯食べてから髪を束髪に直し、銘仙の被布引はをつてポーア巻いて、仕方なく山川醫院へ行く。入口に佐野さん（看護婦）が立つて居て、

『あらお嬢さま』

とびつくりする。

『また来ましたわ。先生は』

『丁度よう御座います。今日はまだそんなにこんで居りませんから……。またおやせ遊ばしましたね』

『左様？ 有かたいわ——』

笑ひながら代診の大島さんにみちびかれて診察室へはいる。真白い診察服を着けた山川醫學士、鼻下の美髯を捻り乍ら顔をあげて優しく微笑まれた。こゝへと指さ

されるまゝ椅子へ腰を下ろす。

「先生、私また風邪を引きましたの、今度は少し咳嗽が出て困りますので」

「はア成程」

卓上のゴールドウオッチ、ばちんと開けて、指輪の輝く手を差出される。脈をとられ乍ら私は無理に俯いて居るが可笑しくつて堪らない。この人去年まで脛つきりの袴に大道を闊歩して居たパンカラ大學生。何故山川さんは醫科になぞなつたんでせうと和さんが氣にする位だつた。のが少しの間にこんな立派なカイゼルを仕立てり、凝たネクタイをぶら下げたり、すつかりドクトルの風采がついて、角帽時代とは別人の觀がある。レートでもおぬり遊ばすか、美顏術のトイレットボックスでもお取よせに成たのか、きめが細かくてお綺麗なこと、この様子ちや白粉もつけかねないわ、お醫者様つて云ふと何故みんなかうおしやれするんだらう。だから私Mなんかつける人大嫌ひ……。

「は、鳥渡お舌を……」

口を開かせる。咽喉をけんした。そして小首をかしげつゝ胸に手を當て、こゝが痛ますかと大きく、寝汗は、發熱は、と連發する。ヒトを肺病扱ひにしてゐるわとむらゝ腹が立つたが、大原さんのこと思出して急に胸が一杯になつた。いつそ私だつて同じ病氣に掛れば本望だけれど……。

けれどあゝほんとうにもしや……もしや……私等姉妹もいまに母様を泣かせるやうな運命なのではあるまいか、大原さんはお母様からの感染……、逝きましゝ父様の血統をうけついた身のもしやほんとに……ぞつと寒氣がして目を閉ぢた。

ドアーをおして出て來たら、もう患者が三四人たまつて居た。私は佐野さんから二日分の水薬と含嗽を渡され、ちつと咽喉をお痛めになつたゞけですけれど、氣管でもわるくなると大變ですから、亂暴な事遊ばしちやいけませんよ、と念をおされた。よつ程私のお轉變には驚いて居ると見える。

薬瓶をさげ、ゴム草履に音もなく敷石をふんで門外へ出たが、お母様は秘して被居るけれど、私の父様は……父様はね、血を吐き給ふ御病で……あゝ遺傳……遺傳……結核……ぢいつと熱い涙が滯いて我知らず醫院の門を振りかへつた。

## 三

あゝ今日も好いお天気、玉のやうに透けた青空に、綿雲が一ツ二ツ浮いて、赤蜻蛉が力なく飛んで居る。

桂子様へ手紙を書きかけた、途中で厭になつちやつて、お座敷の縁へ安樂椅子を持出し、雑誌を二三冊かかへて来て身を投げかける。

私ねえ、與平さんの繪が大好きなのよ。あら櫻井伯爵令嬢……まアこれあの櫻井様の姫様かしら。だけど些とも若様に似てゐらつしやらない、若様のお妹ならもつとく、傾城傾國の美人でなくつちやならぬ筈だわ。さう、さう、櫻井伯つてば美

登子(とこぢよし)女史(にょし)は何(なに)うして了(しま)つたらう、あれ程(ほど)約束(やくそく)して置(お)きながら、葉書(はがき)一枚(まいまい)よこさないとは餘(あま)りひどい。あの人も一種(しゆ)のデカゲンだからみんなに嫌(きら)はれるので、私(わたし)も同情(どうじやう)はして居(ゐ)るが随分(ずいぶん)だと思(おも)ふ事(こと)がある。それは女(をんな)の細腕(ほそうで)に繪筆(えいひつ)を握(にぎ)つて、男(をとこ)の中に立(た)まじつてやつて行く(いく)の(もの)だもの、なみ大抵(たいてい)の女(をんな)ぢやあるまいけれど、でもこれが一度(いちど)は妻(つま)と呼ば(よ)ばれて、家庭(かてい)を造(つく)つたこともある人(ひと)だとはどうしても思(おも)はれない。八歳(はつさい)になる子(こ)のお母様(おあさま)だなんて嘘(うそ)のやう。薄化粧(うすけいざう)して華手(はで)な廂髮(ひさしげみ)、紺(こん)カシミヤの袴裾(はかまきり)短(みぢ)かにズツクの畫板(ゑいばん)懸(か)けて、寫生(しゃせい)に出歩(で)いて居(ゐ)る妻(つま)などは、小説(せうせつ)の女主人(へらうじん)公(こう)にでもありさうだつた。熱心(ねつしん)なクリスチャンで、作家(さくか)では白鳥(はくてう)さんと葉舟(えふしゆ)さんが大好き(だいずき)、豊(ゆた)かな頬(ほ)を薄紅(うすべに)にそめては盛(も)んに文學(ぶんがく)を談(だん)じたつて、櫻井(さくらい)伯(はく)の寵妾(おほひめ)——だつて？ まさか……でせう、屹度(きつと)。

桃荊(もくわい)式部(しきぶ)さんの食卓(しょくたく)日記(にっぎ)、私(わたし)これがすつかり氣(き)に入(い)つて了(しま)つたのよ。ほ、ほ、ふぐちやうらんぶら下(さ)げて自轉車(サイクリカル)走(は)らす白面(はくめん)蟹眉(かにまゆ)の學習院(がくじゆいん)君(くん)、夕美(ゆきみ)さんもすのぶん

ねえ。

神よ勝させ給へ？ 兄様？ 約婚？ たのもしいのね、私の野球狂も久しいもの。

母様には狂的じみてるねと笑はれ、綾子さんまでがお姉様はベースのチャンよなんて冷かす。だつてだつて勇しいんだもの。選手は前途洋々春海の如き學生、あの希望に輝いた顔、生々した眼、ユニホームに身をかためてしづくくとグラウンドに出場する武者振、女と交際して嬉がつてるやうなものは男のカスだ。長揮一撃すれば熱球砂を噛んで飛び、カッソンと云ふバットの音が青い無限の大空に響く時なんか、思はず渾身の血汐が沸き立つ。

まゝになるなら私もあの三角の應援旗を振りまはし。

「見よや早稲田の野球團……」

とでも咽喉のやぶける程嗷鳴つてやるんだわ。振へ!! 振へ!! 早稲田!! フレー、フレー、フレー。

「御免下さい」

がアらりと玄關の格子が開いて、

「お嬢さんはお出ですか？」

男の聲がする。吃驚して椅子からすべり落ちた。はて誰だらう、私んところへ来るやうなお客はなかつた筈なのに……西さんか。

きよがお取次に出たのをじつと聞いてると、

「は、お出で御座います。お名前は」

「僕、山田です。お嬢さんにさう云つて下されやわかりますから」

「は、山田様で御座いますね、一寸お待遊ばして……」

オヤ／＼のオヤだ。襖を開けて「あのお嬢様……」と云かけるのを「きよ」と手でせいして、

「何んな人？」

「は、若い書生さんで御座います。山田さんと有仰いまして」

「人違ひだわ、きよ。私山田なんて人知らないよ。まさか縫子さんとこへ来たのでもあるまいしね、左様云つて御覽！ 當家は江崎ですがどちらかとお間違ぢや御座いませんかつて」

「へえさう申上げますので——」

怪訝な眼つきをしながら引退つて行つたが、

「あのお嬢様は御存じないと有仰います」

「エッ」

「お嬢様つて萩香様で御座いますか。縫子様の方で……。當家は江崎で御座います  
が……。」

「イヤこれは、失敬しました。茶店の婆奴、たしかにこゝだと教へやがつたんで：  
…どうも、失敬、甚だ……。」

がらりびしやん!

あんまり可笑しいから出て行つて見るときよがたまげた顔をして、

「まあ厭で御座いますねお嬢様、随分そつつかしい人もあるもんで。やつぱり御門達で御座いましたと。ヒトを馬鹿にしていますわ、お嬢さんはめらつしやいますかなんて参りました……」

「ほ、っ、一體どんな人なのよ、きよ」

「何ですか黒木綿の紋付羽織を着て居ました。電車の車掌みたいな帽子をかぶつて……。私お嬢様がどうしてこんな人にお近づきだらうと思つて吃驚しましたので、そしたらまあホホ、っ、っ、」

「まあ白條!!」

かつては向陵舎寮の窓に、輝く前途を夢みて、燃ゆるが如き血潮をたぎらしたこともあるとやら。さこそは三ツ柏の徽章凍々しかりけむ人の、夢のやうにも目に浮

お……ふいにさし迫り来る腥き咳嗽、せき入り乍ら座敷へ馳けもどつて椅子の上へつゝ伏して了つた。あゝ生きた死骸……萩香は……。

## 四

「お姉様ツ……」

鬢美しき夕方、兩袖を胸に重ねて縁に立つて居ると、木戸をおし開けて縫子さんが飛びこんで来た。

白茶地の友禪メリンス、ひわのリボンでくつた袖口を高くまくし上げて、ふさくと鶯色のしごきを後に結だ愛度氣なさ。年よりも三ツばかりは幼くて、とても五年生とは見えないが、我が妹ながらほんとに容色よし、朝日に榮ゆる櫻の面に新柳の眉、鬚のくちびる、(それで私には些とも似て居ないと云ふから癩に障る)先生がおハナに遊ばすのも無理はないと思ふ。

「お姉様、散歩に行きませう。其處までね、さア、ねよ、よー」

柱につかまつて甘へかゝる。大きく結んだ白リボン夕日に映じて木目のあやがチラ／＼と、ぬれたやうに黒髪が光る。

「厭ですよ私 山川先生に叱られます。夕方外へなんか出ると、またのどが痛くなるもの」

焦らかすので身をゆすぶつて、

「いやアお姉様ア、馬渡よ。いゝぢやないの……。よ、さア」

「ぢやお母様に 内密よ」

「エ、」

手を引かれて庭下駄のまゝぬけ出たし。夕榮の富士、さながら金屏にゑがゝれたやう。見渡す相模野の秋更けて、みだれた尾花がわびしくなびさ合つて居る。

足にまかせてそこらをさまよつた。

「お姉様……」

「ハア」

「あのねエンゲージメントつて何のことなの。あの今日學校でね、先生達がうちのお姉様のことをいろいろお訊になつたのよ。そしたら花枝さん達が、江崎さんの姉様は陸軍中尉のエンゲージメントだつて云ふんですもの。私ウソだと云つても聞かないのよ。ねえ、ウソだわねえ」

「馬鹿な……」

私は思はず苦笑ひした。誰がそんな下らぬ事云出したんだらう。些とお門が違ひます。お京さんと安藤中尉のあの蜜のやうな戀中、そんな風評が耳に入らうものなら、放心すると取つかれるわ、桑原桑原々々。

「だつてお姉様……」

縫子さん少ししよげて手を脊へまわし、自分のお下げのしつぽを引張りく、



『はい』

と柔順に出て行つた。

『入らつしやいます』

襖を開けて手をつくつと、

『やあ、は、は、は、もうお忘になつたかも知れませんが四年前……佐藤です』  
との御挨拶。

『まああんなこと、始終お噂申上げて居りますのよ』

なつかしさは胸一ぱい、語るにあまる思ひをのんで、私は俯いて了つた。角帽姿で別れた人はいま敏腕の法學士、萩香もあの頃の下げ髪が頭高の束髪にかはりました。御新調の冬服・快いらしやの香が鼻を打つ。

『何ですか、まだ御養子は？』

『あらッ！』

何と云つていゝか、眞赤になつて了ふと。

「いゝえ貴郎、これはまだ十二月生の十七で御座いますもの。なりばかり大きくてもカラねんねですから仕方が御座いません。裁縫のけいこに參つて居りますのですが」

あゝ私は何にも知らないねんねかしら。母様はいつもまだねんねですと有仰る。青春は人の花だもの、かまやしない。けれど母様がお知りになつたら、何んなにおなげき遊ばすだらう。

だつて乙女はいつまでねんねで居らうぞ、日に日に人性の階段を一つづゝふみ昇つて行く！

「どうも困りますんですよ、とかく裁縫なんかは嫌ひましてね、學校へやつてくれなかつた、やつてくれなかつたばかりを申します。貴方、父が亡くなつてからはそれつきり、學問の方は致させませんのですが、何分机にばかりかちりつきたがつ

て……。」

「御無理もありません。けれど女に學問は入らんですよ。ま、お母様のお手傳や裁縫を専一、それが結構です」

やつぱり母様と云合せたやうなことを有仰る。ほんとにお嬢さんがお可愛想ですわ、學校へでも入れて存分に勉強させて上げたなら、と云つてくれたのは美登子女史と木村の夫人ばかりだ。が、何も今更女學校へ入學たいなんては決して思つて居ません。併し向上心はまだ火と燃え立つて居るものを。

「どうせ私なんか駄目なんですわ。學校へはやつて貰へず、折角習はせてくれる裁縫は嫌ひですし……こんな不幸な性質なので……つまり自分が悪いんですけれど」  
思はず云ふと、

「此頃の若い女はみんなさう云ふ傾です。併しまつたく學校なんか駄目ですから。僕もその學校を……つれて來て居ます、今夜お話にぬらつしやい、お相手させま

せう」

母様が、

「あの萩さん、佐藤さんは夫人をお迎になつたんですつて。この五月……」

「あらさう」

と云つたさき、言葉がつつかない。

夫人お貰ひなすつたのが不思議でもなし、さうとは覺悟して居たけれど、今更に今更に一種の悲哀な感じが胸にあふれた。と共に前髪ふくよかなきやしや立の優しい嫁君を想像して見る。紋羽三重の羽織でも召して、東屋の二階の欄により乍ら淋しく待つて居らつしやるでせう。連れてらつしやればいゝのに……跡見の出身だと有仰つた。

「お幾歳？」

と誰にともなくさくと、

「二十一です」

火箸で灰をかきませながら、

「丁度貴女の姉さんです……」

姉様ならば貴方は兄さま。あゝ本當にこんな兄さまが欲しい。あつたらどんなに嬉しいだらう。

暮れ行く室内に雪のやうなカラーと、金のカフス釦と、床の間に投げざしの白菊の花があたりをはらう。あと青く一文字にしまつてた口もとが、濃い口髭にかくされたので、大變更けて見えるけれど、相變らず可愛い顔してゐらつしやるわ。むつみ遊んだ四年の昔……併しもう私のお友達ぢやない、母様のお相手だ。あの溫和しい無口な方がどうしてこんな話上手にお成りだらう、よどみなく皆さんの御消息など語らるゝ。櫻田さんは地方の中學校に教鞭とつて居らるゝとか、それが一番意外であつた。

やがて私がお茶をかへに立たうとすると、

「や、どうもお邪魔しましたッ」

と手をつけて立上られる。みな引とめる勢もなく共に玄關へ。

「どうも失禮致しました。ほんとうにようこそお訪ね下さいました、有がたう存じます。お目には掛りませんが夫人にどうぞ……」

手早く靴を穿かれた後から、母様が外套を着せかける。

「明朝は七時の汽車で一まづ東京へかへります。それから任地へまのりませす、しますと當分——御きげんよう」

「佐藤さん、左様なら」

「御きげんよう、夫人によろしく」

「や」

とまた帽子をとつて格子の外で更に一禮、靴音勇しく門外へ消えて了つた。

はかなき別れかな。

四年の間、ふつとも便のなかつたまにあんな立派な紳士になつて……。あゝ佐藤さん、ほんとによく訪ねて来て下さいました。

忘れ給はねばこそ——嬉しう思います。

けれどまたそんな遠くへ御赴任遊ばしては、いつまたお目に掛れる事やら、今度はお父様になつてゐらつしやいませう。新夫人の幸を祈ります。御兩人永久に——御幸福で御榮え遊ばせや。

## まつかぜ

上

「妙さん」

不意と呼び掛けられて、熱心に編物をして居た二人は一齊に振かへつた。

「妙さん、お茶でも入れ給へ。今日は君等の番だらうせ。どうか昨日の栗饅頭をね

「……」

「あれだ、妙子さん」

と千賀子は平気で編棒を縦横に動かしながら、

「打捨つてお置き成さいよ。何て食しん坊なんでせうねエ兄様は……あら、廣岡の兄様は？」



千賀子は相變らず澄まして、黒スエッチの鞆をこの／＼と走らせて居る。

「厭に超然たる態度ぢやないか、何うせお茶の水のお仕込は違つたもんだ。ねエ、おい千賀さん」

「ほほ、兄様は餘程お口になつてるのね、悪口つたら横に裂けてる儘に云ふし、食べる物にかけたら——おほほ、いや、しんぼ！」

「何だと？」

「まゐお千賀さん、兄様のお妹だわね」

襖越に妙子が笑ひ聲でませ返す、千賀子も笑つて振り向いたがその可愛い眼は、臍枕して皮肉な笑を含んで居る兄をぐつと睨んで、赤革の手下鞆やうヴイオリンやら、小説やら、無造作につまめた床の間の間を鳥渡見かへる。直男はこゝろする毛糸の玉を捕へやうと手をのばし乍ら、

「今日は何うしたんだい、大層御熱心だねエ、こゝ、何だい靴下かい。無論僕のたら

うね」

「誰がヒト！ 宅の兄様なんか……、こりや兄様の、——だけれど廣岡のよ」

「はは、驚いた。ぢや妙さんのは、何、シャツだつて、それや僕になんだね、有がたいな」

「自惚強いわ、それだつて廣岡の兄様のよ。あ、兄様そんなに欲しけれや松岡さんに頼むとい、高村さんは松岡さんに絹糸の栞を貰つて、それは、大切に成すつてゐるわ、おはほ、ほ、ほ、ほ、」

「馬鹿な！——」

寝ころんだまゝ煙草盆を引寄せ大和を吸ひつけたが、

「千賀さん鳥渡、一寸そこの障子を開けて呉れ給へ」

「厭、今に妙子さんが此方へいらつしたら、坐らない中に開けてお貰ひなさい。第一御自分でするがい、わ、私は兄様の爲めに立つやうな足持つて居ないわ」

「何とでも言へ、今におぼえてろ、千賀さん」

「あらいつでも兄様の方が忘れちまふ癖に、私記憶て居るわ、寶石入りの髪櫛はど  
うして下さるの」

「妙さん聞いたか、何でもこれだからね、實に！」

「はは、、またなの。もうお千賀さん、兄妹喧嘩はお止しなさいよ」

袂を小腋に挿んで、片手に茶盆を右手に鐵瓶をさげた妙子は、また笑ひながら入  
つて來た。

「さあ兄様御自由に、お千賀さんいらつしやいな」

錦出の菓子鉢に盛つた栗饅頭を直男の前におしするて、町寧にお茶をつぐ。

「アラまあ、兄様」

今踵をつけて居た編さしの靴下をおいてむき直つた千賀子は直ぐ、

「まあ兄様は四ツや五ツ一息なのね、こんな人に風月のなんて勿體ないわ。芋羊羹

位で澤山よ。ね、兄様、鶴沼はお薩の本場ですつてね……」

わざと仰山に云ふ。

「おい／＼人間の悪い事言つてくれ給ふな、これでも……」

「その上南瓜なんか召し上ると云つたら、奥さんに來人がなくなるつてんでせう、おほほ……」

「まあすゝぶんね、ほほ……」

心淨き立つ十八九、くづれるやうに兩人は笑ひ入る。廣岡兄妹、篠谷兄妹、共に隔ない従兄妹同士、殊に千賀子と正とは幼馴染の許嫁、妙子の姉と呼ばれん日も指折る程の間近なのである。いくら當人とは氣心を知り合つて居るにもせよ、小姑は仲よしの妙子であるにもせよ、先方には兩親もあるものなり、双親なしで乳母の手一つに育つた世間見ず、あまりに無邪氣なだけこれからこの無垢な心に世の憂味嘗めさせるのがいちらしく、せめて今の間にと涙の濡れるやうな兄の情で名を卒業の

御褒美にかり、こゝ鶴沼對江館の三階を占領して、氣樂な朝夕過ごすのももう二十日あまりと成る。廣岡兄妹があと追ふて來たのは丁度一週間前、それ以來千賀子の様子は、粗豪な男心にも可笑しいと思はれるまで、めつきり溫和しうなつた。

つい昨日までマガレットに五時巾の桃色リボン。リボン鞭鳴らして居たものが我から進んで肩上げを下す程大人びたとは云ふものゝまだ十八のお嬢様。兄の前では矢張りこの通り憎い程の我儘一ぱい、それがまた可愛くて可愛くて大切で、明けても暮れても「千賀さん、千賀さん」新婚旅行と間違ればやし立てられるのも度々だとやら、愛度なくぶつくりとした頬の光澤、中高顔の顎がくゝれて凜と張つた鈴のやうな眼、きつぱり引いた濃い眉、流石校内一と取つた才色双美の名空しからず目のさめる位いきくと可愛く美しい。ましてこの人のお兄様、去年までオーパコートに身を固め、インキ提げての赤門通ひ、その角帽姿は幾多の廂髪連をして、さぞ篠谷病にかゝらしめたであらう。兄妹とは云ひながらどちらにどちらが似たのや

ら、只生寫しと云へば足る。笑ふ時の目元や美しく揃ふた齒ならびまで、厄年はもう一昨年（ともし）の廿七と云ふに、親の遺した財産のおかげで世の職業難の生活難のといふ事空吹く風と聞流せば、いつまでも昔ながらの學生風。早くも二三人の父たる人もあるものを、年中妹を弄かつては笑はせたり怒らせたり、また日曜毎には無理やりに引張出して屹度二人連の散歩か圖書館行き。その千賀子を手放さねばならぬ此頃平常程の元氣もない。あゝ有がたく嬉しいものは親亡き後の兄の情、妙子は色白の細面、鼻筋の通つた口の小さい、お雛様のやうな顔立であるが、花にたとへて千賀子が遠徴なら女郎花とも云ふべき人品。何處となく淋しくて、人をチャームするやうな表情の美を持たぬ。活潑よりはむしろ突飛な篠谷姉妹にくらべれば、陰氣な温順い、いはゆる良妻賢母の女、出身の學校も裁縫女學校とやら聞いた。

兄をやり込めた千賀子もその可愛い、口で、なか／＼よく平らげる。妙子は笑を合んで初めからつ、ましうお相伴をして居たがふつと、

「あゝ兄様の御注文でしたのね」

思ひ出したやうに、ニツに割つた菓子をそこへおへて立つて四枚の障子をスラスラと開け、その儘縁へ出て欄による。

颯と吹き來つた穢臭い風はバラ／＼と前髪を亂して、髪を止めた白茶のリボンがハラリ襟元に落かゝつた。

「あら妙子さん、済みません」

後ればせ乍ら千賀子も輕輕に立つて來て、一寸唇に當るや嫣然、約指環輝くその右手を、欄に置いた妙子の上に重ねて頬擦ばかり身をよせると、此方は妙に微笑みながら力をこめてちつと執つて、

「……未來の姉上……」

と私語た。

「あらッ」

豊かな頬をはつと染めたが嬉しさは口もとに流れて、夢見るやうな瞳を翳す。

花曇りの空のうつとりと海も霞んでいつもは手に取るばかりの伊豆が薄墨のやう只江ノ島の岸を洗ふ白波のみは永遠に變らない。磯馴の枝ぶりひねた青松白砂はがななに見ゆる富士までもとつきき、左は小松まぢりの砂原を遠く隔て銀のリボン引のべた片瀬川、裾模様のやうな對岸の松林の間を走る電車。みなこれ一個の大なる箱庭、目を伏せればもう四月も十五日、盛り過ぎてあせた八重桃や牡丹櫻がホラリホラリとしつきりなしに時ならぬ雪を、昨日よりは五分通りのびたらしい廣い芝生に散らす。

妙子はなほ千賀子の片手を執つたまふ

「柴松のくすの茂みに妻こひて：：。」と小聲に口詠む。

「アラ妙子さん、それは何に——」

「御存じなくつて、——西行のよ。江ノ島の：：あの洲鼻ねエ、彼處らで讀んだの

ですとさ。あ、西行てばねエ兄様、大磯に鳴立つ庵と云ふのが御座いますわね。けれどほんとの鳴立つ澤は、この鶴沼あたりだつたんですつて、峠度あの片瀬川の邊でいもあつたのよ。昔はこゝらは太きな沼でね、その時分鶴の鳥つて鶴に似た大きな鳥が澤山おりてね、それで鶴沼といふんですとさ、現に池袋なんてとこがありませんと。あら、松岡さんに聞いたのよ、事實さう言はれると大磯よりか此方の方が本場らしいわ。こんなに茫々した——ねエ何百年か以前はきつとそんな沼だつたんでせうね。心なき身にもあはれは知られけり、鳴立つ澤の秋の夕暮」

「あ、鳴立つ庵へは私も行つたわ、ほら廣岡の兄様と妙子さんも一緒に、あの時實物を拜見させて下さいつたら、種んな物を見せたわね。ほほ、廣岡の兄様つてはかしこまつて、ハアハアと感心してたと思つたら、鳥渡對手の人が座を外した間にあの節なしの杖とかで、はりませの天井をつつ、くんだもの。随分悪いわねエ。おほ、」

「妙さん君達ア何してゐるんだ。もを可いから入り給へ折角お茶を入れたつて、一人ちやつまらない」

「え、さあ妙子さん」と今度は柔順に障子を閉めて室内へ入りながら

「松岡さんてば私も松岡さんに聞いたんだけど、鶴沼には以前は桃林が澤山あつたんですつてね、鶴沼の桃林で名高かつたんですつて。さうでせう、松の縁でどんなに美しくかつたでせう。松岡さんはそんな事よく知つてゐるのよ。あれで何でも話すのよ。その代りもうもう御機嫌取つて居なくちやね、私そんな時いつでもはらはらしてゐるわ。——兎に角餘程變つた方よ、ねエ兄様——」

「さあ、人が斯う言やあ、あ、言や斯う云ふつむじ曲りなのさ。僕あかまはず遣り込めるもんだから、もう僕の顔見ると喧嘩腰だ。ありや姿が女で心か——否風だつてまるで男のやうだし、些も優美とか溫和とか云ふ女らしい點はないんだね、はは、僕、松岡さんに變性男子だつて云つたら、それでも怒つたよ。一體あれで何

歳だらう』

『十九——高村さんに訊いたら十九だつて云つたわ、嘘だわねエ』

『松岡さんが十九だと、ぢや千賀さんと一ツ違ひか、お、妙さんは二十だつたね、あれで妙さんより下と見えるかい、それや無論嘘だ。僕何うしたつて二十三——三四だと思ふね、高村あ何でも松岡さんの云ふ事なら有がたがつてるんだ、實に齒がゆいせ。僕なら一ツびしやんと横面をまゐつて遣るんだが——』

『あら、だつて其様事云つたつてひどいわ。なか／＼美人よ、ね凜とした。高村さんだつて無理はないのよあんな溫和しい方だから可愛想よ、あれで松岡さんさへ人並なら本當にいゝ一對なんだけれど：：肝腎な松岡さんがあの變屈ぢやね。ねエ妙子さん』

『ふうん、お察のいゝ事だ。——それやいゝがあゝ正君はまだ歸らんのかなあ、千賀さんその高村でも引張て來給へ』

「先刻からお留守よ、また散歩なんでせう。此頃は海岸へばかし行つてるわ」

「こんな日にもか、御苦勞な話だ」

「なに少し感染れたのよ松岡さんに。——松岡さんたら星もない眞黒な晩に海へノコノコ出掛つてつね、遅うく十時過ぎに歸つて来るの、氣味が悪いわ。それで居て過日……ほら夜網で鯛の澤山漁れた時ね——ここからも漁火が綺麗に見えた——一緒に行つて見ませうつて云へば、漁師なんか居ちやなまぐさくつて仕様がないつてまつたく憎らしかつたわ」

「それから痲癩聲で女中等を叱り付ける時なんか、門外漢の僕でさへびりりとするね、けれど切放れは宜いさうだ。女中等賞めてるよ、妙さんや千賀さんのやうにけちんぼうちやないつて——」

「まあ——ね、お千賀さん、兄様と松岡さんに議論をさしたら随分面白いわね、おほほほほ」

「うむ、それさ、僕が二三日前彼室の前を通るとね、平生になく篠谷さん篠谷さんつて呼ぶんぢやないか。つひ「何です」と云つたら、今お湯に入らつしやるんでせうそんなら私の忘れて来た、白粉と洗粉を持つて来て頂戴だと。僕あ、僕あ高村ぢやないと喚鳴て違つた。」

「あらまあ、おほほ、つ、つ、つ、そしたら」

「そしたら斯うさ。あらぢや篠谷さんは眞正の女子でなければ、何にも仕て下さらないのねどうせ私は、千賀子さんや妙子さんとは違ひます。變性男子でせうからねけれど貴下が入湯て彼居しやる時取りに行つたらまた大變でせう。だからさう言つて上げたんだつて澄ましてる。のぞいて見たら振り向きもせんで、机に對つて居るぢやないか。餘り腹が立つから無言で飛び降りて來ちやつた。あれでもう擦れ切つてるんだね、全體何者なんだか當もつかん。教育も充分ある様子だし大にき何だよ天懸の結果身をはかなみ、世をすね果てたとても云ふ曰く附かも知れん。同情して

「違り給へ」

「まあ嫌だ。でも、白粉つけてるのね。——女中達もさう云つてるわ、初めから高村さんとは仲が好かつたんだつて。もつとも高村さんは兄様の様ぢやないわ、深切だから……」

「はは、高村の深切は松岡女史にだけなんさ。正君が千賀さんにおけると同じく——あ、何打つんだ、いやもう言はない！言はない！」

「ねエ妙子さん、深切もよく出来たわね。江戸島へ行つた時なんかあの窟の處で、少し待つて、頂戴つて云ふのに兄様も廣岡の兄様も、私達を置いてきぼりに、すんずん行つてお了ひ成さるんだもの、あれが」

「當前さ。深切と女のお供とは少し違ふからね——君達あ高村のやうな輕薄才子が理想なのか」

スバ／＼吹かせ乍ら直男に思切つた事を云ふ、千賀子も負けずに跳ねかへして

「あらく／＼輕薄才子と有仰つてね。まア可愛想なのは高村さんよ——あんなに溫和くつて、人に頼まれ／＼は厭といふ事も言へない程の方なのに……其をまた松岡さんが悪いわ、何處かへ一緒に行く時にはもう持物なんか、みんな高村さんに持たせて澄ましてるんだもの。高村さんあの上輕薄才子だの、女のお供だのつて云はれちや浮ぶ瀬がないわ、可愛想よ！ どうせおえらい方からはさう見えるでせうけれど……否、ハイハイ、私の事を振袖式部なんては決して有仰らない兄様には！」

「だつてお千賀さん、餘り溫和しい方ではないわ。先達て……ね兄様、私達が來ました翌日ね、お茶一ツ差上げたからつて高村さんと松岡さんをお呼び申しましたのよ。そしたら「お茶は嫌ひですから」つて素氣ない御返事なの。ちや何うぞお菓子だけでも召し上りに、つて申しましたら、でもいらしてよ。——兄様は葦山へいらしたお留守でしたね、で斯うなの、私が釜をかけて支度してますのをね、私濃茶つていつか友達の家でお振舞にあづかつた事があるけれど、汚ない苦い變なもので



手をのばして引上げるやうな身振をする。立止つた高村は一足踏みかけたが、

「お邪魔ぢやないですか？」

「エ、／＼さあ何卒……」

いち早く身を引いて、

「さあ何卒、否、お先へ——今日は何方、また海岸——」

と云ひ乍ら後に跟いて入つてはつたり障子を閉てる。

「君……」

起き直つて膝を直し、

「や、大變顔の色が悪いわね、何うかしたですか」

「否」淋しく笑ひながらも俯いて、度の強い近眼鏡の曇をぬぐふ。

雪のやうな白襯衣の上に紡績の綿入を重ねて紺飛白利の綿入羽織。丸顔の二分苳頭、目元の可愛い濃順しさうな美男である。

「お敷遊ばせ——」

美しい襟足を惜しげもなく見せて、妙子はしとやかに座蒲團をすゝめる。と、

「お嬢様——お湯にお入湯なさいまし」

不器用な聲が階子の中段から起こつた。

「ははゝゝゝゝ」返辭もせず千賀子は急に首をちりめて笑ひ出した。直男は流石に鳥渡腕んで、

「おい、何を笑ふんだ。馬鹿な奴だな——何が其様に可笑いんだ。可いから早く入湯してお出？ お、君は!!」

と高村を見る。

「僕二三日風邪の氣味です。どうぞ御遠慮なく……」

「左様？——ちやお先へ、ね、お千賀さん」

美しい眼で見かへつて石鹼や白粉など取り出すと、千賀子は前髪をかき上げかき

上げく、

「ぢやね、お先へ……」

「高村さん、御免遊ばせ」

ワ、ーの香を残して退り出る。

あとには大分話がはずみ、ふと有合ふ新聞の記事から、○○問題について直男は口角盛んに泡を飛ばした、

「兄様……あら廣岡の兄様はまだお歸りなくつて」

「あ、お先へ——どうも失禮致しました」

静かに上つて来たのは先刻の二人、血色の好い地に薄すり刷いて、湯氣を沿びた黒髪落したらんばかり、烏渡入口に膝を突く。と二人とも束髪ががつくりしたので云合せたやうに手を加へたが、

## 「あのね高村さん」

と千賀子は例の無造作に直ぐ坐り込んで仕舞ふ。妙子は甲斐／＼しく濡手拭を手欄に掛けたり、お茶を入れかへると次の間に立つた。お揃の黄八丈の書生羽織長い袂がゆらりと、藤紫の裾を紅潮した爪先にさばいて、ホロ／＼と時色メリンスの蹴出落るゝ艶めかしさ。やがてバツタリ鐵瓶の蟬時雨の音が絶えて、香ぐはしい香が鼻をうつ。紅茶を入れたものらしい。

「ね、兄様、ほらあの事ね……高村さん、私達はお天氣宜しかつたら、明後日歸りますよ。アラ其様に吃驚なさらなくつたつて。それで送別會に……ほほ、私の方から云出ちや可笑いけれどカルタ會をして頂き度いの、一ツ盛んにね東屋の河合さんなんかも呼んで——まあよくつてよ、其様に謙遜なすつたつてお手並は承知してるわ。エ、え、もう私達だつて折角お馴染に成りましたものを、だつてまたお目に掛りますわ。それにまだ松岡さんは被居しやるんでせう。あ、松岡さんては明晩

までにお歸りなさるといゝわねエ。松岡さんは眞實の一騎當千よ、その激しいつたら——宅の兄様なんか和泉會の何とかだつて威張つたつて、松岡さんには吹き飛ばされて了ふの。ほほ、黙つて居て時々雷様の落もたやうな……河合さんが卑怯な事するつて、パツと手を拂ひ飛ばすんだもの、河合さんあんな方だから膽をつぶしてちつと松岡さんの顔見て被居しやるの。本當に双方へあんな氣の毒の思した事つて無かつたわ。何日頃お歸り……なのかしら。ね高村さん」

白襟引合した胸を兩手に抱いて、千賀子は人懐こくちつと見詰める。

「松岡さん鎌倉へ行つたんださうです。二三日泊つて來るつて……」

高村はもう松岡と云ふ一語に胸を掻き亂されて、視線をあらぬ方へ伏せ乍ら顔もあげ得ず答えるのを直ぐ頭から、

「松岡さんの事だ。何言つたつてあてに成るもんか。第一カルタなんて餘程蟲の居所のいゝ時でなげや、來やしないせ。若しうまく承知したら僕は過日の恥をそゝい

下邊るんだ、何、少し氣を入りや松岡さん位何だ。だが松岡さんはいつも外へ出ると、非常な御逆鱗で歸つて來るんだ。放心すると飛んだ傍杖を食ふよ。實に驚いたね僕過日……」

「あら兄様、鳥渡！」

紅茶の皿をくばつて居た妙子は、目を睜つて手をあげる。「同吃驚して顔見合せた。が、

「はは、は、は、何の事だ、丁度松岡さんの御歸館ぢやないか」  
直男が眞先に笑ひ出した。高村は清しい顔に懐しさうな色を浮べて、無言で耳を傾ひけた。

果して階下では今し「お歸りッ」と勇ましく叫ぶ車夫の聲諸共、ひらり式臺に飛び下りた囁の主の春美嬢、友仙羽二重の丸帯の間からもどかしさうに絛鹽瀬の紙入を取出し、二十錢銀貨一ツ汗臭い車夫の手へ投げて折から「お歸りで御座いますか」

と町囃に出迎へる女中につと點頭たきり、紋織お召の二枚揃ひをスリッパに自暴にさばいて、葡萄酒紋羽二重の羽織の袖長う、瘦ぎすの背は思きり高く成る程更けては見えるが、まだ二十前後であらう。娘盛りのふさ／＼とした髪にさしたリボン  
 は三時巾のお納戸色である。男のやうに肩で風切つてドン／＼上つた階子段、廊下  
 について右へ曲り我が室の障子をぐわらり開けるや、あとも閉めず突立つたまゝま  
 づ其凛々しい黒眼勝の眼を机の上へ落した。其處にはかねて期したる一通の書状、  
 宛名は對江館内松岡蘭香女史、裏を返せば東京市〇〇新聞社。あはれ〇〇新聞連載  
 中の評判な蘭香女史が長篇小説、引續いての本日休載、本日休載には、そのハガキ  
 築欄に讀者の批難、喧すしさを。知るや知らずや三階の一群！！

## 中

松岡春美子とのみでは區々たる一婦人に過ぎぬが、蘭香女史と云へば、その新作

「逝く春」と共に、噴々たる文名を俊しき双肩に荷ひあまるの人。

去年の暮からこゝ、對江館の八疊間に、しばしの宿りを重ねたは第二の逝く春——否、より以上の名品たる或る作に筆を執るべく、幽邃の地に心身を養はんが爲めであつた。

筆でこそ縦横に甘き戀も書き、苦き戀もうつせ、自分自身はかつて戀愛など、云ふ例の無かつた女史も、あはれや此頃人を思ひ初めて夜となく晝となく、悶え悶えて居るのである。今宵歌留多の席にと招かれた袖も振り拂ひ、浪音高き一室に獨り物思ふのもまたその事であつた。

桃色の蓋かけた臺ランプは、讀みさしの洋書の白い頁や積み重ねた雜誌、硯箱、インキ瓶など乳色に照し出して、熟と坐つて俯いた女史の横顔が、浮き出たやうにぼうつと白い、透き通る程薄皮の、顔は丸立の方だが肉附の薄い——併し櫻色に匂ふた頬美しく、濃髪を英國風の束髪にしたのが襟元にまで崩れ落ちて、洗髪たと見

えて後れ毛が、バラ／＼と被布の肩や襟の邊に漉と下つて居る。

噫、戀とはこんなに苦しいものなのかしら。人間と云ふものは、みんな戀をするものなのかしら、戀をする人、した人は、みんなこんなに悶えるのだらうか、ああ戀して成るべき戀ならば戀するも宜からうが、成らぬと知りつゝ……思切れぬ、忘れられぬ。それもまあ顔さへ合せばいつも口論の花を咲かせ、あの妹達に

『まあ兄様と松岡さんとは、前世に犬と猿で、やもあつたんでせうよ』

など、嘲けられて居る程の直男さんを……

反抗され、ば飽くまで強く、下手に出られ、ば別人の様に柔らかい。これは平常の癖である。で斯うして一間でも二間でも離れて居れば、矢も楯も堪らず戀しいがさて逢て見ると先方が例の調子故むつと疳に觸り、本當は優しく静かに話をしたい感情に背いて、つい賣言葉に買言葉、その度毎變性女子の、無髭男子のとの、しられ言返す。憎まれるのが當然である。憎まれるのも承知だが戀して居るからとて遠

慮や追従出来るやうな自分ぢやない。この變屈は今更始まつた事ではないが只高村さんに對してだけは、一つはその反動でもあらうし、我乍ら日の照りが違ふかと思はれるまで打とけて優しくする。何う云ふ譯か如何な時でも高村さんには、不機嫌な顔や厭な様子は見せられない。その位だもの實を云へば高村さんは心から可愛い人である。けれどそれは戀ではない。その高村さんが：あゝ高村さんの心もよく知れて居る。さぞ辛からう私の様な女に戀するとは。病後の養生に來た土地先で：：あゝつまり不幸なのだ。が、私も悪かつた餘り高村さんとは近附き過ぎて了つた。成るべく人氣の少い處を、と對江館を選んだのであるが二月越も獨りぼつちの二階住居は流石に淋しかった。で人懐かしい折でもあつたし高村さんの着いた時は實に嬉しくて、翌朝洗面場で行き合つて『お早う』と笑を含んで云ひ掛けたのも私からであつた。遊びに來よと云ふても遠慮深くして他の室へは來ぬが、此方から出掛て行けば喜んで迎へる。直男さんにだとあんな私か、高村さんとはよく連立つて出



思いは思をみて

掛けた事などもあつた。高村さんの軀になつたら無理も無かつたらう。噫、打明けて了はふ、とは幾度か思つた。この苦しい意中を打明けて、私も自分の戀を思切つから貴下も私の事は断念で、これから兄妹としての清い永い交はりを續けやうと。それもあの穩な懐しさうな笑顔を見せられると、何うしても云出す氣になれず、かへつて優しい言葉でも餘計にかけて遣るやうになる。

いつそ歸京して仕舞はふかしら：：此上親しくしたらますます兩人の爲にならぬ。が、さうしたら跡に残つた高村さんは：：聞けば六歳の時から孤兒で義理ある伯母さんに引取られ、そのお蔭で今高等師範に勉強中だとやら、其様な前途多望な青年がよもや一女子の爲めに：：だが情的な高村さんの事である。温順い氣の弱い人だけに、思ひ詰め方も一通りでなければ、眞に可愛想：：：。

あゝ苦しい、何うしたら宜からう、何うすればいゝんだらう、實に戀知らぬ身は幸福——私は今までは幸福であつたのだ。何つまでも斯うして悶え悶えて苦しんで

末にはこの身……この胸……えエ何うなつて了ふのであらう。あゝこの苦悶を高村さんにはさせ度くない……それは私の心一ツだ……が、決して戀人でもないものを……あゝ噫……

織手に握る五寸の細筆、よし雨を起し風を呼ぶ程ならずとも、よく數萬の讀者を自由に掌中に翻弄して明治の清少、第二の一葉と歌はるゝ身ながら、女史幼立から無情な親類共に揉み抜かれたので、生來の強情勝氣は物心つくに従ひ、我慢執着となつて我から世をすね、只た一人の母親とさへ一緒に住むを嫌ひ、やゝ半狂人の振舞、併し一度興來れば、矢張り女性の特長たる繊細な觀察に、その華麗な彩筆を揮つて言々語々、玉を成し花を織る。殊にいつでもかたく本名を秘して居るのが一層世の耳目をひいて、現に三階の篠谷兄妹も蘭香女史崇拜者なのである。あゝ連命の神は何處まで彼等を弄あそび給ふのであらう……

女史は先刻から兩手に眞白い額を抑へて空を凝視して居る。苦悶はその寄つた眉根

にあらはれて、ホツと苦しい苦しい息をついた。とも知らぬ氣に、わつと起る三階の談笑。ほほ、と優しい妙子や、妹によく似た正の聲、張のある篠谷兄妹、河合のなど、手に取る如く目に見る如くである。

と、勃然と立上つた人の氣配、忽ち

『あら高村さん、お怒り成すつたの、何卒ね、兄は……兄はあんなだもんですから……』

『ま、お待遊ばせ、篠谷の兄様が悪う御座いました。高村さん……』  
妙子などはもうオッ／＼聲で取り締つたのを振り放したらしく、あらく／＼うぐわらり障子がおし開けられる。

『あゝまた高村さんが一同に非はれたのだ……』

ホロ／＼と涙を溢して見返つたが、その儘子供のように泣き入つた。シク／＼と細かく震はす小豆色の肩撫面を埋めた長い袂を翻る、紅の振袖。あゝ女史もまた一

個の可憐な處女であつた。

下

嗚呼、天の龍のあつかりしか、地の幸の薄かりしか。稀世の天才松岡女史は、一斗の鮮血を吐いて逝き、拔群の秀才高村敏郎は、その靈魂、劍光にのり、ありし世のそのの如く女史のあとを遡ふて飛んだ。

しかして篠谷法學士は、紅い手からの初九齡、可愛き人を携へて昨日新婚旅行の途に上つたとのことである。

## 嫁がぬ人

……けれど考へたら萩香だつて嫁君の候補者よ。あら笑つらやアいや。  
 ほゝゝゝ、此様周圍高でもね、生れてこゝに十七年、美しうはなくとも花乙女、  
 間が打捨つてはおかないんですもの。エ、自惚きてるつて!!　まア、聞いて頂戴  
 私ほね、男を釣つてるのあやなすのと云はれるけれどこれは社會の罪ですわ。皆さ  
 んが悪いのよ、それア私の臆面なし、何誰をだつてお友達に、別けても西さん泉田  
 さん(大學生)とは仲よしでよく遊びました。夕月清き春の花野のそゝろ歩きや、  
 星美しう輝く夜、共に窓によつて藤村詩集を朗吟したり、ふとした動機で手を握り合  
 つた事もあれば、雑誌の口繪を見やうとて頬すれふれた事もある。今から思へば疑  
 はれたのも無理はないのだが、それにしたつて私、裏の畑の葡萄棚のかげであっ  
 れもない、前歯で皮をむきく砂糖黍をかじつて居るところを見られて大笑されたり、

木のぼりをして母様に発見られあはて、飛び下りたはずみに引掛けて、片袖引ちぎつて了つたり、ほんとにお轉變な罪の無さだつたのに、もウ西さん達は盛んにお友達から冷かされて被居るんですもの。初めは萩香も驚いてよ。私風情を相手と云はれて甘んじてそれを受けてる方達も方達なら、皆さんが私をそれ程お氣に止めて居らるゝと云ふのも意外であつた。でこの時初めて處女の誇りといふものを目覺したんです。男だなんて威張たつて情の前には膝を折る。弱い女、まして鳩のやうな乙女、嘲けられても罵しられても手向ひは出来ぬ、直に膝を折つてひれ伏して足下に慕ひよる青年達の正直さ。紅や白粉を好んで用ゐ出したもその頃から。あゝ去年まで無造作な下げ髪に白りぼんびかせてふざけまはつて居た萩香は、一年後の今日此頃、長い袂を噛み乍ら物思ふてよる縁の柱に島田のあとが油じんだ。

嗚呼昔から父親のない娘は嫁に貰はないつて、まつたくでせう。私だつて父様が御存命ならこんな女になりはしなかつた。が、果していづれが幸か、不幸か……あ

あ、今日は、もう何もかもお話ししてよ。あら懺悔だなんてまさかまだ懺悔する程の悪い事は致しませんよ。

昨は早稲田のポエトにラブし、今は赤門の秀才に秋波を送る……それは罪惡と名づくべきでせうか。

「……貴女はあまりセンチメンタル過ぎますよ。見る人を美しと認め、見る人を戀ふ。乙女の熱い血が滲いて、憧憬、活動、濃い花やかな青春の標象代表、とは云へまだ卑俗な現世を知らない若い萩香さんが、令嬢的想像で社會の人に對するのは實に危いものです。くれぐれ自重して下さいよ。それや母様が信じて許してお置かになるんですから、安心して居ていゝんですけれど、ロマンチックな御性情なだけ、一時の情に馳せやすい可愛い方なだけ、私は心配で成りません……」

とは藤子様の手紙の度くり返される言葉です。いゝわ、私、何とでも云はれやう。散る花はまた枝に咲かうし逝く春はまためぐり來れど、私の妙齡はいつまでつゝ

く？　否、何度ある？　色あり香あり蜜あつて、心身ともに自由な今、あだに過してどうならう！

友よと呼ばれて兄と慕ふが何の罪、それアね、手箱に秘めた四十何本のある玉章そこらの道學者先生に一吋一通でも、眼にぶら下げたなら、卓をなぐつて「亡國のも」とさげふでせう。だけど、ねえ先生、

「和肌のあつき血潮にふれもせて、さみしからずや道を説く君」つて歌御存じ。何、そのレター、ほゝゝみんな兄様のよ、あら何故？　兄様のですもの、お友達ですもの。幾人あつたつて不思議はないぢやありませんか。えゝそれや他人から見たらね、とても友情からばかしとは受け取れぬ文字もありませう、若い血をうづに沸かして、その甘い泉に酔ふ相思の間かと驚ろかれるやうなものもありませう。が、新緑燃ゆる青葉の森を、床しと戀ふる熱烈な若人達のことですもの、私はもウ馴れつこでこれが普通だと思つてます。時にはこれ以上いやみな文句の加はらない事もな

いが、それが無い時は矢張物足なく、事實これが樂しみなのね。淺ましいやうだけれどもつたくです。従つて御返事出すにも所謂甘つたるいと云ふんでせう。花やかな——随分懂がるゝ様な文句も書きますわ。

併しどうぞ御安心下さい。萩香は少女の生命をまで失なふやうな事は致しません。他目には危険と見えるか知らないが父様なしの身は家事向きから交際上のことまで萬事は様と二人で取りさばいて行かねばならぬのだし、それやこれや種々の境遇に接する機会が多いから、尋常の嬢様方にくらべては酸いも甘いもかみわけて居る。箱入娘や、あまりきびしい家庭に育つたもの程、誘はれやすく、まどはされやすいと云ふのは、何のわけでせう。些と足もとに氣をお附けになつた方がよくつてよ。ですがね、墮落したり、誘惑されたりする人達も、決して無理はないんですわ。異性から優しい言葉をかけられて、誰しも悪い心持のしやう筈はありませんからね、ほゝゝ、お恥かしいけれど満員の電車のなかで席を譲られたつて、それが若い學

人だと胸の血汐は沸き立ちます。

野菊さまぢやないがそんなクリストの、

「——を見て情を起すものは、すでに姦淫したるなり」

主義でやつたら、まア今の世にけがれのない人間でないことよ。なればこそ「べからず」訓なども發布さるゝのではありませんか。観音様や木ほりの天女ぢやあるまいし、普通の常識をなへたものなら、ね、決して浮いた心ではなくつても、恨み多き我が處女の身は概して情にもろいもの、一寸眼と眼の視線が落ち合つたばかりでも何となく忘れかねるなんて……。

もとく人ほ感情の動物、いはんや青春の時代に於いておや、でせう。血の沸く時にや沸かせるがいろ。人を戀して悶えるならいくらでも悶えるがいろ。夢は束の間、戀ははかなし。が、けはしき人生の行路に咲き出づるたゞ一本の、あはれ詩人は歌ふでないか、我が世の花を戀と呼ぶ……と。

私は戀の歴史を持たない者は、灰よりもあはれな人間だと思ひます。つて自分で  
もまた纏まつた戀をした事はありません。いゝえ、この心身を捧げてまで戀したい  
と思ふ程の人を見出せないんです。エ、大原さん？　まア誰がそんな事を云つて？  
しようがないのね、ハイハイ白状しよ、それアね、まつたくあの君ならば戀人に  
持つて不足はないと、ひそかに思つた事もありました、けどたいさう思つたばかり  
よ、だつて……だつて……思つて居たつて仕方がないんですもの。また此頃おわる  
いんですつてね、ほんとにおいたはしいわ。若うして、不治の病に泣く薄倅詩人、  
病苦の故ならずとも胸のなやみはしげからう。夜毎くの御夢に立つは紅梅嬢（澄  
さんの）倂か、妬しい氣もするけれど、つくづく同情に堪へぬ。私のことも折には  
思出して下さるでせう。あんな御病氣の出るせいか、ほんとに溫和しいお坊ちやん  
育ちのなつかしい方でした。あゝ逝く春の落花の夕、二人は詩中の人であつたが：  
：あのお近眼鏡を俯けては、美しい齒を見せてお笑ひなさる初心な御様子がありあ

りと目に浮ぶ。あゝまた御見舞状書かう。思へば澄さんはお羨ましいのねえ……あら何變な笑方して？ えゝ女に片戀はないもんだつて。串談ぢやなくつてよ。——可愛想にあの久子さんね、儘ならぬ浮世のため意中の人との縁談がやぶれてからもウ半分自棄氣味で、あちこちからの申込みも一切嫌だでたて通してます。薄尾花や女郎花に露美しくも、月に風情の妬くとも……一生オールドミスで居るつもりつて泣て云ひました。桂子様も生涯獨身で藝術の研究に、身を捧げると云つてゐらつしやるけれど、そこには矢張うつせみの雪子に似た悲しいわけが紛糾錯雑つて居るんです、人生一度は必ず戀のあるべきもの、處女に聞いて御覽なさい。みんな思かけぬ秘密を抱いて居るものよ。人間……まして乙女の身で理想や空想のないものは、むしろコンマ以下に近いんですわ。

ほほゝゝ、萩香みたいな女に増えられたら日本も滅亡だらうつて、まつたくね。ところかこゝに好いコントラストで御紹介したい人がある。元代様……知つてらつ

しやる？　ほら背のひくい横肥りの方、私と一緒に歩くこね、淺草公園がはだしで逃げ出すつて。ほほ、だつてまるで十二階とバナラマをならべたやうだからですと。随分ねえ。

もう廿三と云へば、青春漸く老いて……ときけぶに遠からざる——、いゝえ處女さびてるなんて柄ぢやないのよ、同じお獨身でも秋浦女史なんか……あの方だつて二十五六でせう、けれど何處かに寄り附きたいやうな沈むだ重々しい美しい——色にたとへたら紫ね。逝く春の花散る風も紫よ、若き子がなやみの夢の色か……が、元様は桃色とでも云はなければならぬ時代後れと云ふのかまア頭が幼稚なんでせう。熱血をどる楽しい花やかな青春時代をもそれと意識せず、更け行く年を惜しみもせず、いつも——裁縫にこれ日も足らずといふ有様、私はこれで元代様にも趣味や理想と云ふものがあるかしらとつく／＼ながめられる。

その世間の事情にうとい事つたらね、本郷座で不如歸をやつてねえ随分泣かせる

さうですよ。と云へば、あら左様ですか、私まだほととぎすの聲聞いた事がありま  
せんが何と鳴くんでせう。申談にだと思つて、え、テツペンカケタカ、オト、コヒ  
シヤ、つてよ、と云つたらそれをほんとにしてお了ひなさる、あきれて物が言へな  
かつた。赤門の花、とは青原の美妓のことだつて。でも大門を知つてらつしやるの  
が不思議だ。

もつとも新聞に一ツ目を通さないんだもの、暇がないから暇がないからと有仰  
けれど、なんの新聞雑誌を讀むぐらゐの暇、他から見ても有り餘つて居る。小猫や  
他家の赤ン坊あやす暇はあつても讀む間はない。萬事この不如歸式でやるのだから  
恐れ入るわ。御兩親揃つて何不足りない家に中學五年生の弟と四人の妹に姉と呼ばれ  
る身があまり情ないではないか、それも私みたいに口ばかり達者な藝なし猿ぢやな  
い。小學全科を優等で御卒業後、裁縫はもとよりお琴やお花、お料理までお稽古な  
すつたので何處へ出してもひきは取らぬ筈なのが、この通りいまだに思はしい御縁

もなしでゐらつしやる。

これでいよ／＼新夫人となつたら何うでせう、御飯焚きや洗濯なんぞばかりいくら上手でも、自分が上に立つて下女使つて一家を切つてまはすと云ふことが出来なかつちや當世仕方がないわ。やつぱりお姑さんのあるとこへ行つて、その指圖を受け乍ら小さくなつて暮さねばならぬのね、あゝ私は元代様のやうにはかりは——ばち／＼ツ、アツオ、熱ツ、マア吃驚した、火鉢の栗が跳ねたのだわ。一ツ上げませうか、熱、熱、美味さうに焼けてよ。興がさめる……ほほ、ちや一寸私の三疊をのぞいて頂戴。机のまはりには墨だらけ手垢だらけの古雑誌を幾十冊となく積み上げ、鉛筆の削りごみとはちけ豆の皮がさんらんし、硯箱は先日ついふみかいて了つて、今ちやバナ、ケーキの空折が御用をつとめて居るし、ペンもナイフもヘラも、簪もごつちやに同居し、インキ壺と白粉の瓶がおし並び、ゑのぐ皿にはお薩のなきがら、我ながら随分殺風景ねえ。あれ、机の抽斗しを開けちやいけない。オ

ホ、……。

私ね、此頃大變肥つたつて。さう見えて？ 餘りお芋やお汁粉を食べるからなのよ。

昨日も髮結のおまきつてば「ほんとに萩様のお肥り遊ばしたこと、いまに頬べたなんか落ちさうで御座いますよ、此節はお目に掛る度肉がお附き遊ばすやうで……」なんて笑ふんですもの、口の傍をひねり上げてやりたかつた。此間まで、やれ萩様は蚊とんぼの干物のやうですの、守口大根の化物だのと弄かつたくせに。

あゝ岡さんから手紙が來たわ。鳥渡失禮します、先日の返事ですから……。まあ驚いた。驚いて了つた。ひどい方、ほんとに岡さん！

「萩香さんは——おこつちやいけない——まアやきもちやさんの方だ。その方の優等生に成りはしないかと案ずる。萩香さんの「貴郎」となる人は、餘程注意しないとヒドイ攻撃に合ふかもしれないぬ、夜少し位お歸りが晩れたり、旅行でもして所用がのびて歸宅つたりしやうものなら、インキの跡も紅だと主張さるゝ側ぢやなからうか

コレはチト皮肉つて失敬——」

馬鹿にしてる。チツトどころか大いに失敬な。おぼえてゐらつしやい、やきもちやきだなんて！

「僕は直言します、心にもない好言はならべませぬ。お氣に召すやうなチツクで、テカ／＼したり、憧るゝやうな文句をならべたりする事が出来ません。それはバカだからです、朴直でせうかな。ツマリ融通がきかない質なんでせう、當世に比例しませぬ。

あんな事を思はれたり、筆にされたりするのは女の事です、あなたは男にお成り申すのぢやないけれど、今少しあツさりと淡泊にやりませう……」

これではなんぼ私でも顔を赧くせずには居られないいくら直言だつてあんまりだわ。どうせ萩香は女だことよ、女が女らしいぐちを云つてもいけないのなら、何故會心の友だなんて有仰るんです。得がたい會心の友、手紙も度々差上げたい、の、

世に會心の友の音信を聞くより嬉しきはなかるべし、など、おだて上げたり、あた  
 たい花のやうな人をチャームする様な言葉に私には作られません。なんて弱い音  
 を吹いたかと思ふと今度は、チツクでテカ／＼的と罵倒された。

ほ／＼、勝手なもんねえ、口惜しいけれど可笑しくつてつい苦笑もしたくなる。  
 だけどほんとに岡さんももう直ぐにも家庭をお作りなさらねばならぬ御年頃いつま  
 で下らぬ私なんかと手紙の贈答なぞしてゐらつしやるんでせう。餘計な事だが氣に  
 なつてしやうがない……。あまり私がい／＼な事を云ふので、僕の手紙に青春の  
 ぬくみがないの、砂漠の砂より甚しいのつて何のこつた、とおこつて了はれた事も  
 ある。僕は年のせいとか萩香さんの若々しいのが羨しい、と眞面目で老人くさい事云  
 つてよこされる時もある。よく岡さんには叱られるのよ。それがまた面白くつて！  
 殿方つてわりに正直な溫和いものね、女の方がよつほど罪が深いわ、とても極楽ま  
 で御一緒と云ふわけには参りません。可笑しかつたのは櫻田さんよ。男子のくせに

おしやべりで貧乏のくせにおしやれでね、畑遠ひの文學論なぞふりまはし、女の御機嫌ばかり取らうとしてとうとう學校フォールした。私もあの國文學のお講義みたいなもの有がたく拜聴させられて弱つたの。櫻田さんは何と思つたか當時十四の自分を大人扱ひにして、戀歌の品さだめなんかやり出すんですもの。何だかわけがわかうず變な顔してまじく〜と見語めて居たら、

「君、そんな下らない事云つて聞かせるのは止し給へ」

と太田さんに叱られて随分すてきだつた。でも其後首尾よく理學士に成りましたと見え、バナマの帽子に白靴、白ネクタイかなんかできつとしてゐなかつたのを、この夏上京の時電車のなかでちらと見掛た。

あの時分仲よしで大好だつた法科の佐藤さん、私は大きななりしてよくあの肩におおさつては、リボンを買つてくれとねだつたつけ。疑もなく嫉妬もなく無心で温し書したあの頭が羨しい。

え、萩香の理想……理想の良人……大變ね、あてゝ頂戴な。え、外交官！ 皆さんがさう有仰るけれど私不思議に思つてゐるよ。外交官は何處がそんなにいゝんでせう、軍人ですか、結構、一時は「武勇さん」で夢中になつたもんですわけれど私、軍人にや向きませぬね。

叔父様や叔母様は私の顔さへ見るとニコ／＼笑つちや、やれ萩ちやんももウ直き丸鬚だの、十九は厄年だから來年の中に何うかしたいのつて、私腹が立つて堪んないの、まつたく本氣で心配してくれるらしいのよ。

だけどあの人達の考はまるで違つてゐるんですもの、あのね、うちの親類はみんな商人ばかりなのよ。商人腹に生れて子供の時から腹一杯に慾をためて算盤はちいて頭を下げるの外、文學趣味など爪の垢ほども解してくれる人はありません。美術家を父様に持つた私だけが只た一人變り者なんです。だから私叔父様達のお眼鏡になつた、前掛がけのを良人に持て「おかみさん」と云はれるくらゐなら、生甲斐

もないと思ふわ。

併し……黒光女史や一葉様のこと考へると面白さうで商賣も嫌ぢやないんだけれど……あら、お隣の兄様がマーキユリーだからだつて。嘘よ、それはあんまりだわ。とにかく學士なら何でもよ御座んすわ。貧乏だつていゝのよ。岡さんてばしきりにヴァニチーの塊かたまりつてこっぴどく攻撃なさるけれど、私ながら金紋付のお手車や馬車やリングのダイヤモンドといふものに憧れては居りません。交際場裡に雄飛せん夫婦の婦人會の大立者とならうのつて野心があるんでもありません。甘んじて家庭にうづもれるつもり、良人が學問と愛情のある人でさへあれば、屹度幸福なホームを造つて見せます。物質上の榮華なぞ夢にも望みませんわ。まさかいつまで星やすみれをなつかしんでも居りませんしね。

『ミツスで暮せる身ではなし、未は良妻賢母主義……よ』

だが私お嫁に行ける身分ぢやないの。それを思ふとつまらないわ。今些と財産で



## 夢より醒めた女

光榮ある人生の春、一生一度の青春期、再び遭ひがたき人生の春、一刻千金の人生の春、あゝ私もう何んだか涙かこぼれて了りましたのよ。

昨夜も母に、

「ねえお母様、昔の人には一刻千金の人生の春なんて時代はなかつたのでせうね。子供から一足飛びに大人になつちやつて、あの祖母様なんか肩揚して、丸髷にお結びになつたと云ふぢやありませんか。十五のマダム、今ならまだ小學校の生徒ですものねえ」

と申してましたら、どうした風の吹きまはしか、祖母様が大きな老眼鏡を外づしく、此方へお向きになつて——祖母様のお耳は五十町一里の伊勢道どころぢやないのですよ、百町一里ぐらいのレコードなのよ。

「私等の若い時分にはみんな當時の女學生のやうに、口ばかり達者の意氣地なしではなかつた……」

と例のお説法が始まりかゝたんでせう、

「あら、祖母様お膝のそばをくもがはつてますよ、そら、そら、あゝ、そつちへ行つた、あら、あら」

と體よく敬遠主義でにげて了ひましたが、笑ひごつちやないのよ。あゝいつまで若き少女子の、たのしき夢の我等ぞや、日にゝ老い行く人の身よ。若きを誇りし我世の春も逝くか、あゝつひに逝くかな。

ゆかばゆけ、去るものは追はじ、來るものを迎へん。とは云へ……あゝ。

あとで一時に年よつてもかまはないから、この十八と云ふ年にせめて二三年小休みが出たなら、うれしいだらうと思ふけれど、お友達はみんなお父様になつたりお母様になつたり、すんゝ追ひ越して行くのに私ばかりが萬年娘でもつまらない。

どうぞ人も我もいついつまでも青春の人で、天の甘酒に酔うて居たい……。

かへりみれば思ひ出多き、始めて結げた高髻の、頭にゆらぐ十六の正月、ある家の歌留多會に招かれた。

春や今宵、華燈の灯影にはキュービットひそみ、愛の神妬みの神も見て在すらむ。

柳さくらをこきませし、若い美しい二十人あまりの集まりでしたが、その時花の中なる名なし草、かへりみる人もなき田舎少女の身をいたく恥ぢて、と共に、このやうな場合、よしあし共にかゝはらず何でも人に、つよい印象をあたへてみたい！とひそかに願ひを抱きました。

その願ひ、神も納受ましませしか、以來、もう少女のクラウドには飽きました。けれど、けれど、いまこの花の世界を出でて、現實の國に入るのは厭です。口惜しいわ。あゝ青春は惜しむべし、はげしき心紙にそぐぐペンを傳はる紅の閃きや、理想は高く空の如、想像は自在雲のごと。

何物にも囚はるゝな、とさげびながら私は、私は、意志はともかく境遇は家庭に囚れて居ました。家のため母のため妹のため、三年鳴かず誓はずの有様、やうやうその絆もとけて、近い中に出京ときまれば、今まで思ひもよらなかつた縁談なんかい湧き上つて、また新なる煩悶をさせる。

私はもとから腎母良妻主義、結婚を厭ふわけではないけれど、せめて十代のうーだけは自由の心身で居たいと思ふに……。

こんなお多福の何處がよくてか、強ひてと有仰る方もあるのださうです、私縁談のかゝつてるうちほど、不愉快なものはありません。

先日も可笑しかつたの、お見合だつて突然東京の高倉の奥様が高いカラアの若紳士を引ばつて來ました。あまりの不意打ちに母も面喰つたらしかつたが、私大不平だつたのです、それで云はるゝまゝに、お火とお茶とを持って出たが、突き出すやうにおいたまゝ直ぐ退却して來て了つたので、母と奥様の氣のもみ様つたらないん

ですの。仕方なく今度はチンと真正面に坐つてやると、相手はしきりとかたくなつて無やみにお髭をひねりまはしながら、一生懸命になつて話かけます、私その人達が歸るや否や、ピーンとはね上つてやりましたのよ。〇〇〇出身の人なんか醫者と坊主にならべて嫌ひなんです、さうく、みをつくし様、のらくら學校つて〇〇〇のこと。ホ、痛快、痛快、私、〇〇〇へなんか行くやうな從兄があれば、はり飛ばしてやるわ。

併しねえ、かつては角帽くと王冠の如く心得て居た時代もあつたけれど、少し親しく接して見れば、大學生だつて人間ですもの、随分下らない人が多いんです。首尾よく學士になつたところで、高等官の試験にさへする分落こちる人がある、秀才の聞え高かりし文學士夫人となつた光枝様も、邊鄙な田舎中學へ行つて四十五圓の月給、お子様がもうお三人、ときいては一寸悲觀してしまふ。

士官學校は馬の養成所だの、陸軍將校が大きな長靴はいて長いマント着て、劍の

先がチラ／＼顔を出すあれが大嫌ひでよく笑つたものだが、そんな事ばかりも云つて居られなくなつて来た。

弄かひや冷かしは通せぬふりで受け流し、正面から切りこまれても眉根一つ動かさぬ私、みんなはさぞしやあつくな娘だと思つて居るだらう、親類の叔母様達は、ハイカラ様／＼で相手にしませんの。

人におのれを見すかされる様な氣がして、母にさへ異情をみせぬ女故、抱く苦悶も人一倍、それは、それは、絶るべく語るべく、なつかしの友、變へじかはらじ永劫の瞳みよと誓ひ交した綾様もある、竹田夫人もあるけれど……双肩に荷ひあまつた悲しいこと、辛いこと、打明けたなら手をとつて泣いて下さるであらうけれど、いまはそんな事して居るべき時期ではない何事も胸一つに秘めてをさめて、勇しく戦ひます、恐ろしい未來、たのしい未來、うき事のなほこの上につもれかし、限りある身の力ためさん……。

「いたづらに都の花とあこがれて、あまりに母を泣かせ給ふな」と云ふて下すつた方もありますけれど、私もうそんなやさしらしい子ではありませんの。私等は若いのです、奮闘して運命をひらかねばなりません。

去年の今頃の血汐の熱い少女であつた單純な胸を抱いて居つた、人の情のうれしくて、やさしい言葉も身にしみた。それがこの頃日毎々々に、我乍ら心の進歩(?)變化のはげしいのに驚かれます。

甘つたるい言いはれ、ば馬鹿らしくてたまらず、禮を厚うした〇〇様の手紙さへ男子のくせに不見識にも程があると引さいて丸めて了ひました、今までは手箱に秘めてあつた澤山の求交状も、みんな手ふき紙に使つて了ひました。

利益を打算してかゝつたら、戀なんて出来るものではありません、と云つたらまアあされた利己心のつよいがり／＼亡者だと云はれるかも知れないが、戀の前には理性はない、なんて約婚の女をふり捨て泣かせたり、また勉學盛りの女學生の身で

ありながらまあ大それた處女の資格を失ふて了ふなんかより勝でせう。

とは云へ、多感多涙の子、永久に胸にきざんで忘れられぬ御名はかの君ばかりではない、が、一大悲劇のヒロインとして、私はあまりにあきらめが好過ぎるのです君の高根の玉芙蓉、外交官御志望と書いてから、煩惱の犬は去りました。

こんな風で、かつては足並揃へて進んだ友とも、一時は姉様とまで呼んだ久子様とも、私の心は放れて了ひました。

先刻も綾様のお手紙読んで、泣かされて了つたのでございます、あゝ光彩陸離たる中に立ち給ふ、玲瓏玉の如く窈窕花の如き君よ、私は親の名もなく地位もなく財もなく身についた學問技藝もなくして……けれどけれど、綾様のやうな方を羨みもしません。努力して得たるものにはそれだけの價値がある、自分の運命は自分でひらく、とは思ふけれど、あまりに崇く美はしい綾様の人格に接する度、おやさしいおん文頂くたび何とも云はれぬ心になりますの。

おゝたのしい日でございます、去にし秋晴れの運動會……あゝ又の日の疾く来よかしと祈るばかりおなつかしいわ綾様、逢ふはうれし、別れはつらし、別れおもへば逢ふに厭……。

袖ふりはへて池畔の逍遙、うつりて燃ゆる夕紅葉、あのゴシックな文科のビルディング。逝く秋の大學構内！

お頭痛があるはずとて、白いおん面の紅なのを、私はどんなに驚いたでせう、水色のリボンかざして、前髪ゆらぐツイザ巻、鼻緒緋の重ね草履重たけに藤紫のお被布姿。

別れを惜しむ最後の握手、指環の食ひ入るばかり握り合つて……。あゝ待たるゝは來らむ彌生の記念祭……。

展覧會へもお供いたしましたのよ。みどり濃き常磐木の間がくれ、楓葉血の如く紅に、小波よする不烈池畔の夕雲や、光るやうな君と肩すりよせて語り合ひつ

つ……。

それはね、綾様はみんな人がふり返つて行きますの。御一緒に歩いてても氣持がよ  
うございますわ。

竹田夫人も美人よ、あの華美な紋縮緬のお被布召して、すらりとしたお姿がまだ  
ありノ、と眼の前にうかびますのよ。静らやま抱いて少しそり身に、身をゆすり乍  
らお縁をあちらこちなさる時や、そのまた静らやまの可愛らしさつたらないんです  
もの。真白い和らかなお顔に頬すりして、笑ひながらあの美しい眼をおあけなさる  
時や、それよりも、あのさつぱりした書生肌がほんとに氣に入つて了つた、奥様  
になつたつて澄ます様な人大嫌ひ、竹田夫人が理想のマダム振りよ。

あのね、竹田夫人達とA様の御下宿へお訪ねしました時、食後の座輿の林檎のむ  
きつこやりましたの。静らやまの父ちやまが一番お上手で、する／＼と巻いたもの  
をほごすが如く、こればかりはルビー輝く爪はし清い奥様のお指もとても及ばない

のでございますの。A様たらまあ、お可愛想なやうな手つき遊ばして、あまり厚くおむきになるものですから、むき上ると大きな林檎が半分ほどになつちやつて、大笑ひしましたのよ。赤い美しいその皮を、電燈のかさから長くくぶら下げました。果物の皮をうまくおむきになる方はいゝ奥様をおもちになるさうですが、竹田様はまつたくだと思つてほゝ笑まれました。

花の雲湧く春四月、來年の帝大ボートレースには青のリボンさして御一緒にまゐりませうねつてお約束しましたの。

コムバやらストームやら、一座は若々しい話しに酔ふて、美はしい八字髭のお口元から、

「醫者の頭に雀がとまる、とまる筈だよ藪ちやもの……」

「オール持つ手にヨー、月がさす……」

なんか始まるさわざ。

それにつけても殿方の羨しうて、ことに／＼學校生活！

その上京の折のことでした。降るやうな星月夜の晩、散歩にと一高の横通つて彌生町の方へ出やうとした時、私は思はず歩を止めた。何處からともなく寮歌の聲が、反響のやうに響いて来る、それは／＼向陵一流の、何物かに酔はされたやうな若い太い美しい咽喉、高調な感興にみたされて血のをどるやうなそのしらべ、高い譜、窓もる灯の輝きや、仰げば空にはまた／＼星、夜寒の風に袖を抱いて私は心行くまで立ちつくして居た。

その夜床にはいつてからも、ハラ／＼こぼれる落葉の音と／＼登る朝日に露消えて東亞の覇業ならん時」となつかしい戀聲は絶えず耳にひびいた。

有明の燈火寒う、私はついに袖口かみしめて泣きました、悲しい一夜でありました。男子であつたら？　と物狂はしいまで……。

「さて汚れし人の世よ、見よ幾むれの魔神こそ、駟馬に鞭ちいろあやの、錦の袖

をうち振りて、都大路をせせ狂へ、かゝるいふせきうつし世に、入るべき山はあら  
じてふ人に示さんほこりてん、夢安らけき武香陵」

その翌朝、憧がれ心たへかねて、庭口からつひく足の向いて了つたのは、また  
例の高等學校の横手、清き柏の白露に夢を洗ひ清むる窓や、上野の森はほのかにて  
紅燃ゆる雲の色、ふれなば焼かむ熱き血の、たぎる胸にも似たらすや……。

けれども私、男子の方は羨しいけれど、女權の擴張なんか云ひ出す事は大嫌ひ  
よ。何も選舉權などあたへられなくとも澤山、帝國大學へ入學は許されなくつても  
いゝ。どうせ婦人は男子と同じ道を進むべきものぢやないんですもの。その代り、  
牝雞の晨する女天下をのぞむわけぢやないが——家庭においては男子を敬服させる  
だけの見識と手腕がありたいものぢやありませんか。……そしてしづかに内を治め  
て、そこに新しい意味を見出せ……なんて申しますやうなものゝ、こんな奥様おも  
ちになつた方は、それこそ、氣ばかり強くて甘つたれられて……ホ、ホ、ホ、ホ、ま

かねえ。

考へると何が何だか、わからなくなつて了ふのです、熱しやすい代りに冷めやすくて、樂天的の方だからいゝやうなものゝ、折々は夕べの縁にねぎめの床に、逝く雲、散る花、かの人生の不可解に世を早うしたと云ふ藤村様のことが思はれてなりません。

死は永久の睡眠なり、なんてとんでもない事をさゝやかれる時もありますのよ。宗教は弱者の縋るべきものとはかりで、信仰心なんてものはどうしても起らない。

信仰心のないものは、ものに近いとあるクリスチャンは云ひました。

やつぱり私は自己を愛し、自己を信じて、スキートホーム、ハネームーン、ゴム輪の車、ダイヤモンド、晚餐、一高、それ以上考へない方が幸福なんです。

机の上には綾様の立姿、細面を少し傾けて、涼やかなおん眼をあけて、象牙細工

のやうな鼻つき、長いおん眉、おやさしいお口許は拜しながら、何と一言有仰つても下さらず、おん頬のあたり、例のおん笑くぼの在しまさぬが物足らぬ思ひ……あ  
あ白襟重ねたお胸のうち、綾さまの理想が伺ひたいわ、同じ運命の女と生れて……  
あちらで足袋つきをしてゐらつしやる母様の影が、大きく障子にうつゝて居る。  
私が居なくなつたらば、お淋しいであらうけれど、けれど、けれど、少女十八、  
いつまでかくて空しかるべき、あゝお母様。

光榮ある人生の春、一生一度の青春期、再び遭ひがたきは人生の春!!

## 湖 畔 吟

「小母様、風呂がわいたから、早くお嘉鶴さんに入浴にお出なせえまして……」  
 大きなうりして袖無しを着た女の子、葉草履バタバタと駆けて来て、脊戸口から  
 呼ばつたが、返辭がないので、さしのぞいて、そのまゝバタバタと歸つて行く。

亂れ伏す眞萩、白萩、さらさらと葉すれの音、垣を擡んでた雁來紅は、さながら  
 火を點じたやう。

夕焼空花やかなこの夕べ、縁に腰かけて、どうくんと云ふ海の響をきく乍ら、果  
 しもなく想ひをはせて、嘉鶴子は泣いて居るのでした。

紡績餅の輪に双子の羽織、一昨日乳母に結つて貰つた桃割が、半ば傾きかゝつて、  
 後れ毛のみだれた、細い襟首がいたくしい。

嘉鶴子は今年十八、髪と眼と、頬の色の美しい少女です。

今年の秋を、嘉鶴子の手首はやせました、馬も肥ゆべき初秋を……。

嘉鶴子は孤兒、乳母の許に來てから、もう六年になる。この夏は山内の富久さんにつれられて、海水浴に行きました。

富久さんとは東京に居た時分のお親友、先日久々ぶりで相見した時、嘉鶴子はたい、富久さんは肥つた！ と驚きました。富久さんは、嘉鶴子が別に田舎くさくもならないのをよろこびました。

富久さん兄妹、従兄の秀さん、四郎様と五郎様に、嘉鶴子を加へたその若い人達が、まあどんなに楽しくほしいまゝな日を送つた事でせう。

四郎様が、富久子をおどかさうとして、とんだ人違ひをやり、その令嬢は驚倒のあまり、三日間も病人に成つて了つた、なんて滑稽醜態は、毎日のやうに演じられつゝあつたのです。

早稻田文學士になりたてのホヤ／＼の兄様は、美しいお髪を浅く分けて、朝晩鏡

と首つ引だし、帝大土木科へ行つてる秀さんは、今度お髭を立て、これも靴の中  
に、小さな鏡が秘めてある。

一歳違ひの四郎様と五郎様は、毎日兄弟喧嘩ばかりして居ました。

富久さんは嘉鶴子より二月あまりの姉さんだけれど、御両親の御秘藏ッ子、苦勞  
知らずの御令嬢、それはそれは元氣者で、色の白いデブプリした體格、女權をふる  
ふことつたら、まるで誰でも女王に對する秘書官みたいな體裁、大學秀才も何もあ  
つたものでない。無口な秀さんなど、度々いろ／＼な御用仰せつかる。崖下の白百  
合をとつてくれとせがまれて、すべり落ちて負傷したり、十五貫何百の身體をおん  
ぶして川を渡つたり、叱り飛ばさうとする兄様は、あべこべにはね返されて、富久  
公、お多福、と口惜しがるばかり。此富久さんと自稱燈骨男子の四郎様とは、好取  
組でした。なか／＼回向院や何かでは見られません。

富久さんは五郎様がきつい御最負、嘉鶴子も五郎様の方が好きなのでした。兄様

は御母校の生徒だもんだから、四郎様々々と有仰る。

四郎様兄様ぶつて「五郎、五郎」と呼捨にする。五郎様もまたおとなしく「兄さん、兄さん」と呼んでるが、他人が見ちや、何方が兄様だかわかりやしない。たゞ五郎様の方が、少し細くて長いのでした、色も白うございました。ペンの徽章に金釦の制服凛々しく、鞆繪屋の靴なんか穿き出したところは、本郷座式——何處か貴公子風があるのでした。

四郎様はあまり炎天にばかり出て居るので、眞黒を通りこして、ピカ／＼光りが出て来た、美しい歯ばかりが眼立つて滑稽に見える。

嘉鶴子のことは誰云ふとなく、秀さんの許嫁だと云ひ出しました。思ひもかけぬこと、嘉鶴子はもう／＼秀さんに恥かしくつて氣の毒でたまらず、秀さんもわりに初心な人で、それから嘉鶴子とは散歩をしなくなりました。

今福さんと云ふ法學士などは、

「お嘉鶴さんは脊高だねえ洋装に適當だらう、外交官夫人の資格があるよ。工科と云へば大工さんや、土方の親方ぢやないか、工學士の細君にや惜しいものだ。法學士にかざるよ、法學士に」

なんて随分露骨な悪口を云ひました。

その頃隣室に、朝から晩まで机にがちりつき、と云ふ變骨漢が居ました、遠慮もなく富久子にさわがれるのだから堪らない、それはくむづかしい顔して、わざと夜なんかみんなが寝しづまつてから、後鉢巻で勉強したり、シツ、シーツなど、叱したり、ある時も女中をつかまへて當りちらし、

「女つて奴ア公德心がないのかなあ。人の迷惑もかへりみず、べら／＼べら／＼さへづり通してやがつて、實に氣持が悪くなる。勉強したつて腦にも何もはいらん、些と氣をつけるやうに、女中等にさう云つといて下さい。僕ア勉強に來てるんだから……」

きこえよがしに云つてるので、富久さん、いきなり讀書して居る秀さんの本を引たくつて、

「秀様、何でせうね、およしなさい。みんな遊びに来る避暑地の旅館で、勉強しながらつちやならない程、なまけて居たの？ そんなら東京へ歸つて、カンヅメでもした方が氣が利いてるわ、私等は此地へ遊びに来たんですもの、遊んで身體を太くするのよ、ねえ、四郎さん」

兄様があまりと見かねて矯めれば、直ぐ

「天は許さじ、兩人の

自由を縛する壓制を

齎する不平の氣はほとばしり

.....」

なんて大聲でワシントンの出来そこねなど歌ふ。

敵しかねたか、その人はとう／＼室を代へて了ひました。その後この室へは文科の生徒が來ました、中山様と云ひました。帝大獨逸文科三回生、白面の眉目秀麗、脊の高い清らかな姿、大學生は七八人居たが、群をぬいたる君が風采、富久さんがまづ先にお近づきになつた、嘉鶴子は始めて言葉をかけられた時、颯と恥らひを頬にのばせて、にげるやうに避けて了ひました。けれどそれは二三日の間でした。間もなくお室へも行つて、よくお話しするやうになりました。兄様達とは違つて、それは極く物しづかな、ふつくりとおとなしい方なのでした。で、中山様はお優しい、お優しい、つて女中達の評判も大したものでした。

富久さんの勝氣とお轉婆は、海水浴場でも、マガレット君と云へば、あゝ山内？誰にでもとうなづかれる程、知られて居ました、が、誰も當世風の富久子より、陰氣な嘉鶴子を愛しました。嘉鶴子は別に美人ではありませんでした。スタイルもよ

くはなかつた。

暑い時と、嬉しい時、はつとした時、その時が、嘉鶴子は一ばん美しいのでした。頬が匂ふやうな櫻色になつて、うるみの多い眼を輝かして、無造作な束髪のほつれ毛がハラ／＼とみだれかゝる。同じ笑つても富久さんは、指でついた程の片ゑくばが、またない愛嬌になりますけれど、嘉鶴子は齒ならびのわるいのがきすずでして、憂顔だ。何處か沈んでるねえ、年中何を思ふてのだらう、とはよくみんなの口にはぼされる評でした、物憂さに少し口數でも利かずに居ると、

「また何か臆想にふけつてますね、何を考へて居るんです。いけませんよ、そんな事ちや……」

なんて云はれて、よく袖に顔をかくして了ふ。額がせまくつて眉の濃いものは短命だときいて、それをどんなに氣にして居たか知れませんが。

人の顔色をみるにさとく、非常に神経の鋭敏な富久さんは、中山様に對する嘉鶴子の態度も、たゞではすませませんでした。

「嘉鶴ちやん、理想通りでせう。」

「先刻は何だか知らないけれど、大變お話がもて、居たのね！」

など、皮肉られる事は、珍らしくはないのでした。女中の誰とかい、嘉鶴子様はお化粧が濃いので、前髪が出過ぎて居るの、あれは中山様がゐらしてからだのと云つたさうだ。

「ホ、ホ、醜態ねえ、嘉鶴ちやん、私ならもつともつと二尺五寸も廂を出して、

白粉の厚さ一インチ、笑つたら、龜裂が入る程塗つてやるわ、ア、コリヤ〜。」

デカンショ、デカンショで、なんて翻弄されても、嘉鶴子は一言も云ひ返しませんでした。君在さば、離れ小島も、深山の奥も何かせむ!!

「風さわぎ、むら雲まよふゆふべにも」

忘るゝまなく忘られぬ君、だの、忍べたい知らせて後のつらからば、いはぬ頼みもあらし物ゆゑ、など、日記に書いたのも、この頃のことでした。

中山様のお机の花一つ活けて上げるにも、富久さんの眼の光るのが恐ろしいごさ  
 いました。可笑しかったのは一度中山様が山歩きのお土産だつて、立派な白百合を  
 折つて来て下すつたのです、それを富久子にお渡になつたが、お互にその花に手を  
 つけるのを遠慮し合つて、花瓶に投げこんだまゝ、とう／＼ボウフラを生かして丁  
 ひました。

富久子も黒鶴子も、海水浴はあまりしませんでした、浪が恐いから！ とはいふ  
 ものゝ、その實色の黒くなるのを恐れてのこと。

その代り運動場の持主、テニス界の王様、テニスコートに富久さんの影見えねば  
 何か變事があるのです。思ひきり華美な品のいゝ浴衣も何も高つばしおりに着て、  
 袴下の帯を巻いたまゝ、麥藁帽かぶつてラケット肩に駆けまはる風は、あんまり好い  
 ものでもありません。田中様の御隠居様と云ふ方は、富久子さんのお轉變は人業ぢ  
 やない、と有仰つたさうです、この御隠居様は富久子のいゝおもちやの種でした、

猫のおしつば程のお髪を紫の打ひもで結へた切下げにして、まん中のはげた部分へは、コロップの黒焼をぬつて居らつしやいました、黒の青梅のお被布がよくお似合あそばして大きなくお老眼鏡かけて、よく若い女達に向つて諄々と、いろくお話が始まるのを富久さん、小聲で

「振つてよ、お祖母様、フレ、フレ、フレ、フレ、フレ、フレ、フレ、フレ」

なんてみんなを吹き出させる。

朝起の習慣のついでる嘉鶴子は、みんなのやうに明るくなつてから寐てることは、きまりがわるくてどうしても出来ません、毎朝早起して、濃い緑の無花果の枝を押しながら、そと柴折戸を開けて、露深き河畔へと出る、川はまだ夢のやうな蟲の音を載せて緩々と流れてゐる。

朝霧やうやく薄れ行けば、東の空ぼうつと臙脂の色花やかに、眞紅な太陽が溶けさうに揺らぐ。

ある朝はゆくりなくも中山様とこの岸に立ちました。中山様が、お嘉鶴さん、今度ボートで何處かへ行きませうと有仰つた。エ、ほんとに？ 嘉鶴もつれてつて下さるの。つれて行きますとも、貴女一人の方がいゝね、うれしいのきつとくよ、つてお約束しました。それから嘉鶴子は毎日くそれを樂しみにして、一度四郎様と秀様が、是非のせてやるつて迎へに來た時も、何のかのと云つて行きませんでした、申談らしう。

「いやよ四郎様、貴君なんかにつれてつて頂いたら、危いものです、どんな目に合ふか知れやしない、命がけです」

四郎様ムキになつて、

「何だ、馬鹿にするな、城北健兒の腕前を知らないか、失敬な」

秀様は流石に開化て笑ひながら、

「お嘉鶴さんは中山君でなくつちやいけないかね」

「あんまりです！」

ふいと廊下へ出て了ふと、後にはみんなの笑ふ聲がした。

さアその後、おめくくと中山様につれてつて頂くことはどうしても出来ませんでした。で、富久さんも一緒に誘ふと、

「中山様とちや厭よ、わるいわ。ポートにのりたきや兄様でも秀様でも、五郎様でも居るんですもの」

と言はれて、嘉鶴子は涙を呑みました。

中山様に甘黨の旗頭、しばらく甘いものを食べないと、氣がぼうつとして了ふのださうです、一日でもお菓子になげりや心細いなんてまるで大きな坊やみたい、お室にはいつも、東京から小包で来るお菓子折が重ねてありました。嘉鶴子はよく紙に包んで頂きました。ある時も、

「お嘉鶴さん、よかつたらいつでも食つて下さいここにありますから」

と有仰るので、

「はア有がたう、折ごと引いて了ふかも知れませんが、大きなねづみが……」  
と笑つたら、

「エ、かまひません」

と美しい齒をみせて莞爾、細い／＼つるのお近眼鏡かけてゐらつしやる。細面の鼻筋通つて、形のいい唇のキツとしまつた、お髪は無造作な三分刈頭、凜と秀でた眉から額のあたり、何處か利かぬ氣の御氣性もあらはれて居る。ちつと嘉鶴子をみつめて、

「貴女は僕の姉に、それはよく似て居るんです」

と言はれたのが、嘉鶴子は身にしみて嬉しかった。何だか始終中山様がお室にゐらつしやらないと、心細く物足りなくつてたまらない、御友人のそこへお遊びに行らつしやるのでさへ、恨めしいやうに思はれる。けれど中山様は誰に對してもお優し

うございしました。女中達にでも、小言らしい事有仰つたことはありませんでした。

二十日ばかりは夢のやうに遇した。ふと富久さんが、箱根へ行つてみたいと云ひ出した。原案即決、四郎様五郎様は拍手でむかへる、嘉鶴子の見上げた眼の色を早くも、

「嘉鶴ちゃん、貴女はこゝに残つてゐらつしやい、そして中山様と一緒に何處へでも連れてつてお貰ひなさい」

「いゝわよ富久さん、そんなにお邪魔なら……」

ハラ／＼と落涙した、いつか富久さんが中山様の袴の綻を縫つて上げて、

「嘉鶴ちゃん、たゞんでぐらゐお上げなさい」

と何も知らぬとこへ突然投りつけられた事も胸にあつた。その夜兩人は口を利きませんでした。

翌日出掛ける時になつても、また富久さんは不機嫌でした。嘉鶴子は再びこゝへは歸つて來られないやうな氣がしてなりませんでした。中山様は室を出て、一行を玄關まで送りました。無量の想ひをこめた嘉鶴子の顔は、人に快くはうつりませんでした。真白いお化粧が目立って見えた。青磁色紅梅織の單衣に肉色博多の帯がうつりが好かつた。富久子はコバルト色の袴を、シユツ／＼とさばいて先登に立つ。

この連中は書道の隙を踏破して、その日の夕方箱根湖畔の宿につきました。富久さんは途中で歩けなくなつて、駄々をこねて、散々みんなを困らせたのでした。嘉鶴子は山百合を持ち切れぬ程折つた。

通されたのは湖水に面した離れ座敷、銀杏返しの新飛白、二十四五の氣の利いた女中の受持でした。

お湯から出て富久子は宿の貸浴衣を着てみて、みんな大笑ひさせた、尻つけけに滯しめて、大きな廣袖のゆきの長いのをまくり上げる風つたら、恐らくバックの記

者も、失笑ださずには居られなかつたらう。

「ギイー、ギイーと直ぐ先を、桔梗の紋ある赤い提灯をつけた舟が通る。提灯の水にうつゝた影がゆら／＼ゆら／＼、波紋を傳はつて長くゆれる。」

湖上は一面に薄曇で刷いたやう。

「兄様、飯はまだかねえ、呼鈴を押さうか？」

「四郎様の食心坊！」

「何だ！ お多福！」

曉の冷気、ひや／＼と身にしみて、無意識の中に襟かき合せつ。またさめやらぬ夢心地ながらも、中山様！と思ふと何だか胸が一ぱいになつて……。

枕に顔を伏せてうつとりと……ふた／＼び夢に落ちたが、何かに驚かされて、愕然と目をさます。

嘉鶴子は起きて兩戸をくつた、露深くく立ちこめて、縁の先は海か山かわから  
ない。欄に凭つて、恍惚、思ふまゝに中山様のことを思ひました。今頃は洗面場で  
冷水摩擦でもして被居しやる時分だ。あゝ、「お嘉鶴さん」と微笑まれるお顔も今日  
は見る事が出来ぬ。誰がお部屋のお掃除して居るかしらん「行途をこばむものあら  
ば」とよくあの察歌をお口癖……。いつも競争的に寝坊する人達も、今朝も五郎様  
まで起されずに起きて来た。湖で顔を洗ふ、いやに生ぬるいやうな気がする。富久  
さんはすぐ運動場へかけて行つてプランコ。廣い芝生に露しげく、素足にチク／＼  
むづがゆい。

嘉鶴子は湖畔に立ちつくして居た。神々しい程の晨のさまは、眠れる姫ともたと  
へやうか。翠緑したゝる塔ヶ島、離宮は湖上に水鏡して、さながら水中に樓閣のそ  
びゆるやう。チラ／＼と静かな小波が渡る。

「オーイ、御飯だよ、富久ちゃん、お嘉鶴さん、オーイ、御飯、御飯」

四郎様が縁側に立つてどなつてる。四郎様は御飯の化物と、嘉鶴子はいつとも笑ふのです。お汁に鹽元豆、玉子焼の御膳に向ふ。四郎様と兄様が手つ取早く代りばんこにお茶碗出すので、女中はお給仕が間に合はなうわわてゝる。五郎様たら癡狂だ。三杯目にお箸を折つて了ひました。

御飯がすむと、一同ボートで箱根権現へ行きました。昔とつたきねづか、秀様は高等學校時代選手を承はつたものなんですつて。五郎様もいま次選手なんですせう。あの藍色の袴を腕にオイル纏つて男しく、富久さんのばちんとひろげた洋傘の蔭に避いて、頬から雨を、薄紫に隈どつた。

嘉鶴子は澄みきつた水の中に手をひたして、指環の玉のきらめくのを興がつて居る。富士山がはつきり水にうつる。鏡の面に一痕の指痕を長く光らせながら、みんな傘を揃へて。

自治の大船男しく

尙武の風を帆にはらみ

船出せしより十二年

花咲き花はうつろひて

.....

.....

行途を拒むものあらば

斬りて捨つるに何かある

.....

.....

とある岸にボートをよせて、どやくと上陸する。権現へと向ふ途中、山の根から、  
美風な泉のこんくと湧き出て居るのがありました。嘉鶴子は風はず尾を止めた。  
が、一同がきんく行つて了ふので、仕方なくその後を追つた。

老杉の下道、苦むす石段をのぼりつくして、宮の前に出ると、常宮周宮兩内親王御手植の杉とあるのが目についた。嘉鶴子はそこらに散つてる黄金色の銀杏の葉拾ひあつめて懐に入れた。

歸途には嘉鶴子はもう先へ走つて来て、泉の傍にしやがみこんで了ひました。

まア何と云ふ美しい水でせう、それこそ、それこそ玉の様なのが、湧いて居るのです。ふと「ゆあみする、泉の底のさゆりばな、二十の夏を美しとみぬ」と云ふ歌をおもひ出した。嘉鶴子は何となく、戀の泉！ 戀の泉！ とさゝやかれるやうな気がした。ためらつたが……一寸揃んで、唇をぬらすと、甘い、甘い、ヒラと懐から先刻の銀杏の葉が一枚落ちた。嘉鶴子はそれを水にひたしては口にふくみ、ひたしてはふくみ……富久さんが駈けよつて、肩に手をかけてワツと云ふ。玉泉に二人の白い顔が重なつた。

「サア嘉鶴ちゃん、十國へ行くのがおそくなるわ、早く行きませう、ほら、兄様達

はもうボートにのつて了つたわ』

『一寸待つて……』

あたりの夏草の中に咲いた薄紅い撫子や、山紫陽花を折りとつて、これもさぶりと水をくいらせて、ハンケチで持つた。さらばよ、泉、さらばよ、水よ！ 急いでボートにのりうつる。あゝ、あの清泉、ほんたうに放れがたなの思ひでした。丁度中山様と別れる時のやうな氣がするのです。

「人の心を惑はする妖魔の、このあたりに現はるゝか、はたまた四方のものすべてを美しき天國化する想像の力、我胸にありて然かなすか知らねども。我はかの「メルジネ」とその姉妹に心魅せられしが如く今又、一つの清泉にも強き力もて誘はれたり。小丘を登りて洞窟の前に行けば下に石磴二十階程ありこを降りゆきしところに大理石もて疊める窟あり、清泉玉の如く湧き出で、心地よきこと限なし。井側をなせる石の垣、さてはそのあたりの若草の……」

ピカリ、ピカリとオールが光る。

宿へかへると、兄様達、これから十國峠へ上るのだと云ふ、命つけておいたお握飯も出来て居る、富久さんも無論一緒に行くつもりで居るのを、兄様が、

「富久子お前達は待つてお出、とても十國へは登れないぞ」  
得たりかしこしとその尾について四郎様、

「さうさ、よした方がいゝ。一寸権現の石段を上つてさへハア〜肺病患者がせき入つた後みたいな息使ひして……」

富久さんも昨日の醜態に恥ぢてか、強ひてとも云ひませんでした。が、  
「願くば雨ふれよ、我が親愛なる四郎君のために祈る……」  
と云つて、庭中おつかまはされた。

兩人で町を散歩したが、別に面白い事もありませんでした。繪葉書を取りよせて、

(うゑるてるより)

富久さんは盛んにお友達へペンを走らす。嘉鶴子は中山様に一枚！と思ふたけれど、それすらよくなし得ず、やつぱり止して了つた。兄様達は五時過ぎ、腹が空いた。空いたを先に立て、歸つて来た。金色の富士、黄金波、夕映し湖畔に立つて、白モスリンの單の袖を涼風にまかせたまゝ、うつとり佇んで居る嘉鶴子を、

「まア、ちよつと、何見てるんでせう、あゝして先刻から……」

「一寸夢二さんの書題にいゝわ、あこがれ」なんて……」

と富久子が云つたので、兄様達どつと笑つた。この笑聲に驚いて振り向いた嘉鶴子の顔は、かたくく引しまつて居た。

夜、兄様はまたみんなをつれて、元箱根の方へ出かけました。

まつ暗な石ころ路を、兩人は兄様と秀さんのお袖に縋つて、おまけに提灯持の四郎様がすん／＼先へ行つて了ふので、富久さんは幾度かころび掛つた。

聖僧が真黒い法衣を着て、突立つて居るやうな杉並木、顔をあげると、高い／＼

棺の間から星がピカ／＼のぞいて居る。

朝に辭すウ、白帝彩雲の間ア、千里の江陵一日にして歸るウ、兩岸の猿聲、啼いて止まずウ。

四郎様が蠻聲はりあげてどなりかけると、向ふから、

「夕月落ちて霧白し、夜は深縁柏葉に……」

高らかに大好な大好な寮歌の一節、はつとしてると、五六人の學生がすれ違つた、嘉鶴子は思はず、中山様！ と呼びたかつた。

歸途に秀さんは萬年青の葉を巻いて、何と云のか長い一曲を吹きました、そして妙な話をしました。箱根の山に暮して居る樵夫と獵師とは、不思議なものを見ると云ふ。それはもし樵夫が月夜に出て晝の忘れをうめやうと思つて鋸の音も身に沁む夜仕事をして居ると、何處からともなく笛の音がする。それが葦の葉で造つた笛である事をすぐ氣付く。初めは極く静かにと切れ／＼に響くが段々音が冴えて來て、終に

は全山木の葉のそよ音もせず、今まで盛んにしてゐた露が木の葉から落ちる音も  
 やんで、引いても引いても鋸の音が聞えなくなる。樵夫は恐れて鋸を棄て、鋸屑の  
 中に身を抛て嘔泣すると笛の音がぱつたりやんで了う。恐る恐る薄の中の山小屋を  
 見ると、山の中腹にかけて大きな五重塔の影があり、映つてをるのを見たと言ふ。  
 又或る獵師は、矢張月夜の晩、一匹の鹿が薄の中に立つてゐて、角が高く月を受  
 けて光つてゐるのを見た、鐵砲の狙をさだめ、段々近づいて来て森と薄の境目まで  
 來たら、嘯唳と葦笛の音が起つたので、思はず足を止めたと言ふ。ちつと薄の枯葉  
 に身を臥せて覗つて見ると、鹿の立つてゐる薄の近くに一人の子供が裸のまゝ、岩角  
 に腰かけて須りに葦の笛を吹いてゐたのを見出して驚くと、薄の葉から落ちる露ま  
 でが調子を合せるやうに耳に響いた。覺えず銃身が岩に當りて微かな音を立てたら、  
 鹿は角を横にして坂を馳せ上つてもう薄の中に姿は見えなかつたが、葦の笛の音が  
 小屋の方に移つた時、葦の湖の水面に黒い五重塔が現れたのを見たと言ふ。

それもいまは言傳へとなつて了つて、たゞ葦の湖の舟子が月夜の湖を渡る時、底には太古のまゝの杉の森があつて、その梢の間に五重塔がかすかに見えると言う噂だけが残つて居るさうな。(一高校友會雜講の一節)

「アッ」

五郎様が下駄をふみくら返した。

「あぶないこと、嘉鶴ちゃん」

「え」

出立の日は雨でした。が、富久さんが、どうしても立ちませぬ、雨の山路もまた詩的でせう、かへつて印象が深いわ、なんて云出してきかない。兄様も困つて女中に相談してみたが、では出掛やう、兩人だけ駕にのせる事となつた。

さア仕度で一さむぎ、兄様達はごさを着る、その風つたらありません。富士まゐ

りよろしく、秀さんが太いステツキついたところは、漆黒のお髷と對照して實に奇抜だ。肥つた富久さんはやつとの思ひで駕に潜りこむ。

いざと思杖とつて、女中等は、御機嫌好う、と頭を下げかけると、富久さん急に身もがきして、一寸、下して、とさげふ。どうしたと兄様が驚いて立よると、その手に纏つてはひ出してあゝ私こんなものにつたら死んぢまふ。頭が痛くなつて来た、今日は止めます、と血の氣もない顔色してるので、あつけに取られて居た嘉鶴子も下りる、何のこと、今日の御出立は御沙汰やみ、また草鞋のひもとく。四郎様は大よろこびで早速この有様を三枚つゞきの自筆繪葉書にもものして、女中に投函させました。

富久さん、駕にはこり／＼した、もうお天氣になるまで動ないわと云ふ。

ところがその日から五日もふりこめられたのでした。實に／＼氣の遠くなる程退屈しました、秀さんは玉突にはかり入りびたつてる。四郎様と五郎様は富久子相手

にピンポンやつて、玉をありたけつおして了ひました。

人わるの富久さん、中山様からお手紙が来やしませんか、来やしませんかと嘉鶴子を弄かふ。嘉鶴子はうつかり、かへりたいとも云へなかつた。

静かにく、雨に暮れ、雨に明け行く湖水のながめ、中山様のお目にかけてうございしました。

朝に夕に、凭るになれたる縁のチニーヤ。嘉鶴子の何となく心について忘れられないのは、いつか中山様に拜借して讀んだ即興詩人、アントニオがなつかしくてなつかしくてたまらないのでした。薄待なるアスンチャタの、かつては驕兒の恣まゝに戯れ狂ふが如かりしと云ふ華かな姿を想ひ、またあの寺院の圓柱にもたれて紫の花をかざして居た可憐なるラ、を想つた。

兄様達が二合の卯酒に酔つて、兩人を困らせた晩もありました。また一夜、夕方から雨ふりつのも、嵐さへ急に加はつて、まるで嵐のやうな光景となつた。富久子

達は食後、トランプなどしてあそんで居ると、急に湖畔がさわがしい。何でも湖上から、助けてくれ——と云ふ悲鳴がきこえたとやら、救助舟を出したのだとやらで、提灯つけて右往左往、岸打つ浪のもの凄さ。母家の客達もどや／＼と廊下傳ひにこの離れの縁へとあつまつて來た。みんな面白半分、洋燈を高くかゝげるやら、「おゝ——い」なんて聲を揃へるやら。秀さんにつかまつて鼻の下を長くしてのび上つて見てた富久子が

「可哀想ねえ、まあどんな人なんでせう、何だつてこんな晩ボートなんかで出たんでせう、でも可哀想だわ、ほんとに、さぞこはいでせう、ねえ」

と二三度云つたので、一人の學生が、

「山内さん、男子ですつて、大學生のね、獨身で、しかも素敵な美男……」

「失敬な！」

富久子はびしやんと障子を閉て、室内へはひつて了ひました。

「ハ、ハ、ハ、御逆鱗だ、御逆鱗だ」

嘉鶴子はひとり窓に立つて、暗をついてほとばしる白練をながめながら、こんな  
 晩湖水のまん中で思ふ人と一緒に死ねたら嬉しからうと考へて居た、雨のしぶきが  
 きら／＼と、髪に袖に肩に光る。

いよ／＼出獄、富久さんも嘉鶴子も、なれの草鞋を穿きしめた、一寸先も見えぬ  
 やうな霧の朝で、木々の下行くに、ボタリ／＼と冷たい雫がたれる、眉に露が凝つ  
 て、兩人の前髪など水を浴びたやう。

嘉鶴子は路々一生懸命にそこの花を折りました、女郎花はすでに黄を点じ初め  
 て、薄も穂に出た。藤紫の虎の尾や、草に交つて濃紫の桔梗もあつた、お茶碗花  
 やら我亦紅、野萩だの釣鐘草だの、あまり折るので秀さんに、

「お嘉鶴さん、邪魔ぢやあないか、そんなに抱へこんで……どうするの、僕が持つ

て上げやうか』

『いえ、いゝの』

流石に頬をこめてそのまゝ取るのをやめた。

三里二十八町の山を無事に下つて、三島の〇屋と云ふにお晝食。富久さんは足にまめが出来て、靴を穿くことが出来ないと言ふ。嘉鶴子はお揃の象牙のお扇子をまぐりながら、夢のやうな氣がして、あゝ今日は中山様にお目には掛れる……。

三島明神へおまわりして、五郎様は子供らしう、池の緋鯉に駄をやつて興じた。

ふと時計をみると、汽車の時間に間に合はない。さア大へん、丁度兄様がそこへ来たガタ馬車を呼びつけて、さアく急げ、とばかり、兩人を引っぱりあげ、四郎様や五郎様はまだ片足ふみかけたばかりなのに、全速力で馬をふつとばさした。ゆれるわ、ゆれるわ、上下動、左右動、彗彗、猛烈、猛烈、富久さんは五六度も投げ出されなくなつた。鯉口を着てはつかふりした馭者は、時々、ブブー、ブブー、ブーとラツ

バを吹く。嘉鶴子はもうさまりがわるくてくく、町を出はづれるまで顔もあげ得ませんでした。

たんぼ道へ出ると、かなたの松原つゞき、汽車はもう烟をはいて徐行して來るのが見えます。そら、そら、はいヨーツ、ピシツ、人も馬も氣が氣ぢやない。ステーションへ駆けこむや否や、兄様は札賣場に飛びこんで、秀さんがお紙幣を投げ出して、嘉鶴子はほとんど四郎様に引ずられるやうにブリツヂをころげて、あやうく一同のりこんだ。富久さんは、大切な前櫛を落して了つたとあをくなつてた。

汽車が御殿場あたりを通る時、丁度雲が切れて、暮れ行く空に富嶽の英姿、打つづく八里の山根、窓に凭つてた嘉鶴子は我知らず涙かこぼれました。白龍をどる鐵橋も、出でてはくいるトンネルも、初めての身にはうれしく面白く、何よりも今夜は宿へかへれるのがうれしくて、四郎様に梨をむいて上げたり、お饅頭を食べたり、いつにない元氣で汽車の進みもどかしい。かくて六人はその嘉鶴子のなつかしい

戀ひこがれた旅へ、車をつらねてかへりました、嘉鶴子はまづ先に飛び下りた。

中山様は行李をととのへて居ました。あきれてお部屋の柱に手をかけたまゝ、ぼんやりして了つた嘉鶴子を見上げて、

「貴女も僕をおいて今日まで歩いて居らつしたぢやありませんか、だから今度は僕が残して行きます」

なんて笑つてゐらつしやる。嘉鶴子は涙の顔をそむけました。

その翌朝、中山様のことが何だか夢のやうに思はれて仕方がない。あれは夢だつたのかしらん？ と考へてみてもよくわかりません。では、もしや、もしや、と瞬時の間、はかない事をたのみにしたが、中山様のお部屋をのぞいてみると、やつぱり駄目なものでした。もう御飯をおすませになつて、主人やおかみが代る／＼挨拶に來てるのなど、見るに得たへず、富久さんをすゝめて庭へ下りた。富久さんは早くもテニスコートへ駆けよつて、聲高くみんなを呼ぶ。

しばらくしてそつとかへつてみると、中山様は洋服に着替て居ました。まつ白いカラアを心持みせて、餘計お脊が高くみえる。

目で招かるゝまゝ嘉鶴子はだまつて柱の傍に坐りました。中山様は卓に片脇よせて、火もない炭を手に持つて居る。

「お嘉鶴さん、いよゝお別れね、併しまたお目にかゝります……」

「これが、一生のお別れかも知れませんが、投げるやうに云ふと、」

「そんな、悲しい事云ふもんぢやない」

涼しい眼をぱつちり、嘉鶴子は俯いて襟をかき合はせた。

兄様も秀様も四郎様も五郎様も、門まで出て來ました。嘉鶴子は富久さんとバラソル傾けて、何處までも何處までもお送りしました。

幾度か辭退されたが、でも、ねばい兩人の歩行ほどに歩をゆるめて、朝露ふ

かき草路を、人も我も無言で行く。

富久さん、かへりみて、

『此處らでお別れしませうか』

『さう』

名残惜しくもまた二足三足、中山様も一寸ためらふ御様子が見えた。が、直ぐ

『失敬、富久さんもお嘉鶴さんもお大事に……』

『御機嫌やう……』

山角をめぐつて真白い洋服姿の、見えつかくれつ、二三度後を振りむいて、最後に手をあげて莞爾なすつたお顔！ あ……あ……嘉鶴子は身をふるはして忍び音を立てた。中山様、今頃はとうしてゐらつしやるでせう。歸つたらお手紙下さい、エ貴下もよ。僕も書きます。きつと、きつとよ、とかたく誓ひ合つた間ながら、嘉鶴子は手紙は書きませんでした、頂いた名刺は手箱の底ふかく秘めてある。あの地

の事でもお思ひあそばす折には、嘉鶴子と云ふ名の、お胸に浮ぶ事もあるかしら  
ん？ 人生一度別れては……なんて、縁起のわるい事は申しませぬ、切に〜再會  
の機を祈る……。

嘉鶴子は夢のやうに、中山様との邂逅の有様を想像してみた。今度はどんな處で  
お目にかゝるか。ステーション？ 電車の中？ それとも……それとも……あゝそ  
の時、自分は、「中山様」とさけんで駆けよるだらうか。中山様は、「お嘉鶴さん」と  
云つて下さるでせうか。

「あゝ日を経れば、忘れむと思ふ面影の、などさやかにほなり増るらむ……」

「この頃は毎日角帽制服に身をかため、どんなに勇しい風して、御通學の事  
でせう？ 外ながらその有様をたつた一目……」

見上ぐる空に夕づゝの影、ホロリと傳ふ一雫。

あゝさらば、我が戀ふる君よ、ささく在せ……。

## もゆるおもひ

今朝は寒い！ 前の畑は霜が雪のやうだ。門に凭つて紫の光る畦の隅を美しいよながめ乍ら、あゝ私の薄田伯爵家へ御奉公に上るべき日もいよ／＼近づいた、といろ／＼考へた。

もう十日過てはこの片田舎を出て花の都に宮仕へ、伯爵！ 若君！！ お姫様！！ 紫矢飛白の振長う、しとやかに三ツ指つかへる侍女姿を思ひみて、我知らず嫣然……、希望に胸は高鳴りつ、前途は星と輝くのである。

が、二十になるまで、我家へは歸られぬのかと思ふと、行くのは厭だ。心細い。兎も角もお嬢さんとかしづかれて居たのが、人に使はれる身となつて、刺の生えてると云ふ、他家の御飯を食べるのなもの。朋輩は多いし、まして若様附……私に首尾よくつとめられるだらうか。

野村子爵へ上つた登喜子さんは、今春内山醫學士との縁談が調ひかけたのだけれど、御病氣の若様の大的お氣に入りでなかくお暇が下らず、とうく感染していまは芽ヶ崎の南湖院に身の薄命を泣いて居る。これが形見と芳麿様が御遺愛のアルバム抱いて。お、私も御奉公なんか厭……厭……。

「お姉様アつ、おほ……」

不意に後から縫子さんが縫りついた。蝦茶袴、元祿袖のお被布、手製オペラバツクを肩からかけて、黒の鞆下勇しく、あふれるやうな笑顔を傾げ。

だまつて手をのばし、曲つたりポンを直してやると、

「行つて参ります。左様ならッ」

笑ひ乍ら飛び出して行く。あ、縫子さんとも直きお別れよ。姉さまが居なくなつたら、淋しいでせうねえ……胸が一ぱいになつて、ぼんやり後を見送つて居たが、これをしほに家へはいつた。お母様はもうお茶の間で、せつせと針を運ばしてゐら

つしやる。私も日あたりのいゝ六疊に裁板をすゑて、縫かけの長じゆばんをひろげる。

薄田伯と云へば御同族中でも評判な有福なおくらし。お年頃の若様姫様は在すし、御交際は華手なり、従つてお小間使ひなども、大概の嫁に行くくらゐな支度がついて、非常に綺羅の張るお邸なさうだがお母様は、お世話下さる山田男爵夫人のお顔に對しても、朋輩に恥かしからぬだけのことはといろく御心配遊ばし、白を重ねた紋羽二重の裙模様も、二三日前松屋から出来上つて来た。

あれをまア一人で着こなせるかしらん、今からそれが心配になる。

手あぶりにこゝを突込でにおいて、熱心にチク／＼やり初めた。糸の滑りのキユウキユウと絹糸の特聲を出す心地よさ。

白で大きく鶴を飛ばした、鶉色地の上品な友禪羽二重。私もうこれがよくつてよくつて、藝者ぢやあるまいし、長襦袢のそんないゝのは要りませんと云つただけ

れど、出来る時にこさへておかねばと母様が買って下さつた。きけば近所では、江崎さんちや近々に御祝儀でもあるらしい。まだくお嬢さんはお若いにねえ、併しあすこでも長らくお父様がないんだから、など、知つたかぶりに、取沙汰してる人もあるとやら。まつたく私が御奉公に出るなんて、誰しも思ひ掛けぬ事だらう。元代様つては、奉公なんか着物をよごすだけ損だと有仰るが、奉公にもよりけりねえ。登喜子さんだつて、平常にきり立の銘仙ぐらゐ着て、友禪縮緬の丸帯に品のいゝ高島田、何處のお嬢様かと思はれるやうな風をして居た。

少しは他へ出て上流の家庭のさまなども見なくつちやつまらないわ。元代様は何でもあんな考へだから堪らない、箱入娘の世間知らずのつて、もうそれが通るお年でもありませんまい、来年はお廿四……人生の半分は過ぎ了つてるものを。よくまあまいくつぶろみたいに家にはかりこびついて居られるわねエ——布に顔さしよせて、ぶつんと糸を切り乍らふと振返ると、丁度きよが郵便を持つて來た。浪さんか

らの寫眞と手紙。無造作に直ぐ封を引さく。大氣焔でこま／＼と帝大の運動會便り  
 裾高なお袴にバンドしめて、編上げ靴に往來を濶歩する、得意のお姿が目に見ゆる  
 やう。が、歸途お汁粉やへよつて、お友達と食べつくらをやつた。私は難なく七杯  
 を平げたが、むくいはチキメン、夜半からひどい胃カタルを起して、今日は意氣甚  
 だ銷沈の體……に至つては吹き出して了つた。本領發揮！ 本領發揮！ ほ／＼／  
 ほ振つてるわね、浪子さん。お茶の水だなんて威張ても、こんな人があると思ふと  
 可笑しくなる。と、共にはしなくも湖畔生活の當時の有様を、今更のやうに思ひ浮  
 べた。人知れず秘めし戀ゆる夢にのみ。散ればかつ咲くまぼろしの花、とやら、戀  
 ならずとも胸に秘むれば折々は夢も見る。

若様のこと、五位様のこと。さてはお天道様に罰でも中られたのか、年中お近眼  
 鏡の中でまぶしさうに、眼を細めてゐらした川島さん、丹ちやんと仇名をとつた  
 若紳士の若山さん、茶目さん、凸坊、河童の干物。エ、おほ／＼／＼これは浪

さんと相談して、〇〇さん達に奉つた稱號なのよ。あら、だつてみんなさう云ふ特長を持つて居るからですわ、正一位様の豊川さん、操さんの藤村さん、油繪を成さるからペンキ屋だの、青くて小さいからするるなり飄箆、なんか平凡だけれど、なかなかローマンチックな物語もあるんですよ。え、さかせて上げませうか。

あら厭、罪ほろぼしだなんて！

あの暑中休暇中の出来事よ、發端はね、函嶺山蘆の湖岸の久子さんから御自慢半分、手傳がてら是非來よと毎日のやうに手紙をくれる。久さんのお養家は旅館なんでせう。實はね私、去年木村さんが對江館に来て居た時分、よく遊びに行つてはあのお近やおまさなどが、いつも方々の室で面白さうにふざけたり、さわいだり、してるのを見て、ひそかに少し羨ましがつたものなんです。で、例の好奇心から、自分もあんな生活がして見たくつてたまらず、うまく母様を説き伏せてお許しをうけました。

ほほ、、、そりや鵜沼の海水浴場で、印度美人、一名海坊主と、その名かくれなきお轉婆令嬢のことですもの。汽車と電車にゆられた上、函谷關も物ならず、と歌はれた峻しい山路を、結付草履に苦もなくふみ上つて、この嬢様は、アエラク足が早え、と荷しよひの者をたまげさせ、左様よ貴女はコムパスが長いからね、と途中まで迎に出て居てくれた久子さんに冷された。だつてあんな山ぐらゐ、ほんとに何でもありやしないわ。たぎり落ちる瀧津瀬、轉がる石に激する急流、見上ぐる峰には雲が迷ひ、行途は小暗く霧に埋もれ、谷間には鶯が鳴いて居た。高根には山百合が咲いて居た、のをめづらしく感じたのと、初めて湖水の見えた時、はつと歡喜の驚に打たれた。別にかうと云つてあたへられた印象もない。みんなに紹介されてお辭儀をして、荷物を片づけてお夜食を食べさせられて、お湯に入浴つてその晩は寝て了つたが、さて翌日起きて見たら困りましたね、たのみに思ふ久子さんは——何しろ夏を書入の場所としてお客の立こむこと。立こむこと。五人の女中の取締りて、

また當家の娘として人に接する多忙さ。朝からチツトモ顔を見せぬ。私は丁度御婚禮のすんだ朝の花嫁さんのやう、何だかまるで勝手はわからず、出過者だと思はれるのも厭だし、暫くは差控へて居たが、あまりの手持無沙汰さに、何かお手傳ひさせて頂戴な、と云つても、まア宜しいよとばかりなので、一倍氣づまりで堪りません。私今までこんな氣兼ねをした事はありませんからね、意氣地のない話しだけれど、もう眼の中が熱くなつて來ました。

ところが丁度その時、やつぱり私と同じやうな事で、二三日前に來たといふこの浪さんが（久子さんの従妹）樽がけの甲斐づくしいで、たちながら、御同様の手持無沙汰さうな顔して、臺所の隅に立つて居るので、つい話が合ひ、たちまち仲よしに成つてしまつた。

けれどそんなに心配するがものはなかつたのよ。何しろ手のまはりきれないとこだったもんだから、出來なければ外の事は何にもしなくつていゝ。せめてお給仕だ

けなり、と云ふ約束で兩人とも、受持の座敷をあてがはれた。

もうこんなことぢや、遠慮やお人好大禁物、人の持つてる物を引たくつても、

自分の用さへかゝなげやいゝんですね。そんな事とは知らないから、初めの中正直で、事毎に面喰ひ、意外な事を叱られてあきました。エ、私の受持ですか。私のはね、裏のお離れの青柳様の御令息、と云ふと大層可愛げだけれど、もう三十近い方——と思つたら、それでまたお二十三ですと。驚いて了つた。紺飛白の單衣に黒メリンスの兵古帯、私の好きなお近眼鏡かけて、三分刈頭のさつぱりした學生風、この若様大學生よ、法科でね、お床の間一パイ金文字入りや皮表紙やをっづ高く積み上げて、年中シミの化物みたいに、書物にばかり食ついてゐらしやる。

むづかしいお顔あそばして、怖さうなお方ねえとは朋輩のとりさたで、平民的な

——いや味のない若様よ、久子さんは賞める。私にやどつちだかわからないが、兎に角この若様なればこそ、あんなトンカチにでも、御用がつとまつたんですわ。お

義姉様は御自慢で「常家ちや渡り者の摺れつ枯しなぞ、華族様の御前へは出させ  
 ん」と云ふ。成る程ね、華族さまこそ難有迷惑。私なぞ渡り者にくらべて何處がい  
 のか——、氣の利かぬ事だけはおびたいしいが。まづ第一にそのお離れの縁の雨  
 戸をね、どうも工合の悪い戸袋で、よ程氣をつけねば、四枚の戸が治り切らないん  
 です。が、つい氣の急ぐまゝ毎朝く〜ガタ〜云はせて持餘し、果は泣顔になるの  
 を、若様流石お見兼遊はしたんでせう。その後は毎朝御自分でお開けになつて、そ  
 れからお目ざめのペルをお押しになるの。母家ちや誰も知らないけれど、私あんな  
 り勿體なくて、途方にくれて了つたわ。もつともお友達がゐらつしやると、私を召  
 すまでもなく、御自身次の間に出て行らして、お茶をおいれ遊ばす程の方だから、  
 あまり若様く〜とかしづかれるのは、かへつてお煩かつたかも知れません。けれど  
 餘りだと思ふ時もある。それア滅多に口をお利になつたこともないんですもの、私  
 も無言で居る。お給仕の時なんかにはにらめくらよ。笑を含れたお顔つたら初めての

日、私が御挨拶申上げると、傍から久子さんが、

「どうぞ御遠慮なくお使ひ遊ばして——。誠に氣轉のい、御令嬢様で御座いますから……」

と笑つたので、

「左様か。いや僕はあんまり氣が利き過ぎちや困るからな、ハ、ハ、ハ、」  
と有仰つてじつとお見詰め遊ばした時つきり。

濃い御眉を少しひそめて、きと一文字に口を結んで、飽かず讀み入り給ふ法律書。ほんとに法科は野暮つたいのねえ。進さんがやつぱりこの通りでしたわ。御飯食べてもお箸をおくより早く、直ぐ机の前に坐りこんで了ふので、餘り素氣ないと恨んだこともありましたつけ。おや飛んだとこで？——おほ、おほ、おほ、御免下さい。

朝々御朝食前湖水でボートをおこぎになるので、その間にお掃除をすませ、牛乳を沸かし、パンを焼き、半熟卵をこさへたり、花活の水を代へたり、はア朝夕は

洋食でお晝餐だけが日本料理なの。あの岡持に入れて運ぶ風は、あんまり見よいのぢやないわねエ。私お吸物なんかあるとこばすまいとよけい一生懸命で、汗みづくに成つて了ふ。かゝる辛酸を誰が爲にする？ 思へば我ながら自分の物好が馬鹿馬鹿しい。つてまア悔むにはあたらなかつた。四五日するとその御弟君が行らつしやいました。

櫻の花の徽章の附いた、眞白い學習院の制服制で、ガラ／＼ガラツと二人曳の俵を、乗りつけらした勇しさ。おゝ青柳様の——と飛んで玄關へ駆け出た人達もその輝くばかりの品位に打たれて、手をつかへたまゝ平伏して了ひました。私は直ぐと小さな手荷物お受取申して先に立ち、お裏へ御案内する。

それや色の白のお鼻の高い髪の眞黒なお美麗な若様。まアなんて氣高い凛々しいお姿なんぞせう。お見上申した者は見合したやうに、「可愛い若様」つて夢見るやうな眼ざしをする。何だか自分の事のやうに嬉しかつた。

たとへば雨上り、朝日に燃ゆる新緑か、いきくと美しく勇ましく、ほんとに今光る君とも申上げたいくらゐを。

「武明ッ、武明ッ。」

とお兄様の呼び給ふが、ふさひ給はぬ。

若い青年がまた附の少い袖の大きい、人形の五寸も開いてる着物を着た風は頗るいゝものねえ。可愛くつて私大好なのよ。武明様のお洋服よかなはよくお似合遊ばす。お十八にしては随分更けてゐらつしやるけれど、人なつこい無邪氣な方で、急にお離れは賑やかにになりました。

御食事の時、お手をすべらしてコップを取落し給ひ、卓子から葡萄酒の小瀧が流れたので、私手早く手帕で拭ひ去つたが、おかげで白絹が薄紅く染つて了つた。これも記念とまだ大切に持つて居ます。

夜は十時を打つとお床をのべに行く。月やあらぬ、星や何處。後れ毛かき上げ乍

ら空打ちあふげば、折から颯と蘆の湖渡つて吹き来る夜風にいそがはしくまたく提灯の、火をとられじと兩の袂にひしとおほふて小走りに、のぞむ行途はぼうつと花やかな障子の灯かげ、この時はなかく詩的ですよ。

門にあふる、吹井の水音、立ちわぐ湖の波、白百合の香薫する床しいお座敷。

「若様」

とお次の間に頭を下げる私は、高髷に緋の帯でもやの字にしめで、薄化粧した優にやさしきお侍女なるべきを、ゆき短かな白飛白で思ひ切つた頭高の束髪……ちやアどうもね。

お床のべて雨戸をくり、行燈はお枕元に、晝のお召をちやんとたゝんで萬端手落なく、おやすみ遊ばせ、と申上げてすべり出る。

枕におつき遊ばすやもう直ぐに目を閉ち給ふ武明様が安らかな御寝顔。白羽二重に櫻の雫を潮したやう。「そらだき」の輝一さんは、屹度こんな美男だつたのでせ。

うねえ。

浪さんは華族さん窮屈で厭だつて云ふので二階のうけもち。書生さん達ばかりだから、平林さん〜で大變な評判よ。何でも浪さんでなければ…若山さんなど、他の女中ちや返事もなさらないんですつて。あのふくよかな大廂、華美なゆかたにヒハ色羽二重の帶胸高く、眉美しいハイカラ美人。チャキ〜の學校仕込で、しかもその明星とまで歌はれて居た人のことでも。若山さん達かレデー扱ひにするのは御道理だけれど、浪さんばかりが女中やあるまいし——のに餘り癪に障るわ。おほ〜、美人の美しい顔ばかりが人をチャームするものではなくつてよ。これでもね、またの逢瀬をかたく約してふり返り〜行つた、二本條の學生もありません。君ポートに行きませんか、素敵に重いオールで一人ちやこげないんですよ、なんてこれは早稻田の野球部の圖抜けて身體の大きい人が、かるく後から肩をたたく。

手紙の交換を願ひますよ、つて帯の間に名刺を入れられたり、馬鹿にしてる！とは思ふけれど、まさか久子さんのやうに火中の亡者として了ふにもしのびません。

年中雄辯をふるつて客を笑はせて、快活な人だと云はれて得意になつてる久子さん、時には私の手をとつて泣きます。青春の乙女とは云へ、もう一度燃えたつて冷やかな社会の水を浴びせられ、消えて了つた我が心ですもの、甘い戀を囁かれても、胸がどきともしませんわ。と云ふ。

熱き血潮の沸きかへる期、まだ花二十の處女の身で……。一種の悲劇ですわねエ。

「現し世の血は分けずとも、千代かけて姉と呼び妹と呼ぶるゝ身、五千萬なる人中にこれかりそめの縁でせうか」と誓ひ合つた間乍ら、やつぱり一緒に居て見れば氣性はまるで違ひます。私は私はうけた恨みは忘れぬけれど、どうしてもその人を

憎み通せない。まして他人から少しでも情をうけると、嬉しさが身にしんでやめられませんか。それは片親ながら愛に不足なく育つたおかげ。あゝつくづく思ひ知りました、優しい母様のあたゝかい御手に抱かれて居る私は幸福なでした。女学校へやつて貰へなかつた恨みなど申してはすみませぬ。人も泣ける内が花だとか、養女と名の附く久子さんは、どんなに辛いこと悲しいことがあつても、泣顔なんぞ見せられぬ身の上、人知らず失戀の痛手になやみながら笑つて暮す心の中……。

え、客種……さうね、此館には長逗留の避暑客が大半をしめて居ましたが、お晝食や一晚泊りの客もなか／＼多く、朝に三田の健兒を送つて夕に目白臺の貴公子を迎へ、商人、先生、美術家、軍人、あらゆる階級の者が舞ひこみます。あら、観だなんてなか／＼そんな間ありやしない。けれどまあ何しても學生が一番よう御座んすわ。溫和しくつて淡白で正直でね……二ツ飲んだ生卵の代拂ふのを忘れたつて、半里も行つたのに引返して來た人さへありました。どうも間の悪いものは新婚旅行

の御夫婦よ。なんぼ夫人がお大切だつて背の君がおいとしいつたつて、天地に二人の外は人をみとめない、つた風——。馬鹿くしいわ。

一體當主の兄様姉様が新しい學校の空気を吸つた方だね、些とも旅館の主人のやうぢやないんでせう。川島さん達は姉様のことを、奥さんくと云ふのですものそれで女中が親戚や知己の娘ばかり——と來てるから随分珍談もやりました。一度なんか箒木のおまぢなひを發見けられてね。とうく環ちやんが泣き出して丁つたわ。蟲の好かぬお客のとこへはお手が鳴つても聞えぬふり、おほくくあの肉慾の濁岩が顔へ吹き出たるお店者や、光る頭をべつたり分けたハイカラさんなんぞは、不深切な家だとさぞ驚いた事だらう。

が、決して服装やお茶代によつて、取扱ひに區別をつけるんぢやないから何と云はれたつていゝ。いゝえ、婦人の方はあまり見えませんわ。あ、さう、さう、ある時素敵な令嬢……が一人泊りました。後できけば女流音楽家の○○女史だつたさう

ですが、まあそのスタイルつたらないんですもの。思ひ切つて麻を出したお下げに藤紫の中廣リボンを結んで、目ざましい百合模様、お納戸色五ツ紋の縮緬の單衣、しかもそれが元祿袖でね、海老色琥珀の袴の穿方なら襟止輝、襟引つめて、凛としたその態度。白魚の指には人の目を射るダイヤの光り、華手なサック入りのヴァイオリン。私等の眼は光りましたね。あれ程悟り澄ました筈の久子さんさへがにこりともしせず眉を擧げて——。妬けたのよ。ほんとに。嫉妬心の權化と云はれても仕方がない、あゝ脆弱よ、汝の名は女なり！

奥平様——其後私は都合によつて奥平様附に轉任したんですよ。こゝはそれまでお鏡さんの掛りだつたがお實家からの電報に取ものも取りあへず歸つて了つたので急に動員に不足を生じ、變改を來して、涙を飲みつつ青柳様は環ちやんにゆづり渡して了ひました。は、松のお離れにお附の方とお兩方でお出遊ばすの。左様、あれで……お二十六七でせう。あのお裏の若様のやうに更け性の方つて澤山はないです

もの。やつぱり角帽スラウエーハットで五位様ごいさまは理科りか、お附つぎの桂木様かつらぎさまは駒場こまばの椋鳥さんむくどり、ほゝゝは流石さすがの私も角帽かくぼうには飽々あきあきして了つたわ。

この五位様ごいさま、同じ伯爵はくしやくでも青柳様あおやなぎさまの様ぢやありません、誠にまことにお氣輕きげろで私選わたしえんをまるでお友達ともだち扱あつかひ。けれど私は矢張やつぱり青柳様あおやなぎさま、もとの若様わかさまがおなつかしい。お裏うらの方かたが眺めながもよかつたし、第一だいいちこゝぢや毎朝まいあさあのボートからのお歸りかへりを待ち侘ひびびて、お縁えんに出でたりはいつたり、露草つゆくさふんで湖畔こはんに立つやうな詩趣しそは得えられない。環たまちゃんちゃんが朝々あさあさ棧橋せんきょうのところに、恍惚うつろ佇たたずんで居いるのを見ると嫉ねたしさにむらゝする。

あら、悪わるく取とつちや困こまるわ、何なんば何なんでも伯爵家はくしやくけの公迷きんまですからね、私わたしはね、華族くわぞくの次男坊じなんぼうなんか大嫌だいきらひ……と云度いひたいところだけれど、今度こんどばかりはまつたく恐れ入おそつて了しましました。お品ひんが違ちがひます、あの武明様たけあきさまがお美うつくしい中うちにも四邊あたりを拂はらふ御容色ごようしよくお生うみ遊あそばしたお母様かあさまは、どんな方かたかと惚しのばるゝ。

自分じぶんは朝晩あさばんのお世話せわ申上まをして居いた頃は、これ程ほどまでとも思おもはなんだが、もう他人ひと

の物、手さへともかぬ高根の花とのみ、見過ぐさねばならぬ身と成つて見ると、今更のやうに——見れば見る程、まア何と云つてよいか、一點の非の打どこのない若君様。凛々しくつて、お優しくつて、可愛くつて、勇ましくつて、星の御眼、臥蠶の御眉、きりゝとした細面、真白い頬にはいつも片唇、女のやうに化粧こそせぬがその天然のうるはしさ。そしてお兄様に對するお禮儀などの正しいこと、上品なお言葉遣ひ……。

何もね私、お氣に召さぬからとて交代させられたわけぢやなし。お役にたゝんからつて止められたわけぢやなし。別に愧づるところはない。と云ふものゝ何だか肩身のせまいやうな、横どりされたやうな氣がして面白くない。おまけにまた環ちやんが口癖のやうに武明様のことを、可愛い方、いゝ御縁綴、つて賞めるんだもの、あまり好い氣持はしないわ。慮める氣なんかぢやないけれど、つひ皮肉な事も云ひ度なる。それをまた朋輩が何のかんのと云ふ。

こんな小葛藤は絶えずあるんですよ。十六から二十一まですらり並んだ七人の――  
 何さま發育盛りの若い女達のことですもの。中で無邪氣なハイカラ浪さん、  
 同性同士ぢや見えもかざりもあつたものでなく、その食辛坊と來たらお話しだ。――  
 ーと云ふ私だつて夜御酒のついたお座敷へなんか出るとつい――おそく成つて時刻  
 が外れ、面倒くさいから食べすにすませて了つた事も度々ある。すると夜半にお腹  
 が空いて來て奥平様に頂いた懐中汁粉をそのまゝポリ／＼かじつたりなどしたが――  
 ーある時も食パンを買つて私にも分けてくれてね、二人寝しなに食べやうとしたら  
 お砂糖とにらんで臺所からそつと持つて來た蓋物の中が、食鹽だと云ふさわざ。べ  
 つたりつけてアングリやつたそのまゝ浪さんのお顔つたら……。かくれてする事だ  
 から笑ふにも笑はれず、かうして毎日バックの好材料ばかりやつて居るのよ。露子  
 さんと呼人のないのいつか寢言に、「お姑さん、武男さんは歸つたと思つたに……  
 ムニヤ／＼ムニヤ」と云つたとやら、それを久子さんが聞つけたとやらで「浪さん

浪さん一と弄かつたが、とう／＼浪さんが通稱になつて了つた。だけどこの浪さんはほんとの浪さんみたいなやせつぽちやないわ、小氣味よく肥つた——體格外かけても鬪協は確、自在未來の外、交官夫人、あら眞實よ。だから學校でもピアノと佛語で名高いんですつて。御良人を助けての活動振りも、この人なら屹度成功するでせう。交際社會の花とうたはれ、ロンドン市中やシャンジエリジエーの大道に、先を拂つて馬車自働車をかり、華手な洋装のスカート長う、かしこの夜會、この園遊會、併しどうもねえ……、羊羹が筆筒の曳出しにひそんで居たり、時々袂からドロップスをふりこぼすなどはチと——。ままいゝわ。西洋へ行けば、西洋料理は量が多くて食べきれぬから困ると云つた人があつたもの。

え／＼、コンパニーなど盛んでしたね、發起者はいつも浪さんです。久子さんは流石に苦い顔するがそれも、「一ついかゞ」とすゝめれば手を出さずには居ませんからね。

私と浪さんとは女中部屋でなく特別に久子さんの室へ同居を許されて居たの。蒲團部屋になつた六疊で古い書棚や箆笥が兩かには置いてあるから頗る薄暗く、それとのみの多いには閉口するが、一寸斯うかくれ間と云つたところで、帳場には遠いし、夜祕密軍議を開くなんぞにやおあつらへ向き。原案が通過すると買出し方は私か環ちやん。だつてお離れに召された風して驅け出して行くんですわ。もし留守の間にベルが鳴つたら大變と、氣が氣ちやありません。

辛いと云へば浪さんの眠がる事は一通りでない、それや誰だつてする分眠いわ。もう目の先には雲が掛つたやうで、いくら拂つても拂つても物がはつきり見えす、歩きながらふら／＼と居眠りして爐の中へすべりこんだり、廊下でいやと云ふ程鉢合せ、びつくり、どうも失禮、堪忍ね、と目をこすり／＼あやまつたら、なんの柱だつたなんと云ふ失策もあるけれど、浪さんみたい正體なしに成つて了ふなんかあんまりだ。お風呂から上つて裸のまま、そこらへ突伏して居る事は、毎度なんです

の。もつともおそくなるからね、早くて十一時、大概十二時をきゝます。私は母様への手紙を四晩も掛つて、三尺ばかりの飛白みたいなものが書けました。

朝だつて一番髪坊——、散々鼻をつまゝれ頬べたを突かれてやう／＼目をさまし床の上に取り直つちや兩手で顔をこすり／＼、あゝんとあくびをする風にいつもの吹き出させられて了ふ。

それが一時間の後にはちやんとお化粧すませて、一絲みだれぬ丸東に大蝶のやどつたやうな白リボン。スリッパする／＼と二階の廊下を歩き通ふ姿のハイカラさ。どうしてこの人が暗闇の床の中でお薩をかじつたりなぞすると見えませう。何と云つても美人にはかなはない。よしや容は深山がくれの朽木でも心の花が匂ふなら、ナニ愧ることがあらう——なんて云ふけれど、あれは負惜みですよ。男方の目指す處は—に美人あるのみ、なんでせう。學藝德行の如き、婦人にあつては賣口に大した影響は與へない、と云ふちやありませんか。また美を愛するは人の眞情ですか

らねエ!

女は先天的に美しかるべく、形づくられて居るんですもの、造化の神に織子抜ひをされた私なんか仕方がないが、それでも盛んにおしやれをして、せめて、少しなり天然の不足を補ふつもりよ、美貌論を排斥する人などはそれはみんな、自分の情を偽つて居るんですわ。

「あれは何と云ふのかい、クラシカルな丸ぼちやが居るぢやないか。美人だ!」  
と五位様の御意、口惜しいが恐れ入りました。

この奥平様の五位様、まして駄々つ子よ、世話が焼けてしやうがない。わざつとね、朝晩のお召替遊ばすにも後からお着掛け申さねば、手は通さぬものと定めてらつしやるんだもの。

ある時もけたまうべルが鳴る、急いで下駄つゝかけて駆け出して行くと、柱木様とお次の間の窓からのぞいて笑つて居らつしやる。また——と眉をひそめ乍ら、

何御用と伺へば、

「ボカン——」

ですつて。随分な！いきなり引返しかけると、

「おい／＼用があるから呼んだのだ、火鉢の火が消えかゝつてる。少し注意せんとお母様にいつけるぞ——」

「恐れ入りまして御座います……」

火鉢の傍へすゝみより、炭取引よせて火種をかき起し、故意にフツ／＼口で灰を吹き飛ばす。お兩方は驚いて顔をそむけ、

「何だ、花枝、亂暴な……」

「好い氣味。おほ／＼／＼」

「此奴め」

とたん不意にパチパチパチパチツ。

「おッ熱、あつ、まア火ン中へ目が飛び込んで……」

「エ、火ン中へ目が飛びこんだ。それや大變だ、目玉の黒焼？……」

「あらまア、よう御座いますよ」

と顔をあげてにらみ附けたが、

「アハ、、、、、、、」

釣りこまれて思はず、

「オホ、、、、、、、」

何か失敗があつたら手を打つて笑つてやらうと、待かまへて被居るんだから、油断も透もなりません。併し私もおとらずに随分減らす口をたゞくので、五位様から「トンネル」といふ名を拜領した。何でも切り抜けるのが上手だからだとは素敵だわね。だつて、花枝にはもう良人がきまつとるのか、の、その填めてる指環はエンゲーデリングだらう、のつて厭がらせを有仰つちやいぢめてはかり。ほんとに口悪

な五位様つたら、私あんな方大嫌ひよ、伯爵の人格も何もありませんわ、

が、ある時はありのすさびに憎かりき、と古への人も云ました。なくてぞ人のこひしきは、經机の女主人公のみならず、あゝある時は、ありのすさびにくかりける。

別れの一幕、本郷座あたりの舞臺にのぼせたなら、おそらく返子の海岸以上——  
だつたでせう。

「桂木様、明日お立ちで御座いますつてね、私、私、些とも存じませんでした。何故お歸りあそばすの……」

夕のお膳を運び出ていきなり云ますと、

「あゝもう僕は悲しくて悲しくて、飯も咽へ通らんよ、先刻から泣いて居る」

セルの袖でわざと眼鏡の曇をふきながら、

「察してくれ、花枝」

「お察し申上げますとも、よく今までこんな山の中に御辛抱下さいました。久しぶりて奥さまのお傍へお歸り遊ばすんですもの、お嬉しくておうれしくて、今夜はお目が合ひませんで。おほ、、、」

「何？ 馬鹿な！！」

「駄目よ、さうお顔に書いてあるんですもの、ね、五位様。おほ、、、」

「誰だつて歸りたくはないが仕方がないさ」

いつになくお眞面目で葦の灰をほとくと、

「なに、また来るよ」

「え、」

と顔を上げると、はからず視線が衝突して、あわてゝまた俯いたが、

「ほんたうに……」

「ほんとに来るさ、直き来るよ。此邊の秋はまた好いものだ。なア桂木」

「ほんとに屹度……お待ち申して居りますわ」

聲をふるはせた。私だつて四五日の後には家へ歸ります。今度お出あそばしたら、誰がお付き申すだらうと思ふと、もう、もう、一生此館の女中で暮したい……。じつと視詰めたお給仕盆の金蒔繪。だん／＼筒に包まれて、果はほろりと熱いものが頬を傳ふた。

「花枝」

「は、はい」

「今夜はお久ちやんと遊びにお出よ、お別れに話してもしやう、いゝか」

「恐れ入ります」

「屹度お出よ」

「はい」

その夜久子さんとは何つて、梨や葡萄をいたゞきながら月を賞して語りふかした力で

した。もうお寝み遊ばせ、と幾度となく申上げて、やつとお床をのべたら十一時、母家では二人が何處へ行つて了つたらうとさわいで居ました。

翌日は朝涼のうち、露をわけてのお立ちです。おまめで行らつしやるやうにと、いんげん豆のお猪口に尾頭附のお焼物、花枝のお給仕で食べるのもこれでお名残だねと箸をとられて、我知らずまた涙ぐんだ。

その中みんなが御禮を申上げにぞろ／＼来る。五位様は大学の正帽正服、脊高いお姿の見違ふばかり男らしさ。椛鳥さんもAの字の襟に光る制服着けて、しきりとカラゝを氣にしてゐらつしやる。玄關にはもう山籠二挺。

お靴はみがいて揃へておいたが、靴と共に屋根の上にしかと結ぶ。馬面、杓子面、盤臺面、駕昇だつて人間なのに、どれも／＼人四化六の面がまへ。

『五位様、お支度はよろしう御座います』

「花枝」

『あれ』

きゆつと手首をとつて握りしめてつと放し、唇に啣んだシガアの烟り、淡紫に曳きつゝさつさと立關へお立出になる。やがて桂木様もあとなる駕に潜りこんだ。

徳平さん(手代) はきよとくしながら

『お荷物はこれだけですか、お忘れ物はないかね』

『はアこれだけよ。桂木様、別にお忘れ物は御座いませぬね』

『ない』

『ぢやア行らうぜ』

曳しよと息杖とつて駕は一ゆり、早や宙に、一同も揉み手をしながら門に出た。

『御機嫌よろしく、何もおそまつ申上げました』

姉様がマダム巻の頭を俯けて丁寧な御挨拶。

『どうか是非またお出下さいます様！ 精々改良致します積りで……』

徳平さんの上つ調子、私は物をも云はず環ちやんとお美喜の手をとつて、

『お義姉様あの……』

『あゝ』行つてお出と眼で返争。三人は小走りに足を早めて、一緒に歩いて行つた。

『もう澤山よ花枝、何處まで行く。いゝ加減にせんと東京まで連れ行つて一ふぞ』

『随分よ桂木様、そんなにお邪魔ならもうかへります。さ、環ちやん』

と云つたが歩をとめて思はずひたとより

『五位様……』

『あ、花枝御きげんよう』

『健在でお出よ』

お二人の御會釋、私等はたゞ頭を下げた。苔の小路にしみ入るやうな足音もしつし

つ。山の巖々湧くは雲、咽ぶは水、見下す坂路のうねりくねり、下りは早い、もう逆

落しに坂を下へ！ さりゝさりゝゝりゝゝの谷間で鳥が鳴く。

私は手帕を顔へおし當てた。あゝ三日前青柳様のお立ちをみんなと共にお送り申した時、環ちやんに對する意地を立通し、堪へに堪へた涙がいま止度なく沸いて来る。

お裏のお離れにはその後松村男爵の御令息達が入らつしやいました。松のお離れは晝も戸を閉ぢたまゝでした。引留らるゝ袖ふり切つて私がこの山の中の町を辭したの日は九月の初旬、非常に風が吹いて湖水の波がまつ白く立さわいで居た日、久子さんは一人湖畔に立つていつまでも見送つて居ました。

人間は都合のいゝものでね、過去のことを追想すると苦しい事はみんな消えて、樂しかつた事ばかり残る。三十日の旅館生活も今思ひ出して見るやうな事はかりではありません、拭掃除から忙しけりや皿小鉢の洗ひ方、朝晩人の機嫌をとつて、寝るも起るも自由ならぬ……、随分情ない事も云はれました、口惜しい目にも遇ひました。なか／＼湖畔詩人を氣取つて居るわけには行きませんでした。——が、

あゝ箱根は一種の神祕的なところ。静かな晩、杉並木から湖にうつる月を見て、關

所ところのあとをさう歩あきたらば、知しらずに涙なみだがこぼれました。

また天てんも地ちも薄うすすりした夜、露も立てこめて夢ゆめのやうな湖こ上じやうから、水みづをかくオールのの音おとと高たからかな美うつくしい詩し吟げんの聲こゑを聞きいた時とき、ぞつ！戀こゝろ風かぜが身みにしみ渡わたつて……未いまだにあの床ゆかしさが忘わすれられませんか。

指ゆびきりをして再さい會かいを誓ちかつた、一かず高かうのOオさん、高かう商しやうのCシさん、私わたしもうあの約やく束そくは果はたせませんのよ。御ご主しゆ人じん持もちの身み、來きた年ねんの夏なつは何なに處どこの御ご別べつ莊じやうにお供ともして迎むかへることやら——。五位ご様さまはその後のちはんとに湖こ畔はんの秋あきをお訪とひになつたでせうか。

## ス 井 ー ト ホ ー ム 終

明明明明明明明明  
 治治治治治治治治  
 四四四四四四四四  
 十十十十十十十十  
 四四四四四四四四  
 年年年年年年年年  
 十十十十十十九九  
 二二二二二二二二  
 月月月月月月月月  
 廿十五廿十廿十  
 八日八日八日八日  
 九八七六五四三再發印  
 版版版版版版版版



發  
賣  
所

東京市日本橋區  
 本町三丁目

博文館

著者 內藤千代子  
 發行者 河岡勝  
 印刷者 山田英二  
 印刷所 博文館印刷所

內藤千代子  
 河岡勝  
 山田英二  
 東京市小石川區瀧口水道町四十六番地  
 東京市小石川區久堅町百八番地  
 東京市小石川區久堅町百八番地

定價金六十五錢

總發行所 東京市日本橋區本町三丁目  
 電話本局二六二〇番

内藤千

代子著

# ホネームーン

ト一キス價定  
じ同にム一ホ

誰か女流に天才なしと云ふや。内藤千代子其人の如きあるを奈何。未だ一度びも校門をくゞらず。文章の師につかず。而かも妙齡にして此の傑作を草す。

處女作『スキートホーム』はすでに好評湧くが如く、重版、また重版、底止する處を知らず、都下の女學生連は其の初版を珍重し『スキートホーム式』なる語すら生じたりと云ふ。反響の大なりし事以て推すべき也。

四十四年逝かんとするに際し、神興の感興はこの女天才の脳裡に泉の如く湧きぬ。突嗟筆をとりて成りしものは、ホネームーンの長編。舞臺を鹽原によりて、

密よりも甘く、月よりも清き情操は、滿紙に溢れて讀者をチャームせずんば止まず。加之、痛快なる華嚴以下、未だ會て世に出でざりしもの多々あり。まことに明治四十五年新春の好讀物。請ふ先頭第一に初版を購つて、名も美はしき新婚旅行の才筆に、酔はれん事を。

敬 白

▲卷頭 ホネームーン……………杉浦非水畫伯挿繪

▲華嚴 行

▲若き日の戯れ

▲現代の人より

▲逝く春の乙女

▲花つみの夢

▲コスモスの頃

▲希劇の一夜

▲紅 族 系

▲華 族 系

▲奇 葉 の 花

▲學生の部會

▲セラニウム

▲鴉 沼 日記

▲卷末 虚榮の都へ！(これしま)  
た長編

## 目 次

あゝ見よ四十五年新春の大産物!!

【行 發 館 文 博】

河岡潮風君著既刊

冒險 五州怪奇譚

壯快なる冒險探検奇聞を輯録す。小杉未醒君の挿繪錦上添花を添ふ

○鐵腕の船長 ○南國橫行記 ○海賊航走船 ○氷中別天地録 ○  
 黒手脅追状 ○シヤム象狩 ○痛快男子 ○比律賓の少年 ○辨々  
 海上暴行 ○ハワイ鱒獵 ○小便の十六日 ○響尾蛇の冒險 ○大  
 河突破四青年 ○ヘベレケ閣下 ○密貿易一行 ○沈み行く船の  
 悲劇 ○帝國水兵豹退治

全一冊 洋裝四六判  
 二色刷一枚挿繪七枚  
 正金五十錢  
 郵税金八錢

古今 東西 冒險英雄傳

著者一筆の文章英雄紙上に躍々たり。序文「山上語」は名文、挿繪は未醒君筆

全一冊 洋裝三六判  
 挿繪五頁  
 正金廿八錢  
 郵税金四錢

目次

○新世紀の恩人コロンバス ○黄金界の帝王 ○セシルローツ  
 ○猛獸の大英雄スタンレー ○印度遠征怪傑クライプ航海家  
 の巨頭マゼラン ○復讐將軍ハンニバル ○自由主領サンマル  
 テン ○南洋雄飛ゼームスブルック ○萬里遠征山田長政 ○殉  
 國英雄沖と横川 ○壯烈四士松崎と中山 脇と田村

博文館發行及發賣

種 數 刊 近 び 及

東 都 遊 學 學 校 評 判 記

全一册 四六列  
正金四十五錢  
郵税六錢(既刊)

新たに上京せんとする學生の爲め東都の活事情を知らしめんとす

書 生 界 名 物 男

全一册 四六列  
正金五十錢  
郵税六錢(既刊)

奇抜壯快の書、これのみは本郷京片町本郷書院發行

◎立志 之友 明 治 十 雄 傳

全一册 四六列 未發行  
正價 四六列 三百

◎實地 應用 少 年 雄 辨 術

全一册 三六列 三百八十八頁  
正價 金廿八 發行

河國潮風書、法學士田中夕照君共著

◎冒險 水 魔 征 伐

全一册 四六列 二百五十五頁  
正價 四六列 十二 發行

◎那 須 溫 泉 之 栞

正價 十五錢、郵税二錢

善 き 家 庭 の 讀 み 物

博文館  
編輯  
士  
森  
鷗外君  
序文  
谷  
小  
波  
君

序文

今井翠巖君著

▼新刊▲

博文館發行

最近  
調査

# 女子東京遊學案内

全一册 洋裝四六例美本  
紙數七頁  
各學校寫真版挿入  
正金五十八錢  
郵稅金拾錢

本書は都二百の學校を組織學則教授法リ監督法束脩月謝の細項に實地調査をなし、正確に最詳密に分ちて、説示は勿論將在東京に遊學する者まで、**必讀すべき絶好羅針盤**たるべく、又以て教育界の大勢、**學校**經營上**の参考書**なり。

●附録 最新東京實測明細地圖 購讀者特待券

## 本書目次

- ◎遊學者指針 1 △上京の準備 △學校の種類と選擇 △受験と入學の心得 △各學校修業の年限
- △學費の豫算 △上京の注意 △着京後の注意 △宿所の選擇 △衛生上の注意 △圖書館と博物館 △卒業後の心得
- ◎各種學校規則 1 △高等專門及高等普通女學校 △教育 △技藝及裁縫 △音樂及美術 △外國語學 △宗教及宗教主義 △醫學產婆及看護 △商業及簿記 △雜種

佳絶望眺りあ店支の個三は店弊

ものゝふの矢なみつくらふ小手の上に

霰たばしる那須の篠原

と源實朝が千古の名吟を詠じた那須野。

扇の的を射たる勇士那須野與一を生みたる那須野。

金毛九尾の狐が化の皮を剥がれたる那須野。

茶白山の噴煙は白雲につゞまり、春は躑躅に、秋は

紅葉。千變萬化の眺めは景色に目なれた外人でさへ

驚く位です。まして天與の靈泉、間斷なく湧出して、

精神上、肉體上の疾患を驅除します。

海拔三千尺なれば、頭腦をも健全にするでせう。すべ

てのお客様方の御來浴を伏して希上ます。

下野那須温泉

内湯 旅館 松川屋 さみ

すと言を潔清寧丁ひ扱取廉低格價

# 雜誌家庭之友の特色

- ▲日本の家庭雜誌中で一番古い歴史と經驗とを特つ點
- ▲書くところ穩健で高尚で面白い有益な材料を掲せる點
- ▲「スリートホーム」を讀む人は必ず本誌を御覽なさい

毎月一回

# 家庭之友

一日發行

振替東京三二四〇番  
東京市本郷區東片町  
新公論社

定價 郵金拾壹錢  
共六冊 金六十錢  
共十二冊 金壹圓八錢

發行部數も澤山で一方に偏せぬ故に主人にも主婦にも老人にも子供にも家庭一同が團樂して面白おかしく樂しみ乍らの讀物は本誌か一番です

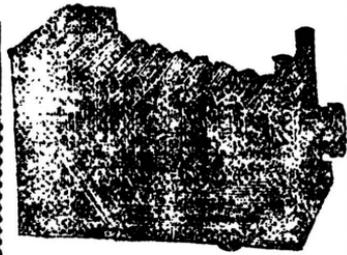
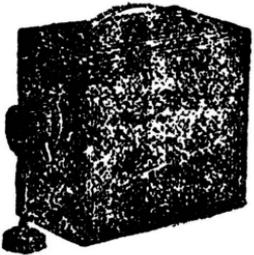
博通社 特賣品

最新式寫真機械

誰にでも寫せる取扱い頗る輕易にして然も精巧堅牢なり、如何なる初心者と雖ども必ず寫し損じなく携帶に頗る便且つ價格尤も廉なり

▶ 手提早取寫真器械 ◀

▶ 携帶用寫真器械 ◀



御手紙一本で何れも御求に應じます!!!

當社特賣品は博文館發行 月刊十八大雜誌に連月掲載してあります!!!

- 名刺形 (三脚付) 人物、景  
取梓、三脚、シヤツタ  
一式並寫真攝影法壹部附屬す
- 手札形 (人物、景色兼用) 手  
取梓、三脚、シヤツタ、  
一式並寫真攝影法壹部附屬す
- 甲種 特價八圓九十錢  
乙種 特價七圓五拾錢
- 甲種 特價四圓五拾錢  
乙種 特價三圓五拾錢
- 手札形 (人物、景色兼用) 手  
取梓、三脚、シヤツタ、  
一式並寫真攝影法壹部附屬す
- 甲種 特價五圓八拾錢  
乙種 特價四圓八拾錢

● 送附市内無内地參拾錢。樺。清。朝。十五錢 ●

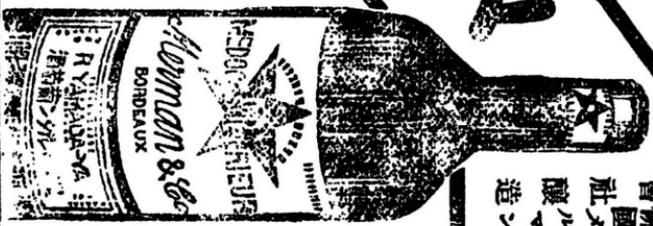
大橋メルー、オダー、ジブスネ

振替口  
電話  
東口  
京本  
東本  
區橋本日京東 區橋本日京東 區橋本日京東 區橋本日京東 區橋本日京東  
目丁一町本 目丁一町本 目丁一町本 目丁一町本 目丁一町本

博通社

ス井一トホームに缺ぐべからざる純良品!!!

佛國メレン  
會社醸造



食卓として

又薬用として

到る處の家庭に

愛用せられ

つゝあり

ア  
ル  
コ  
ー  
ル

分少く滋養

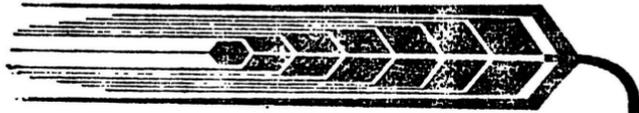
豊富なる葡萄酒

マ  
ル  
コ  
ー  
ル  
赤  
白  
葡  
萄  
酒



英橋 山田屋

# ルービンヘンジュミ



食事の前より用いて

消化を助け

仕事の後は用ふれば

元氣を回復す

アルコール分少く

滋養分多きは

女ビールの特色なり



麗なスキートホームは美なる  
 髪飾品装身具、有功なる香油  
 化粧品を以て最も美しく形づ  
 くらるゝのであります。

弊店は御儀式用櫛笄、最新  
 流行小間物、指環、帶止、殊  
 に柳清香油、けいし香油、雲  
 の上白粉、蘭の露煉白粉、香  
 水、美清化粧水、石鹼等總て  
 美身の具を取揃へ貴需に應じ  
 ます。

スキートホーム御愛蔵の淑女  
 方は是非弊店へ御枉駕の程を  
 願上けます、また電話にての  
 御用命は本局二百一番へ……



柳清香

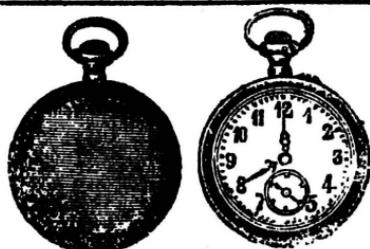


紳士  
 貴女用  
 フロラー  
 香水



東京日本橋區二丁目  
 柳屋本舗  
 電話本局二〇一

二十  
 廿  
 八  
 十  
 鐘



# 新流行婦人持時計

特價發賣

瑞西特製品にして、何れも新流行形の優秀高尚なる  
 金銀側時計なり器機は堅牢確實を主としあれば一  
 般婦人の實用時計として最も適當なり

各廿ヶ年保險付

拾八金側	拾四金側	銀側	銀側	銀側
兩蓋十三形石入シリンドル器機引出針廻し(中蓋付)	同	斜子側片硝子十三形石入アルクル器機引出針廻し	兩蓋十三形機石入シリンドル器機引出針廻し(中蓋付)	斜子側兩蓋十三形石入シリンドル器機引出針廻し
金參拾參圓	金貳拾五圓前	金八圓五十錢	金七圓五十錢	金六圓
梨地(鏡滑)側斜子側同價	同	兩蓋壹圓増	梨地(鏡滑)側彫刻側同價	片硝子同價

婦人持鎖 純銀 一圓半 十八金拾五圓 十八金總張五圓 赤銅貳圓 金張赤銅二圓半 金着二圓

(右二本立は三割増し頭掛は倍額)

●地方御注文は代金を振替貯金へ御拂込あれ(各地郵便局にて取扱)  
 ●代金引換小包郵便は前金五拾錢 ●郵券代用一割増 ●送料内地十二錢

宮内省御用達

## 金田時計店

東京須田町

振替貯金口座東三五六六番

電話本局九六五番

リセ荷着盤面兩シートクタス

# 印象比無界世



此の最良音譜を  
聞かざる  
人ありやう?

吉住 小三郎 長明  
海軍々楽隊 楽隊  
竹本 染太夫 竹本朝太夫  
豊竹 古切太夫、竹本 小清 義太夫  
竹本 叶太夫、豊竹 呂昇  
樂遊、重次、圓車、重松、 浪花節  
金子丸子清元、小さん小せん 落語  
金之助常盤津、圓太郎  
曲種 六百餘種

独三洋行株式会社  
東洋総代理店  
**三光堂**

定價表目錄は御  
一報次第贈呈

東京本店  
東京銀座一丁目  
長電話一九七九  
京橋一九七八

支店  
東京市淺草區木町  
長電話下谷九八八  
同市博多下四町  
電話五〇一  
北海道小樽區色内  
電話三三三  
大阪市南區船場  
四丁目  
長電話南三二八三